博士学位論文

コーパスを利用した日本語談話標識「でも」「だから」の使用に関する研究

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本言語文化専攻

陳　相州

平成２３年３月

本論文の第 3 章〜第 5 章は以下の論文に基づき、加筆・修正したものである。

第 3 章

・陳相州（2009）「日本語談話標識「でも」の韻律的特徴について」『第 19 回韓国日本語学会学術発表会予稿集』、pp.1-7、韓国日本語学会

・陳相州（2010）「韻律の観点から見た日本語談話標識「でも」の使用」『言葉と文化』11、pp.119-133、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻

第 4 章

・陳相州（2008）「日本語談話標識「だから」の韻律的特徴に関する一考察」『表現研究』88、pp.64-73、表現学会

第 5 章

・陳相州（2009）「中国語母語学習者の「でも」の会話使用に関する横断研究-使用位置及び共起表現を中心に」『2009 年度日本語文学国際学術シンポジウム論文集』、pp.292-299、台湾日本語文学会

・陳相州（2010）「中国語を母語とする日本語学習者の会話における「でも」「だから」の使用-使用位置及び共起表現を中心に」『台湾日本語文学報』27、pp.267-291、台湾日本語文学会

目次

第 1 章　序論 1

1.0. はじめに 1

1.1. 研究の目的 7

1.2. 本論文の構成 8

第 2 章　先行研究 10

2.0. はじめに 10

2.1. 談話標識の定義 11

2.2. 日本語の「でも」に関する先行研究 14

2.2.1. 岩澤（1985）とクワンチャイ（1999）の研究 15

2.2.2. 曺（1996）と日野（2003）の研究 22

2.2.3. 日本語の「でも」と音声的実現 29

2.3. 日本語の「だから」に関する先行研究 31

2.4. 日本語学習者の接続表現の使用に関する先行研究 36

2.5. 本論文での新たな取り組み 37

第 3 章　日本語談話標識「でも」に関する考察 40

3.0. はじめに 40

3.1. 分析資料 40

3.2. 分類 41

3.3. 韻律的特徴 45

3.3.1. 持続時間長 47

3.3.2. ピッチ変動 49

3.3.3. 考察 52

3.4. 日本語談話標識「でも」の談話機能の再考 53
3.4.1. 対立予告 54
3.4.2. 話題移行 59
3.4.3. 「でも」の意味拡張に関する検討 62
3.5. 本章のまとめ 63
第 4 章　日本語談話標識「だから」に関する考察 67
4.0. はじめに 67
4.1. 分析資料 67
4.2. 相互作用の観点からの分類 67
4.2.1. 【聞き手認識十分】の場合 69
4.2.2. 【聞き手認識不十分】の場合 73
4.3. 韻律的特徴 77
4.3.1. 持続時間長 78
4.3.2. ピッチ変動 81
4.3.3. 考察 84
4.4. 日本語談話標識「だから」の談話機能の再考 85
4.4.1. 結論提出 86
4.4.2. 理解要請 90
4.4.3. 「だから」の意味拡張に関する検討 93
4.5. 本章のまとめ 95
第 5 章　中国語母語学習者の会話における「でも」「だから」の使用位置及び共起表現に関する考察 98
5.0. はじめに 98
5.1. 分析資料 99

5.2. 調査対象者 100
5.3. 分析方法 101
5.4. 使用概況 102
5.5. 使用位置及び共起表現の種類についての説明 104
5.6. 日本語談話標識「でも」の使用状況 109
5.6.1. 使用位置 109
5.6.2. コレスポンデンス分析による共起表現の解析 110
5.6.3. 本節のまとめ 114
5.7. 日本語談話標識「だから」の使用状況 115
5.7.1. 使用位置 115
5.7.2. コレスポンデンス分析による共起表現の解析 116
5.7.3. 本節のまとめ 120
5.8. 考察 121
5.9. 本章のまとめ 126
第 6 章　中国語母語学習者の会話における「でも」「だから」の音声的実現に関する考察 128
6.0. はじめに 128
6.1. 分析資料 128
6.2. 分類 129
6.3. 音響分析 130
6.4. 日本語談話標識「でも」の音声的特徴 131
6.4.1. 持続時間長 131
6.4.2. ピッチ変動 136
6.4.3. 本節のまとめ 142

6.5. 日本語談話標識「だから」の音声的特徴 143
6.5.1. 持続時間長 143
6.5.2. ピッチ変動 148
6.5.3. 本節のまとめ 154
6.6. 考察 154
6.7. 本章のまとめ 155
第 7 章 結論 157
7.0. はじめに 157
7.1. 主な研究結果 157
7.2. 日本語会話教育への応用 162
7.3. 今後の課題 165
引用文献 167
付録資料ー宇佐美（2003）の文字化原則 174

図表一覧

<図>

図 1　「でも」による話題のシフト（日野, 2003：85）.....26

図 2　CSJ の対話収録の状況 41

図 3　「でも、あのーあんまり」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム

.....46

図 4　各場合の「でも」の発話持続時間長の変動（n=11）.....47

図 5　各場合の「でも」の 1・2 拍間のピッチ変動幅（n=11）.....50

図 6　例 29 の「でも」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム 55

図 7　例 30 の「でも」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム 57

図 8　例 31 の「でも」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム 58

図 9　例 32 の「でも」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム 60

図 10　例 33 の「でも」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム.....62

図 11　音声による情報伝達過程の模式図（前川・北川, 2002：48）.....64

図 12　【A と否 A の関係あり】の場合における「でも」の伝達過程の模式図

.....65

図 13　【A と否 A の関係なし】の場合における「でも」の伝達過程の模式図

.....66

図 14　「だから、今日」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム 77

図 15　各場合の「だから」の発話持続時間長の変動（n=11）.....79

図 16　各場合の「だから」のピッチ変動幅（n=11）.....82

図 17　例 40 の「だから」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム.....87

図 18　例 41 の「だから」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム.....89

図 19　例 42 の「だから」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム.....91

図 20　例 43 の「だから」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム.....93
図 21　【聞き手認識十分】の場合における「だから」の伝達過程の模式図..96
図 22　【聞き手認識不十分】の場合における「だから」の伝達過程の模式図
.....97
図 23　コレスポンデンス分析の結果による「でも」の散布図.....112
図 24　コレスポンデンス分析の結果による「だから」の散布図.....118
図 25　中級学習者が各場合に使用した「でも」の長さの変動（n=13）.....132
図 26　上級学習者が各場合に使用した「でも」の長さの変動（n=5）.....134
図 27　中級学習者が各場合に使用した「でも」のピッチ変動幅（n=13）..137
図 28　上級学習者が各場合に使用した「でも」のピッチ変動幅（n=5）....140
図 29　中級学習者が各場合に使用した「だから」の長さの変動（n=6）....144
図 30　上級学習者が各場合に使用した「だから」の長さの変動（n=4）....146
図 31　中級学習者が各場合に使用した「だから」のピッチ変動幅（n=6）.149
図 32　上級学習者が各場合に使用した「だから」のピッチ変動幅（n=4）.152
図 33　「でも」の場合別音声実現の比較 158
図 34　「だから」の場合別音声実現の比較 160

<表>

表 1　接続詞とディスコースマーカーの区別.....13
表 2　諸先行研究の考察済み及び未考察の項目の一覧.....38
表 3　「でも」の各拍の持続時間長（ms）に関する場合の比較（n=11）.....48
表 4　日本語母語話者が使用した「でも」の各拍の場合の長さの比較.....48
表 5　「でも」の最高値と最低値（st）に関する場合の比較（n=11）.....50
表 6　日本語母語話者が各場合に使用した「でも」のピッチ変動の比較 51

表 7　日本語母語話者が各場合に使用した「でも」の最高値と最低値の比較 51
表 8　「だから」の各拍の持続時間長（ms）に関する場合の比較（n=11） ..80
表 9　日本語母語話者が各場合に使用した「だから」の持続時間長の比較 ...80
表 10　「だから」の最高値と最低値（st）に関する場合の比較（n=11） 82
表 11　日本語母語話者が各場合に使用した「だから」のピッチ変動の比較..83
表 12　日本語母語話者が各場合に使用した「だから」の最高値と最低値の比較 83
表 13　各グループの異なり形態素数及び延べ形態素数 102
表 14　各グループが使用した接続詞の異なり頻度及び延べ頻度.....102
表 15　各グループが多く使用した接続詞及び使用割合（%） 103
表 16　各グループが発話冒頭部と発話中途部で使用した「でも」の度数...109
表 17　「でも」の発話冒頭部及び発話中途部における共起表現の使用度数 110
表 18　「でも」の場合における各グループのカイ 2 乗距離 113
表 19　「でも」の場合における各グループのプロファイル 114
表 20　各グループが発話冒頭部と発話中途部で使用した「だから」の度数 116
表 21　「だから」の発話冒頭部及び発話中途部における共起表現の使用度数 117
表 22　「だから」の場合における各グループのカイ 2 乗距離.....119
表 23　「だから」の場合における各グループのプロファイル.....119
表 24　各グループの「でも」「だから」の使用位置と共起表現の使用特徴 .127
表 25　「でも」の各拍の持続時間長（ms）に関する場合の比較（中級 n=13） 133
表 26　中級学習者が使用した「でも」の各拍の場合の長さの比較 134
表 27　「でも」の各拍の持続時間長（ms）に関する場合の比較（上級 n=5）

.....135
表 28　上級学習者が使用した「でも」の各拍の場合の長さの比較 136
表 29　「でも」の最高値と最低値（st）に関する場合の比較（中級 n=13）138
表 30　中級学習者が各場合に使用した「でも」のピッチ変動の比較 138
表 31　中級学習者が各場合に使用した「でも」の最高値と最低値の比較...139
表 32　「でも」の最高値と最低値（st）に関する場合の比較（上級 n=5）.141
表 33　上級学習者が各場合に使用した「でも」のピッチ変動の比較 142
表 34　上級学習者が各場合に使用した「でも」の最高値と最低値の比較...142
表 35　「だから」の各拍の持続時間長（ms）に関する場合の比較（中級 n=6）
.....145
表 36　中級学習者が各場合に使用した「だから」の持続時間長の比較.....146
表 37　「だから」の各拍の持続時間長（ms）に関する場合の比較（上級 n=4）
.....147
表 38　上級学習者が各場合に使用した「だから」の持続時間長の比較.....148
表 39　「だから」の最高値と最低値（st）に関する場合の比較（中級 n=6）
.....150
表 40　中級学習者が各場合に使用した「だから」のピッチ変動の比較.....151
表 41　中級学習者が各場合に使用した「だから」の最高値と最低値の比較151
表 42　「だから」の最高値と最低値（st）に関する場合の比較（上級 n=4）
.....152
表 43　上級学習者が各場合に使用した「だから」のピッチ変動の比較.....153
表 44　上級学習者が各場合に使用した「だから」の最高値と最低値の比較154
表 45　中級学習者と上級学習者の「でも」「だから」の音声的特徴.....155
表 46　諸先行研究の考察済み及び未考察の項目の一覧（表 2 の再掲）.....158

第 1 章　序論

1.0. はじめに

本論文は日本語談話標識[1]「でも」「だから」の記述的研究である。従来の研究では、日本語の「でも」「だから」は先行文脈の内容を受け、逆接や順接のような後続文脈の展開の方向性を示す接続詞として扱われてきた。日本語の「でも」「だから」について、『教師と学習者のための日本語文型辞典』には次のような用例と説明が記述されている。

例 1　友達はプールへ泳ぎに行った。でも、私はアルバイトで行けなかった。
例 2　踏切で事故があった。だから、学校に遅刻してしまった。
（『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

『教師と学習者のための日本語文型辞典』の説明によると、例 1 の「でも」は文頭に用いてそれより前に述べられたことと相反することが続くことを表すものであり、例 2 の「だから」は前の文を原因・理由・根拠として、そこから結果として導き出される帰結を述べるものである。しかし、例 3 と例 4 のように、会話では逆接関係で説明できない「でも」と因果関係で説明できない「だから」の用例も存在する[2]。

[1] 第 2 章で詳しく説明するが、本論文では「談話標識」を情報の結束性以外に、会話管理や命題に関する主体の態度を示す言語コードであると定義している。
[2] クワンチャイ（1999）で論じている「でも」の逆接ではない用法と萩原（2007）で論じている「だから」の因果関係を表さない用法を論じた先行研究は第 2 章で紹介する。

例 3　【A と B は待ち合わせのレストランで窓の外を眺めている】

A：いい席が取れてよかったわ。

B：でも C さん、遅いね。

（作例）

例 4　【A と B が口喧嘩をしている】

A：なんで迎えに来てくれなかったの？

B：だから、時間がなかったんだよ。

（作例）

例 3 の「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間に、「家を早く出た–遅い」のような関係が存在しないため、「でも」の逆接用法ではないと考えられる。この例の「でも」はむしろ話題を転換するために使用したものと考えられる。話題を転換するためであれば、例 5 のように「ところで」、「そういえば」と交換可能であると考えられる。しかし、岩澤（1985）は、「でも」のような逆接の接続詞が話題の転換の際に使われると、話の中断感を与えず、話題の転換をソフトに運べる利点があると説明している。

例 5　【A と B は待ち合わせのレストランで窓の外を眺めている】（例 3 の一部再掲）

A：いい席が取れてよかったわ。

B：{でも／ところで／そういえば} C さん、遅いね。

一方、例 4 については、「だから」が連結した先行発話と後続発話には、「だ

から」の一般的用法である「原因–結果」の関係が成り立たないため、「だから」の因果関係を表す用法ではないと考えられる。この例の「だから」は自分の主張を強く表現するため、押し付けがましく、失礼なニュアンスを伴うことが多い。メイナード（2005）はこのような「だから」の用法について、「それは「だから」の原因–結果という関係を借りて、あたかも論理的であるかのように偽装して表現することによる強引さによる」（317 頁）と述べている。

上述したように、会話において「でも」は逆接ではない用法として使用されることがあり、「だから」は因果関係を表さない用法も存在している。会話は時間を追って形成されていくものであり、聞き手に理解させやすくするために、会話で「でも」の逆接／非逆接用法と、「だから」の因果関係／非因果関係を表す用法を即時に聞き手に分からせる音声のシグナルがあると考えられる。例えば、例 4 のような苛立ちを表す場合の「だから」は、一般の因果関係を表す場合の「だから」と異なった韻律的特徴を有すると考えられる。

「でも」は相手の発話内容を否定するという性質をもち、「だから」はわかりきった事柄だと捉えている姿勢を示すことになるため、会話において不用意に使用すると「非友好的」や「攻撃的」などのような印象を与え、場合によっては人間関係を損なう可能性がある。したがってこれらは、ほかの接続詞よりも解明の緊急性が高いと考えられるため、本論文では会話で使用する「でも」「だから」を研究対象とした。また、本論文では会話で頻繁に使われている「でも」「だから」を談話レベルで再考すると同時に、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者が実会話で使用する「でも」「だから」の差異を考察することにする。

日本語学習者は新村（1996）や近藤（2004）などの先行研究でも指摘されているように、口頭で「でも」「だから」をよく使用している。しかし、倉持・鈴

木（2007）が指摘したように、日本語学習者と会話を交わす際に日本語母語話者に不自然さを感じさせる理由の 1 つは日本語学習者の接続詞の使い方が日本語母語話者とかなり違うことである。次の例 6 と例 7 は中国語を母語とする日本語学習者が実際の会話で使用した用例である。

例 6　[KY コーパス、CA01[3]]

【ロールプレイ：S は環境科の係員で、T は S の上司。課題は花の予算についての交渉】

T：　でも、もう十分あれは美しいでしょう、あれだけ花がいっぱい、たくさん、道路に咲いてるのに、まだいりますか、十分きれいですよ。

S：　でも、アンケートによりますと、何かあの、そっちは緑が多いですから、赤いのが、あの、黄色いとかそういう色が、鮮やかな色がその通りは、あの朝とか、あの午後の 5 時からなじのとき、あの、サラリーマンが駅から、たくさんな方が、あの、はな、あのう、歩いて、来ますから、それをみんなあのう、仕事も忙しいし、電車のなかラッシュアワ–ときも、けっこうストレス溜まったと思いますから、そういう、あの鮮やかな色とか、そういうみったらあのう、ストレスちょっと解消できます、と思ってます。

[3] CA01 のような「2 つのローマ字＋2 桁の数字」という番号を通し、被験者の母語と OPI における言語能力の判定結果がわかる。1 つ目のローマ字は被験者の母語を表し、英語（E）、中国語（C）、韓国語（K）である。2 つ目のローマ字は OPI の判定結果で、初級（N）、中級（I）、上級（A）、超級（S）である。最後の 2 桁の数字は同じ母語で同じレベルの被験者内での通し番号である。

例 7　[KY コーパス、CIM05]

【ロールプレイ:隣の部屋にいるＴがうるさくてＳは勉強に集中できないから、隣の部屋のドアをノックする】

Ｓ：　あの、すいませんですが、〈えーえー〉いつもあのいろんな、んと、音がでてきてでて〈ええ〉でてでてきて、だから私はあの明日最近は授業、あっ何かテストが、〈ええ〉ありますので、〈はーはーはー〉えっといつも音音がでてきてなりませんので、落ち、落ち着かない、落ち着かないので、〈えーえー〉だから、あの、何か少しちょっと、〈ええ〉あと、んー小さく、静かにしていいかな。

Ｔ：　あっううるさいですか？

Ｓ：　あのうるさいんじゃないけど、〈えーえー〉あのちょっとあの声がちょっと少しだけ、〈あーあー〉大きくて〈あー〉だからちょっとあの、私はテスト、だからテストがあるから、〈えーえー〉うん、ちょっといらいらしています、もし、普通なら大丈夫ですよ、〈あー〉はい。

例 6 では、「花の数量はもう十分だから、予算を増やす必要がない」という T の意見に対し、学習者 S は直接に「でも」で反論を示し、「アンケートの結果によると、鮮やかな色の花がもっとあった方がいいので植えてほしい」という意見を主張する。このように直接に「でも」を使って相手の発話を受け、反論を示す行動自体は相手の心情を害し、人間関係を損なってしまう危険性を伴うものと考えられる。他方、例 7 の全体の交渉過程から見ると、学習者 S がスムーズにしようとする態度が窺えるが、どのように説明や交渉した方が適切なのかを考えて言いよどんだときに、学習者 S は「だから」を多く使用した。しかしながら、浜田（1997）と山根（2002）も述べているように、言いよどんだとき

の「だから」の使用は逆に聞き手に不快感を招いてしまう恐れがある。

例 6 と例 7 に見られた日本語母語話者と異なった日本語学習者の使い方のほかに、日本語教育で特に注意しなければならないのは、会話で「でも」「だから」を使用する際の音声的実現である。

音声によるコミュニケーションを行う際、文字言語の場合と異なり、音声から来る影響で摩擦が生じることがある。その原因の 1 つとしては、音声の韻律的特徴に関わるものが挙げられる。声の韻律を間違って使用すれば、ディスコミュニケーションが生じる可能性があると考えられる。ところが、従来の日本語教育では単音の指導のみにとどまり、韻律を併せた指導がほとんどなされていない。

会話で使用する「でも」の逆接／非逆接用法と、「だから」の因果関係／非因果関係を表す用法には日本語母語話者の発音に明確な違いがあると考えられるが、「でも」「だから」の韻律指導を受けたことのない学習者が両者の相違を習得することは困難であると考えられる。しかしながら、日本語の「でも」「だから」の会話使用において、日本語学習者と日本語母語話者の異同を調べた研究が少なく、更に日本語学習者が使用する際の韻律的特徴まで考察しているものはまだ見当たらない。したがって、日本語学習者が実際のコミュニケーションの中で、如何なる韻律的特徴を伴いながら日本語の「でも」「だから」を使用しているか、また日本語母語話者とどのように異なっているか、を明らかにする必要があると考えられる。

そこで、本論文では日常会話で多く使用されている「でも」「だから」を取り上げ、日本語母語話者が会話で日本語の「でも」「だから」を使用する際の実態を明らかにし、中国語を母語とする日本語学習者の実会話での使用を日本語母語話者の場合と対比分析しながら考察していく。

1.1. 研究の目的

本論文の目的は次の 2 点に集約できる。

（1）従来ほとんど研究されてこなかった日本語談話標識「でも」「だから」の音声面について分析し、日本語談話標識「でも」「だから」の音声的実現と談話機能の対応関係を考察する。

（2）中国語を母語とする学習者（以下、中国語母語学習者）が会話で日本語談話標識「でも」「だから」を如何に使用しているか、またその使用は日本語母語話者とどのように異なるかについて考察する。

これらの研究課題について分析することで、日本語の社会・文化集団の中で、日本語談話標識「でも」「だから」が如何に使用されているかが明らかになる一方、中国語母語学習者と日本語母語話者との接触場面で起こり得る誤解も予測することができると考えられる。

一方、Campbell（2000）が指摘したように、実験室的環境で収録された音声と、日常のコミュニケーションの中で対話相手とインタラクティブに構築される自然発話の音声との間には、大きな隔たりがあり、実験室的環境で収集された音声は実験室的環境における音声でしかない。そのため、本論文では自然発話を大量に収録したコーパスを用い、発話者が日常で自発的に発した音声を分析データとし、この 2 つの研究課題について考察する。

1.2. 本論文の構成

本論文は、序論、先行研究、本論、結論から構成されている。

序論に続く第 2 章の先行研究では、まず談話標識の定義を示した後、日本語の「でも」に関する先行研究、日本語の「だから」に関する先行研究、日本語学習者の接続表現の使用に関する先行研究を概観し、本論文での新たな取り組みを説明する。

本論の第 3 章は、日本語談話標識「でも」の韻律的特徴と談話機能を研究対象にしたものである。まず、日本語談話標識「でも」を考察するにあたって使用した分析資料を説明する。次いで、日本語談話標識「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間に対立関係があるか否かに重点を置き、先行研究がいう「でも」の 4 つの用法を再分類する。更に、それぞれの場合に現れる日本語談話標識「でも」の韻律的特徴を考察する。最後に、日本語談話標識「でも」に対して行った音響分析の結果に基づき、日本語談話標識「でも」の談話機能を分類しつつ、それぞれの談話機能を述べる。

本論の第 4 章は、日本語談話標識「だから」の韻律的特徴と談話機能を研究対象にしたものである。まず、日本語談話標識「だから」を考察する際に使用した分析資料について説明をする。次いで、相互作用の観点から日本語談話標識「だから」の使用の分類法について述べる。更に、それぞれの場合の用例と韻律的特徴を分析して考察する。最後に、日本語談話標識「だから」の使用における韻律的特徴に基づき、話し手が使用する日本語談話標識「だから」の談話機能を分類しながらそれぞれの談話機能について説明を行う。

本論の第 5 章は、各日本語レベルの中国語母語学習者が日本語談話標識「でも」「だから」を使用する際の生起位置と共起表現を、日本語母語話者の場合と比較しつつ考察するものである。まず、分析資料、調査対象者と分析方法を示

す。次いで、使用位置と共起表現の種類について説明する。最後に、コレスポンデンス分析の手法を用い、各日本語レベルの中国語母語学習者が使用した日本語談話標識「でも」「だから」の使用位置と共起表現の特徴を分析して考察する。

本論の第 6 章は、各日本語レベルの中国語母語学習者が実会話で日本語談話標識「でも」「だから」を使用する際の音声的実現に焦点を当て、日本語母語話者との相違を明らかにするものである。まず、分析資料、分類と音響分析を説明する。それから、各日本語レベルの中国語母語学習者が使用した日本語談話標識「でも」「だから」の音声的特徴を明らかにし、日本語母語話者との相違点を考察してまとめる。

本論に続く第 7 章の結論では、本論の議論を総括し、日本語会話教育への応用と今後の課題について述べる。

第 2 章　先行研究

2.0. はじめに

日本語談話標識を音声的観点から考察した研究として、川森・川端・島津（1995）が挙げられる。川森・川端・島津（1995）は対話理解に資することを目的として、日本語音調への音韻論的アプローチについて検討を加え、その結果を使って日本語の応答的標識語「はい」「ええ」「うん」、フィラー的標識語「あのー」「えーと」と接続的標識語「というと」「で」の音調的特徴を考察した。川森・川端・島津（1995）はこれらの談話標識語について次のように述べている。

> これらの談話標識語が、会話に頻繁に使われているにもかかわらず、ほとんど認識されることがないということである。このことは、談話理解ということを考えた時に、興味深い現象であると同時に大きな問題となる。また、逆に談話標識語の働きを調べることによって、人間の談話理解についてのヒントや技術的な知見を得られるかも知れない。
>
> （川森・川端・島津，1995：54）

音声面からの考察を行った結果、接続的標識語の特徴は、① 発話の最初の下がりが少ないか、ほとんどない、② 平坦な音調が続く、③ 大きく下がることなく、H&[4]で終る、と結論づけられている。談話標識の韻律変化に着目した川森・川端・島津（1995）は示唆的であるが、日本語談話標識「でも」「だから」の音声的実態、機能、そしてこれらの対応関係の詳細な分析や記述は管見の限り見

[4] 高低の中間の音調として表す。

当たらない。

日本語の「でも」または「だから」を対象としたアプローチは多岐に渡っており、この章ですべての先行研究を網羅して紹介することはしない。本論文は、従来の研究で考察されなかった日本語談話標識「でも」「だから」の談話機能と音声的実現との対応関係及び、中国語母語学習者と日本語母語話者の使い方の相違を考察するものであるため、次の点に絞って先行研究を概観する。

まず 2.1.では、談話標識という概念を説明し、本論文での定義を示す。次いで、話し言葉を分析対象とした本論文に関連する先行研究を「日本語『でも』に関する先行研究」、「日本語『だから』に関する先行研究」と「日本語学習者の接続表現の使用に関する先行研究」の 3 つに分け、次の 2.2.、2.3.、2.4.で概観する。最後に、2.5.で諸先行研究における考察済みの項目と未考察の項目の一覧表を提示し、「本論文での新たな取り組み」について説明を行う。

2.1. 談話標識の定義

会話者間の相互作用という観点から、実際の会話を対象とする研究が増えてきた。こうした研究により、従来の研究で接続詞として扱われてきたものは実際の会話場面では多様な振る舞いをしていることがわかってきた。その代表的な研究に Schiffrin（1987）がある。

Schiffrin（1987）はこのような談話の進行において重要な役割を担っている要素をディスコースマーカー（discourse markers）と呼び、それを“members of a function class of verbal（and non-verbal）devices which provide contextual coordinates for ongoing talk”（進行中の談話に文脈上の位置付けを与える言語（非言語）による機能的な装置）と定義している（41 頁）。そして、社会言語学的インタビュー

（sociolinguistic interview）という手法で収集した談話データを用い、and、but、so、because などの英語のディスコースマーカーがどのように会話の理解に役立つか、どのような機能を有しているかを明らかにしている。また、ディスコースのモデルについて、Schiffrin（1987：24-29）は the participation framework（参与構成）、the ideational structure（観念構造）、the information state（情報状態）、the action structure（行為構造）、the exchange structure（交替構造）の 5 つのフレームに分類し、ディスコースマーカーはこの 5 つのモデルで指示の役割を担っていると述べている。更にディスコースマーカーになる条件として、文から分離することができること、発話頭によく使用されること、多様な韻律的表現をもつこと、談話のローカルとグローバルレベルにおいて運用できること、という 4 点を挙げている（Schiffrin 1987：328）。

接続詞とディスコースマーカーの区別については、Schiffrin（1987：316）は“The primary functions of all the conjunctions are in idea structures. But each conjunction also has additional functions in other components of talk”（全ての接続詞の根本的な機能は観念構造にあるが、会話の別の構成要素ではそれぞれの接続詞はさらに付加的な機能を持つ）と述べている。同様に、van dijk（1979）は会話で使用される接続詞について、接続詞のもつ意味論的接続詞（semantic connectives）としての用法とは別の、発話行為間の関係を表す語用論的接続詞（pragmatic connectives）としての用法も持つと説明している。このような意味論的用法と語用論的用法をもつ会話で使用される接続詞は、会話を分析対象とした研究では、ディスコースマーカーとして扱われる。接続詞とディスコースマーカーの区別は次のようにまとめられる。

表 1　接続詞とディスコースマーカーの区別

接続詞	ディスコースマーカー
文章レベル	談話レベル
意味論的用法	意味論的用法＋語用論的用法

Schiffrin（1987）の研究が世に出てから、ディスコースマーカーに対する言語学者の関心が更に高まることになった。しかし、ディスコースマーカーという概念に対して諸先行研究が使用した術語は様々である。例えば、cue words（Rouchota, 1996）、discourse markers（Schiffrin, 1987；Maynard, 1989；Fraser, 1990；Fraser & Malamud-Makowski, 1996；Schourup, 1999；Fraser, 2006；Stenstrom, 2006）、discourse connectives（Blakemore, 1987；Blakemore, 1992）、discourse indicator（Maynard, 1993）、discourse particles（Johansson, 2006）、pragmatic connectives（van dijk, 1979）、pragmatic markers（Fraser, 1996；Aijmer & Simon-Vandenbergen, 2006；Downing, 2006）、pragmatic particles（Östman, 2006）、sentence connectives（Halliday & Hasan, 1976）などの用語が存在する。これらの中では、discourse markers が最も普通の術語として多用されており、日本語の場合では、「談話標識」と訳して使用する先行研究が多く見られる（小田，1993；椙本，1993；谷崎，1994；林，1999a；林，2000；稗田，2003；広瀬，2003 など）。本論文では、先行研究に倣ってこの概念を指すものを統一して「談話標識[5]」と呼び、会話管理機能の側面を扱うという理由で Fraser（1996）を参考にし、情報の結束性以外に、会話管理や

[5] 談話標識に関する様々な研究の中で、英語の談話標識のほかに、日本語の接続詞を対象とした研究も少なからず存在する。例えば、「じゃ」に関する研究（椙本, 1993；小田, 1993；林, 2002 など）、「で」に関する研究（林, 1999a；林, 2002 など）、「でも」に関する研究（川口, 1991；稗田, 2003 など）、「だから」に関する研究（谷崎, 1994；林, 1999a；林, 2002 など）などがある。

命題に関係する主体の態度を示す言語コードであると定義する。

談話標識を対象とした研究については、川森・川端・島津（1995）は「その［＝談話標識の］重要性は認識されるようになってきたが、具体的な機能や特徴の解明はまだ十分ではない。特に、話し言葉という対象を考慮したとき、上で述べた話し言葉に特有の現象を「音」という側面から見ることは当然必要な接近法であると思われる」（54 頁）と説明している。しかしながら、今までの先行研究は文字資料に基づいて日本語談話標識「でも」「だから」の談話機能を分類するにとどまっている。日本語談話標識「でも」「だから」の談話機能を分類する際に、文字資料のみならず、そのときの音声的実現も考慮せざるをえないと思われる。

以下では、「日本語の『でも』に関する先行研究」、「日本語の『だから』に関する先行研究」と「日本語学習者の接続表現の使用に関する先行研究」を紹介する。

2.2. 日本語の「でも」に関する先行研究

従来、様々な観点から日本語の「でも」の用法の記述が試みられ、最近では話し言葉の分析の観点からの記述も行われるようになっている（岩澤, 1985；蓮沼, 1991；曺, 1996；クワンチャイ, 1999；林, 2001；稗田, 2003；日野, 2003）。日本語の「でも」は従来、逆接関係を示す接続詞として位置づけられているが、これらの研究によって、会話で使用される「でも」には逆接ではない用法も存在することが明らかになった。

ここでは、「でも」の用法の分類において本論文と関連のある岩澤（1985）とクワンチャイ（1999）の研究及び談話分析的観点から「でも」をみた曺（1996）

と日野（2003）の研究をまとめて紹介する。

2.2.1. 岩澤（1985）とクワンチャイ（1999）の研究

岩澤（1985）は日本語逆接接続詞について、論説文、会話文、随筆文といった文体の異なった資料から集めてきたデータを分析し、日本語逆接接続詞の会話使用には逆接以外に、対比、展開、転換の用法が見られると結論付けている。また、岩澤（1985）は、「でも」のような逆接接続詞は文体が話しことばに近づくにつれて逆接以外の用法が増え、会話文においては展開用法が多くの割合を占めていると説明している。会話における「でも」の使用を考察しているクワンチャイ（1999）は岩澤（1985）と同様に、「でも」の用法に逆接、対比、展開、転換があると述べている。下記では、この 4 つの用法に対するクワンチャイ（1999）の説明を述べていく。

まず、「でも」の「逆接用法」と「対比用法」について、クワンチャイ（1999）の例を挙げながら説明する。例 8 と例 9 は「でも」の「逆接用法」である。

例 8　（逆接用法）

【「モマ」という絵の展覧会に行く曜日の話】

N　まだやっている　けっこう長くやってるね

I　6 月何日までだからね

N　もうそろそろか

I　あ　じゃ　もうそろそろか

N　もうそろそろだよ

I　（笑）もう 6 月だもんね

N　**じゃ　月曜に**　あ　でも　月曜に行けないんだなあ　え？　なんで月曜に暇

あるっけそんなの？

I　うん　そう　おそいだもん　始まるのは

N　午後から？

I　午後からだから

N　午前中行ってきたんだ

（クワンチャイ，1999：29）

例 9　（逆接用法）

【ホームステイ先の話】

I　その今後はだから（A　うん）一年目は子供が二人いたでしょ（A　うん）だからそれが大変だっていうのも REA がすごく知ってて（A　うん）でもあたしが我慢したのは知ってるから　2 年目は絶対子供いないところにしてあげるねとか言って　**で今度の人は　あたしの 5 年生の生徒のおばあさんにあたるの**　でも若い　52 歳なんだけど　そで自分その人は 6 年生教えてて（A　うん）暮らしてて　でなんかチョーフクヒカインで　すっごいでかいのね（A　あ）家が　で今の家　今まで住んでた家は　すっごい小さくって　（A　あん）

（クワンチャイ，1999：29-30）

例 8 の前件「じゃ　月曜に」から「モマは月曜日に行く」という聞き手の推論が仮定できる。しかし、「でも」によって導かれる「月曜に行けないんだなあ」という発話から聞き手の推論を否定する。例 9 も前件の「で今度の人は　あたしの 5 年生の生徒のおばあさんにあたるの」から、「5 年生の生徒のおばあさんなら、かなり年寄りの人である」という聞き手の推論ができるが、話し手が「でも若い」と言って聞き手の既定の推論を否定する後件を導きだすのである。例 8

と例 9 は否定する前件がはっきりと発話の中で言語化されているものである。以下の例 10 と例 11 は「でも」の「対比用法」である。

例 10　（対比用法）

【ホームステイ先の話】

I　こっから違うの　こっからがねえ　あたしのい（A　うん）ホストファミリーがあって（A　うん）こっからのそのステファン家があるんだけど（A　うん）こっからこっちの家って**みんなでっかいのね**（A　あああああ）でも　こっからこっちは**小さい家ばっかりなのよー**（A　（笑））　だからその　ステファン家もそうだしー（A　うん）

（クワンチャイ，1999：35）

例 11　（対比用法）

【ゼミの発表後のレポートの話】

M　え　なに　どんな感じで書けばいいの？

T　S さんは　**ここのレジュメ以外のことを書いた**って言ってたから　そのあとに感じたこととか　まあ授業終わって　その後に感じたこととかをまとめたらしいですね　でも　あたしはたぶん　**レジュメの　ことをまとめようと思ってるんで**

（クワンチャイ，1999：35）

例 10 では、話し手 I は「自分のホストファミリーの家がある側の家」と「ステファン家がある側の家」を対比している。例 11 は、「T のレジュメの書き方」と「S のレジュメの書き方」を並列して両者の差異を対比させているものである。

クワンチャイ（1999）は「でも」の「逆接用法」と「対比用法」の差異について、次のように説明している。

> 「逆接用法」の場合、「でも」によって導かれる後件（q）は、聞き手が前件（−q）から文脈的に含意できると思われる推論全体を否定する。それに対して「対比用法」の場合、前件（p）全体を否定するのではなく、後件（q）の事柄を「前件の事柄ではないもの」として否定的に関係づけるのである。話し手の意図は両者の差異を対比させることにある。
>
> （クワンチャイ，1999：34）

しかしながら、例 10 の「でも」は「大きい」とそれを否定する「小さい」を否定的に関係づけるものとも言えるし、例 11 の「でも」は自分のやり方は S さんと異なるということを主張していると解釈することも可能である。「でも」の逆接用法と対比用法の境界は必ずしも明確ではない。

次に、「でも」の「展開用法」と「転換用法」について、クワンチャイ（1999）の例を挙げながら説明する。例 12 と例 13 は「でも」の「展開用法」である。

例 12　（展開用法）

【オウム真理教についての話】

N　私あんまりねー　オウムのそういうあのなんていう　去年はすごい見てたけどー

A　（笑）私去年見てないからー新鮮だとまだ

N　タイムリーでみてたからすっげー

A　I ちゃんホーリーネーム全部覚えたよ

N　そうそうそうオウムマニアの

A　（笑）そっか私さ　全然知らなくってさー　お母さんがそういうこと言うのー　だから何言ってんのかなーと思ってー

N　（？）がさー

A　そうーそうー（笑）それとかさーなんか（笑）インド人のなんか（笑）　何言ってんだろうか思ってー

N　でもなんか直接　あの事件があった直後とか池袋の駅とかさ　新宿の駅とか　すーごいいっぱいいたもんねオウムの人が

A　きぇーっ　踊ってた？

N　いや踊ってるんじゃないんだけどーマスコミのー　そういうなんか報道に対してどう思いますかって

（クワンチャイ，1999：36-37）

例 13　（展開用法）

【S はつぶらな瞳とはどんな瞳か気になっているという話】

S　うん　なんかほんとにー　うん（笑）なんて言ったらいいかわかんないっていうの（H　え？）いやなんて言ったらいいかわかんないけど（笑）うん　まだすれていない

H　ほー　なるほど

S　（？）な感じがするんだけど

H　まあそうだよね　でもなんかいったいどういう目のこと　きっとそういうのってあると思うんだよね　どういう目

（クワンチャイ，1999：39）

例 12 では、「でも」が繋ぐ後件に「オウムによって実行されたサリン事件直後の事実」という新たな観点を導入し、話を展開させているのである。例 13 では、H は「でも」を使い、前件の事柄「つぶらな瞳」に対するまとめの姿勢に入り、話を展開させている。以下の例 14 と例 15 は「でも」の「転換用法」である。

例 14　（転換用法）

【駅ビルの話→「モマ」という絵の展覧会にいく話】

I　なんかさ普通駅にさ駅ビルってない？だいたい

N　あーだいたいというかまあ

I　ないかなあ　（笑）ないのか

N　（笑）えー場所によって

I　あ　場所によるか

N　おお？　まあね　駅　あ駅の中にあれでしょう？　ち　一階が駅でみたいな　上がまあ　池袋だったら西武で

I　なんかね　なにかたりないなあとか思ってずっとね？

N　うん

I　あ駅ビルは　ないとか思ったの

N　まあね　私の方が池袋を求めちゃうからもう他のところに　別に

I　そうか池袋に行こうか　池袋通らないか

N　でしょう？　で　大きなとこってどこも通らないの？とか　大きとこーっていう

I　でも　私せんせんせん週ね　駅ビルじゃないけどさ　（笑）月曜日さ　さみしいんだけど　一人でさ　モマ寄って来ちゃったっていったっけ

（クワンチャイ，1999：39-40）

例 15　（転換用法）

【ゼミの発表の話→おなかがすいた話】

T　まさか　逃げ出すとかそういうわけではないと思ったので　んーそれでー
　んーそしたらすぐ来ました　んーんー

M　あ　でも　おなかすいちゃったなー

（クワンチャイ，1999：40）

例 14 では、前件では「駅ビル」というトピックについて述べられるが、後件に「モマという絵の展覧会」というトピックが導入されている。例 15 でも前件のトピック「ゼミの発表」は後件のトピック「おなかがすく」によって話が転換している。

「でも」の「展開用法」と「転換用法」の区別について、クワンチャイ（1999）は次のように説明している。

> 「展開用法」では、前件と後件の間に共通の事柄があると考えられるだろう。その共通の事柄を共通の「トピック（topic）」として考える。（中略）「前件（p）と後件（q）の間にトピックの一貫性がない」ものを「転換用法」として考える。
>
> （クワンチャイ，1999：39）

しかし、以下の 2.2.2.の節で詳述するが、「でも」によって導入される後件の話題は、前件と無関係なまったく新しいものではないという考え方も存在して

いる。したがって、「でも」の展開用法と転換用法の区別の仕方にも揺れが存在し得ると考えられる。本論文の第 3 章では、岩澤（1985）とクワンチャイ（1999）がいう日本語「でも」の逆接、対比、展開、転換の 4 用法と本論文の「でも」に対する分類の仕方との関連づけを詳しく説明する。

2.2.2. 曺（1996）と日野（2003）の研究

談話分析の視点から日本語の「でも」を分析するものとして、曺（1996）と日野（2003）の研究が挙げられる。

曺（1996）は「でも」は positive-face[6]を危険にさらす可能性のある談話標識であり、その face を危険にさらす機能から、談話の主題に新たな面を加える話題の拡張、自分の意見に注目させる highlighting、相手の同意を求めながら自分の意見を述べる attention getter の機能が派生すると説明している。

例 16 は「でも」の話題の拡張の例である。この例の 2B「わけへだてなくやる」と 5A「気は若い」の情報を導き出した「でも」は同一の話題で情報拡張の機能をもっている。

例 16 （話題の拡張）

1A　おばあちゃんだけではなく、若い女もおおいんですよ。

2B　じゃ、いいですね。でも、わけへだてなくやるのはたいへんですね。

3A　よくわかってくださいますね。

4B　たいへんですねー。

5A　でも、おばちゃんでも気は若いですから、

[6] 自分自身の思っている自分の姿を評価し、認めてもらいたいというものである。（曺，1996:21）

6B　うーん。

7A　若いもんにゃ負けちゃいられないわみたいね。

（曺，1996：226）

例 17 は相手の同意を求めながら自分の意見を述べる attention getter の「でも」の用例である。曺（1996）はこの用例の「でも」について、「判断に関して曖昧性を持たないため、強い attention getter の機能をもつことになる」（222 頁）と説明している。

例 17 （attention getter）

1D　そんな食べたことないけど、わいは食べたことないけど、・・・違う。

2F　でもさあー、あれでしょう。日本食ってさあ。いつも食べてる日本食の方がさあ、おいしいね。

3D　そうそうそう。口に入らないね。

（曺，1996：222）

例 18 は自分の意見に注目させる highlighting の「でも」の用例である。この例の「でも」は自分のことばの中で使われており、自分の話に注目をひく highlighting の機能として用いられている。

例 18 （highlighting）

1A　とにかくデビュー曲の「ダウンタウン」、これはあの山下達郎さんがお造りになった曲ですね。でもこれが「おれたちひょうきん族」のテーマソングになるって思ってもいらっしゃらなかった。

2B　思ってもいなかったですね。

（曺，1996：220）

談話上で用いられる「でも」が positive-face をおびやかす談話標識であるという曺（1996）の出発点は本論文と同様の立場である。しかし、曺（1996）の「でも」の談話機能の分類は「でも」の音声的実現を考慮せずに雑誌の会話文と会話データの文字化資料のみに基づいて行ったが、各談話機能には如何なる韻律的特徴が見られるかは不明である。また、話題拡張、attention getter、highlighting といった機能の関連付けについては十分に論じられず、attention getter と highlighting の機能の区別が明らかにされていない。

日野（2003）は話し言葉における「でも」の種類を、1）相手と逆のことを主張する、2）トピックシフト、3）（前の文脈を飛び越えて）感動的に振り返るの 3 つに分類し、トピックシフトと感動的に振り返るの 2 種類が談話に出てくる「でも」の特徴であると説明している（88-89 頁）。

次の例 19 は相手と逆のことを主張する「でも」の用例である。最初の「でも」は B による最初の会話の「腕が曲がっているからゴルフボールの方向性がいい」というプラスの主張に対する A の「飛ばない」というマイナスの主張を導いているが、2 つ目の「でも」も、B による直前の「長尺ドライバーを使って二百二三十ヤードボールを飛ばすことができる」というプラスの主張に対する A の「ジャンボ尾崎はもっとボールを飛ばすことができる」という、B にとってマイナスの主張を導いている。

例 19 （相手と逆のことを主張する）[7]

B：曲がっている腕いうのは（0.2）その方向性を保ちやすい

A：(腕を曲げたままスイングのまね）＝

B：＝そうそう

A：いや$\boxed{\text{でも}}$（0.2）飛ばないじゃないですか：こんなもんで（0.2）強振できないですよ：？

B：いやまあ（0.1）二百二三十飛びますよ：ドライバー

A：その長尺というやつでしょ：？

B：そうそう

A：(0.5 息つぎなし）$\boxed{\text{でも}}$：かなり飛距離とかジャンボとか回ったら：おいていかれるじゃないですか：：

B：まあ（0.2）百ヤードぐらいですけどね（会場笑い）

A：(笑って）その差がすごすぎまんがな（会場爆笑）

（日野, 2003：81-82）

例 20 はトピックシフトの「でも」の用例である。次の図は、例 20 の主話題「B はまだ若い男とつきあえるか」にそって、2 つの「でも」が副話題を導く様子を示すものである。

[7] 日野（2003）で使用された文字化の記号を説明する。＝は前の発話のあと、間髪をいれず次の発話が続くもので、:は母音が伸ばされるもので、(0.2) はポーズの時間 (秒)。〔,〔〔は前の発話とあとの発話がオーバーラップする出発点である。以下の例でも同様である。

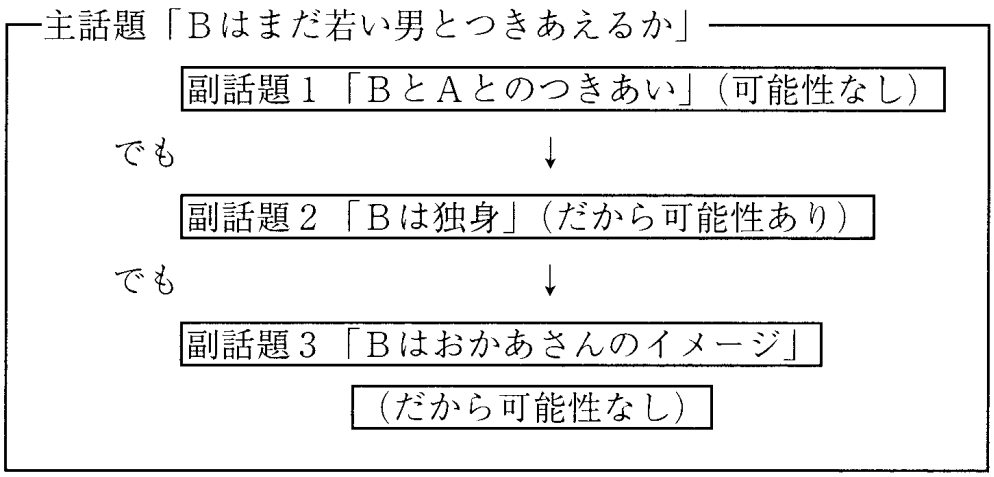

図 1　「でも」による話題のシフト（日野, 2003：85）

例 20 （トピックシフト）

（B に「私の好きなタイプだ」と指差されて）

A：いや（0.1）ぼくですが（0.5）ぼくは距離を置かなくてもいいですよ：

B：(笑い）うそばっかり

A：いや：

B：うそばっかり

A：ひょっとしてわたしちょっとだけ財産目当てが：：〔(会場笑い）そんなことは〔〔ないですけど：

B：　　〔(笑い)

〔〔これ目当て（右手の親指と人指し指で輪を作る）

A：でも独身ですもんね：：

B：はあそうですよ（0.1）べつに（0.1）でもだ（0.1）どこもあのそういうふうに書きませんね：しゅしゅうかんしは

A：そらこう森光子東山熱愛中とか：

B：ひやかすような書き方するんですよ：

A：でもね（0.2）どう：してもやっぱりね森光子さんて（0.1）あの森光子さん自身はいやでしょうけど（0.2）おかあさんのイメージが

B：そうなんですよね：

A：強いんですよ〔ね：

B：　　〔そうですよね

（日野，2003：84）

例 21 は（前の文脈を飛び越えて）感動的に振り返る「でも」の用例である。日野（2003）のフォローアップ・インタビューの結果からわかったが、この例の B は、松田聖子がブティックを開いたり、歌手をしたりしたときのことを思い出して「でも」を使った。すなわち、この例の「でも」は前の文脈を飛び越えて過去を振り返っているものである。

例 21　（感動的に振り返る）

A：松田聖子（0.1）どこに住んでんだ（0.2）ニューヨークか

B：さあ：ロスじゃないの？

A：どっちにしてもこっちにいんだろ

B：(2.0) でも（0.1）松田聖子ってやり手だよね：：

（日野，2003：86）

日野（2003）のトピックシフトと（前の文脈を飛び越えて）感動的に振り返るという 2 つの機能はそれぞれ、岩澤（1985）とクワンチャイ（1999）が言う「でも」の展開用法と転換用法に等しいと考えられる。岩澤（1985）とクワンチャイ（1999）は「でも」の転換用法について、共に「前件と後件の間に話題

（トピック）の一貫性がない」（岩澤, 1985；クワンチャイ, 1999）と説明している。しかし、日野（2003）を含めた先行研究（川口, 1991；西野, 1993；稗田, 2003）では、全く新しい話題への移行ではなく、すでに述べた話題、既出の先行話題への移行であるとしている。その一例として以下の例 22 を挙げている。

例 22 は料理教室に集まっている 40 代の女性 3 人と、家庭主婦でもある料理の先生の会話である。料理を作っている最中、刺繍の話をしていたが、途中で料理ができたということで話題が一時的に料理へ移ってしまった。再び、話題が刺繍に戻る際に「でも」が使われている。

例 22　40 代女性 3 人の会話

【刺繍の話】

先生：黒いものなんてだめですっておっしゃってらしたわね

A　：もうカットのね難しいのなんて、とてもじゃないけど

先生：あっ、そーお

B　：むずかしそね

先生：でもなんかね最後はね、なかなか免状だしてくださらないっておっしゃって

A　：ださないですね、私もね一部はとったんですけど、二部の

先生：なんかそこへ

A　：行くまでが大変で

先生：行くまでが結構あれだったけど、最後、なかなかいただけないんですよなんていってらして

【出来上がった料理の話】

先生：はいできましたわ

B　：あ、できましたね

先生：はい

B　：何分くらいかしら？10 分

先生：もうさっきから、点火しといたから、あのチーズがとければ

B　：そうですね

【刺繍の話】

先生：でも、広田さんのところはお嬢さんもいらっしゃらないし、だから、奥様がやっぱりそういう華やかなものをおうちにお置きにならないとなんとなくあれでしょ？

（川口，1991：163、西野，1993：93-94、稗田，2003：195）

「でも」の転換機能について、浜田（1995）はある側面から同時に存在する別の側面へ注意を転じさせ、潜在していたものを顕在化させるものであるため、話し手と聞き手の間で共有知識であることが確認されていなければ、話題として導入できないと説明している。稗田（2003）は本筋ではない話題を再度持ち出す際に、「でも」を使うと不自然になると指摘している。本論文では日野（2003）らの説を妥当なものとして受け入れる。すなわち、話題を転換する際に使用する「でも」は既出の先行話題への移行と考える。

2.2.3. 日本語の「でも」と音声的実現

話し言葉の分析観点から分析した研究の結果を通し、日常会話で使用する日本語の「でも」は接続機能のみならず談話標識として機能していることが明らかである。谷崎（1994）は談話標識のコミュニケーション上の役割について次のように述べている。

> 談話標識は現在の発話を前の発話に結びつけ、文脈から会話の含意を推論するようにシグナルを与え、聞き手がどんな命題や発話行為（表面的のみならず基底のレベルも含めて）を予期すべきか前もって教えてくれるだけではなく、話者交替の起こる会話の構造上相互作用的機能も有するので、コミュニケーション上重要な役割を担っている。
>
> （谷崎，1994：81）

また、談話標識について、Fraser （1996：168）は“the linguistically encoded clues which signal the speaker’s potential communicative intentions”（話し手の潜在的発話意図を示す言語コード化された示唆）と述べ、広瀬（2003）は「談話標識は、その機能として‘connectivity’が大きな特徴であるが、このような談話接続に関わる機能と共に、話し手の発話態度を表すマーカーとしても重要な働きをしていることを示唆している」（36 頁）と説明している。つまり、談話標識はコミュニケーションを円滑に進行させるために欠かせないものであり、話し手の発話意図や心的態度に左右されるパラ言語情報の伝達にも大きく関わっている。前川・吉岡（1997）によると、パラ言語情報は文字言語ではほぼ欠落してしまうが、音声言語では韻律（prosody）を主要な経路として伝達され、コミュニケーションに重要な役割を果たしている。言い換えれば、音声の韻律は話者の発話意図、心的態度といったパラ言語情報の伝達に果たす役割が大きい。広瀬（2003）が述べた話し手の発話態度を表すマーカーとしての談話標識の機能を究明するために、話し手が談話標識を使用した際の音声の韻律も含めて分析して考察する必要があると考える。

しかし、上記で紹介した諸先行研究には、会話データの文字化資料から「で

も」の談話機能を分類するにとどまり、「でも」の音声的実現を考慮していないという問題点が残っている。我々が普段、日常会話で使用する音声言語には、文字言語と異なり、言語情報のみならず上述したパラ言語情報も含まれている。したがって、「でも」のような談話標識の真の談話機能を考察する上では、川森・川端・島津（1995）がいう談話標識の音声面の分析が必要で、談話機能と音声的実現との対応関係を考慮することが欠かせないと考える。換言すれば、「でも」の談話標識としての談話機能を明らかにするためには、発話者が日本語の「でも」を使用する際の音声的実現を考慮せざるをえない。

2.3. 日本語の「だから」に関する先行研究

日本語の「だから」は一般に因果関係を導く接続詞と言われているが、それは主に書き言葉においてのことである。実際のコミュニケーションの場では因果関係を表さない例が多数存在することが、近年、話し言葉を分析対象とした研究によって明らかになった。Maynard（1989）によれば、インタラクション上の行動での使い方、すなわち因果関係を表さない「だから」の使用が全体の 3 分の 1 を超えていたと報告している。

日本語の「だから」の因果関係を表さない用法について説明を行ったものとして Mizutani & Mizutani（1981）をはじめ、Maynard（1989）、蓮沼（1991）、谷崎（1994）、浜田（1997）、岡本・多門（1998）、小西（2003）、萩原（2007）などがある。これらの先行研究の考察視点は異なるが、会話で使用する日本語の「だから」は意味論的用法のほかに、因果関係を表さないという語用論的用法も存在するという同様な議論を行っている。谷崎（1994）は日本語の「だから」の因果関係を表さないという語用論的用法は意味論的用法とまったく無関

係ではなく、前件から後件を導くという論理関係は根底に残されていると述べている。

因果関係を表さない日本語の「だから」に焦点を当てたものとして、萩原（2007）の研究が挙げられる。萩原（2007）は因果関係を表さないとされる「だから」を、照応先という観点から考察し、(1) 因果関係を表さないとされてきた「だから」にも照応先が見出される、(2) 話し手が「だから」を選択したということは、先行するコンテクストの何か／どこかにリンクしている、(3) 談話標識として「だから」が機能している場合でも接続詞としての「だから」の意味は消えていない、と結論付けている。

萩原（2007）が説明したように、話し手が使用した因果関係を表さない日本語の「だから」は Grice（1989）の「協調の原理」（Cooperative Principle）の「量の格率[8]」（Maxims of Quantity）に則っていると考えられる。しかしながら、萩原（2007）の研究では、蓮沼（1991）や谷崎（1994）などの先行研究がいう聞き手の不快感については説明できず、因果関係を表さない「だから」と因果関係を表す「だから」の音声的実現に相違が見られるか否かについても触れていない。

因果関係を表さない「だから」は人間関係を損なう恐れがあるということについて言及した研究には、蓮沼（1991）、谷崎（1994）、浜田（1997）、林（1999a；1999b；2002）、メイナード（2004）などがある。

蓮沼（1991）は「だから」の用法全体の特徴について、「自分の発話の土台となる情報や知識を、既有のものとして扱うという、話し手の情報の認定のし方に見られる性質」（149 頁）と説明し、因果関係を表さない「だから」は対

[8] Grice（1989）は“Make your contribution as informative as is required（for the current purposes of the exchange）”（308 頁）としている。つまり、当面の目的となっていることに必要とされる情報を提供しなさいということである。

話の相手に論争を挑む際に現れると指摘している。蓮沼（1991）が使用したのはドラマや映画のシナリオなどのような人為的な会話データであるため、論争的な「だから」が多く見られるかもしれないが、自然な会話では必ずしも論争的な「だから」ばかりではないと考えられる。

また、林（2002）は次のように述べている。

> 「だから」の本質的な機能は、「前件の S1 で述べた事象が、後件の S2 で述べる事象の原因・理由になることを表す」というものである。そして、「だから」で導入される結果や結論という後件は、言語内知識がなくても、聞き手と共有しているはずの言語外常識や知識に支えられ、聞き手に必然的な理解を得られるという「話し手の確信」が含まれているといった特徴を持っている。
>
> （林，2002：306-307）

林（1999b）によると「だから」の使用が問題になっているのは、話し手が情報の共有度に関する想定を誤った場合に起こる「喚起不可能」の場合である。言い換えれば、「だから」が用いられるのは原則的に、「喚起可能」の照応できる情報の場合である。話し手が故意に又は不注意に情報を持っていない相手に「情報喚起」を要求するなら、相手は文脈と話題照応だけではなく、外界照応もできないことから、不快感や不安を感じると述べている。本論文は林（1999b）の説明を受け入れるものである。

一方、諸先行研究の中で、特に例 23 と例 24 のような質問に対する答えの冒頭に用いられた「だから」について論じた研究には、蓮沼（1991）、谷崎（1994）、浜田（1997）などがある。

例 23

なおこ「やっぱりついて行く」

美律子「ダメよ。仕事の話だから」

なおこ「誰なの？」

美律子「だから仕事の仲間」

（蓮沼，1991：145）

例 24

実「お袋とあいつと暮らすことになりゃあ、俺はいない方がいいだろうが」

健一「そんなとこまでいっているのか？」

実「だから、昨夜俺が二人は自由にしろっていったから」

（蓮沼，1991：146）

蓮沼（1991）は WH 疑問文や YES-NO 疑問文の場合で「だから」を返答の冒頭に用いることについて、次のように述べている。

> ここで「だから」を使う話し手の態度には、特別な含みが感じられる。すなわち、当然分かっているはずのことを聞き手が聞いているというふうに捉え、聞き手の質問をまともな質問として扱っていないという態度が感じられるのである。
>
> （蓮沼，1991：146）

以上の先行研究から、「だから」の使用は相手に不愉快を感じさせる恐れがあ

ることがわかった。しかしながら、これらの研究では、何故相手にそのように感じられたのかについてはほとんど論じられていない。蓮沼（1991）と谷崎（1994）では、話し手の強い苛立ちを表現するために、「だから」が強く長く発音されるという特徴を持っていると述べているが、蓮沼（1991）と谷崎（1994）は音響分析のような実証的な考察を行わず、直感的な印象に過ぎないと思われる。

本章の冒頭で言及した川森・川端・島津（1995）は対話の特徴の 1 つとされる談話標識語（discourse markers）について次のように述べている。

> これらの語は談話において、話者と聴者の情報や対人関係にかんする様々な調整を反映させていると考えられる。これらの特徴の分析は、真に協調的な対話モデルの構成にとって、本質的であることが認識されてきている。また、話し言葉を理解することを考えると、さらに、音声を主媒体とする会話においては、これらの談話標識語を含む文の音響・音韻的モデルが不可欠となる。
>
> （川森・川端・島津, 1995：53）

川森・川端・島津（1995）の研究からわかるように、談話標識を考察するうえでは、談話標識の音声面の分析が欠かせない。しかし、「だから」を研究対象としたこれまでの研究には「だから」の音声資料を用い、「だから」の使用状況を分析してから談話機能を分類するものが未だないようである。そこで、本論文では、これまでの先行研究において見落とされていた、日本語談話標識「だから」の音声的実現と談話機能の対応関係の詳細な分析と考察を行うことにする。

2.4. 日本語学習者の接続表現の使用に関する先行研究

日本語学習者の接続表現の使用状況については、これまでに多方向からの考察がなされている。日本語学習者が口頭で接続表現を使用する状況について調査を行ったものとして、加藤（1984)、伊豆原・嶽（1992)、杉田（1994)、新村（1996)、近藤（2004）が挙げられる。

加藤（1984）の考察結果から明らかになったのは、日本語学習者の日本語能力が高まるにつれて接続詞・接続助詞の使用頻度が高まるが、接続詞の使用頻度は常に接続助詞のそれを大きく上回るということである。しかし、伊豆原・嶽（1992)、杉田（1994）と近藤（2004）が指摘したように、日本語学習者の接続詞の使用には、接続詞のレパートリーの少なさという問題点がある。日本語学習者は正確に使用できる接続詞のみを選んで使用する傾向があるため、日本語接続詞の「でも」「だから」が頻繁に使用されるようになると考えられる（新村, 1996；近藤, 2004)。しかし、頻繁に使用される因果関係を示す接続詞「だから」の使用例において不適切な事例が多くあることが指摘され、接続詞の適正使用をどのように日本語学習者に学習させるかという問題が、取り組むべき今後の研究課題として残っている（杉田, 1994；近藤, 2004)。

次に、これらの先行研究の問題点を指摘する。

第 1 に、伊豆原・嶽（1992)、杉田（1994)、新村（1996）と近藤（2004）が使用した日本語学習者の独話データは日常のコミュニケーションとはかけ離れたものであり、これらの研究の成果が、自然な発話の場合にも当てはまると言えるのか大いに疑問である。

第 2 に、日本語学習者の発話を扱った従来の研究は、日本語学習者が発話する言語的情報に焦点を当てるものが圧倒的に多いが、パラ言語情報の観点から日本語学習者の発話を分析するものが少ない。しかし、実際には日本語学習者

の語彙と文法に誤りがないにもかかわらず、日本語母語話者が違和感、更に不快感を感じ取るといった例が多く存在する。その原因の 1 つがパラ言語情報の伝達ミスによって生じたディスコミュニケーションであると考えられる。したがって、日本語学習者が発話に使用する日本語の韻律的特徴を明らかにすることは日本語教育における重要な課題であると思われる。しかしながら、これまでの先行研究では日本語学習者が使用する際の韻律的特徴まで考察しているものは少なく、日本語の「でも」「だから」の使用における韻律的特徴を明らかにすることは有意義であると考えられる。

第 3 に、日本語学習者が使用する日本語の「でも」「だから」の使用位置と共起表現を考察した研究はまだない。日本語母語話者と日本語学習者の間のディスコミュニケーションを防ぐためにも、日本語学習者の使用特徴を解明することが重要である。

2.5. 本論文での新たな取り組み

上記では日本語の「でも」に関する先行研究、日本語の「だから」に関する先行研究と日本語学習者の接続表現の使用に関する先行研究を概観してきた。表 2 は諸先行研究が考察した項目と未だ考察していない項目をまとめたものである。

表 2　諸先行研究の考察済み及び未考察の項目の一覧

		談話標識の使用	音響パターン	本論文の取り扱い
母語話者	でも	✔	?	第 3 章
	だから	✔	?	第 4 章
学習者	でも	?	?	第 5・6 章
	だから	?	?	

本論文では、表 2 で挙げた先行研究の未考察の項目の結果を明らかにするために、次のように調査を行うことにする。

まず、川森・川端・島津（1995）が述べているように、談話標識の機能を解明するために談話標識の「音」を考慮せざるをえない。したがって、本論文では実際に発話された日本語談話標識「でも」「だから」の音声的表現に基づき、日本語談話標識「でも」「だから」の談話機能を再考し、日本語談話標識「でも」「だから」の韻律的特徴と談話機能との対応関係を明らかにする。「日本語談話標識『でも』に関する考察」については第 3 章において、「日本語談話標識『だから』に関する考察」については第 4 章で述べる。

それから、中国語母語学習者の使用状況全体を把握するために、中級・上級レベルの中国語母語学習者を研究対象にする。本論文の第 5 章と第 6 章では、中級・上級レベルの中国語母語学習者が会話で使用する日本語談話標識「でも」「だから」の実態、とりわけ使用位置、共起表現と音声的実現、を日本語母語話者の結果と比較する。

なお、本論文では日本語談話標識「でも」「だから」の音声的実現を考察する際に、特に日本語談話標識「でも」「だから」の持続時間長とピッチ変動と

いう 2 つの韻律的特徴に注目することにした。ニック・キャンベル（1997）は音声言語には声の高さ、声の大きさ、声の長さなどのような韻律情報が含まれていると述べている。しかし実際には、声の大きさは収録時のマイクとの距離などの要因が強く関わっているため、本論文の分析資料として使用したコーパスの性質を考慮した上で、本論文の分析対象を話者間比較の困難さが少ない声の長さ（持続時間長）と声の高さ（ピッチ変動）という 2 つの韻律的特徴にした。

第 3 章　日本語談話標識「でも」に関する考察

3.0. はじめに

本章では、まず、日本語談話標識「でも」を考察するにあたって使用した分析資料を説明する。次いで、分類の仕方について詳述した後、日本語談話標識「でも」の韻律的特徴を考察する。最後に、音響分析の結果に基づき、日本語談話標識「でも」の談話機能を再考する。

3.1. 分析資料

日本語談話標識「でも」の使用と韻律的特徴を究明するにあたって、本章は前川他（2005）『日本語話し言葉コーパス』（Corpus of Spontaneous Japanese：以下 CSJ と呼ぶ）に収録されている 16 組、合計 3 時間 36 分の自由対話資料を使用した。CSJ の対話収録の状況について、籠宮（2004）は次のように説明している。

> 国語研に設置されている対面ブースを用いた。話者はそれぞれ独立した防音ブースに入るが、ガラス越しにお互いの顔が見えるようになっている。お互いの音声は、イヤホンを通じて聞く。

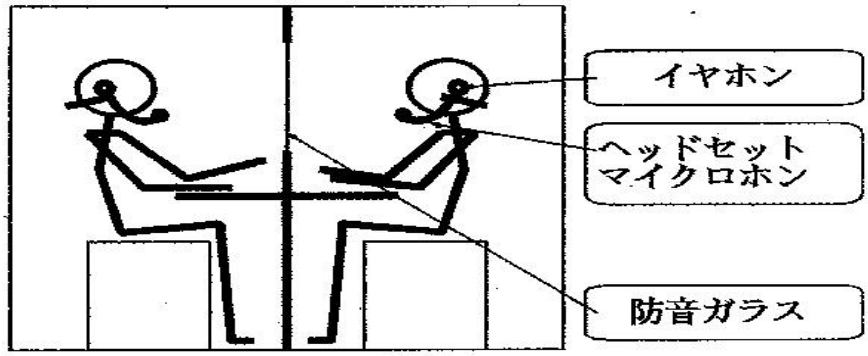

図 2　CSJ の対話収録の状況

（籠宮，2004：5）

本章が CSJ を用いる理由として、CSJ に含まれている対話資料の量が充実しているほか、収録環境が整っており、対談する各話者の音声資料も個別に収録されているため、音響分析をする際に各話者の発話の韻律的特徴をより正確に捉えられるという点が挙げられる。但し、CSJ の文字資料の改行単位やタグ情報などの文字化の方法は本章の分析に不適切と考えるため、本章は研究目的に応じ、分析資料とする 16 組の文字資料を宇佐美（2003）の文字化原則[9]にしたがって整え、発話文を基本単位とした研究用のデータベースを作成して使用する。

3.2. 分類

前章で論じたように、岩澤（1985）とクワンチャイ（1999）は、日本語の「でも」には逆接の用法のほかに、対比、展開、転換という用法があると主張している。以下は、この 4 つの用法に対する岩澤（1985）とクワンチャイ（1999）の説明をまとめたものである。

[9] 文字化の記号の凡例は付録資料に添付した。

① 逆接：「A である。A でない」という形をとるものである。A と否 A の逆接関係を間接的に成立させる例が多い。

② 対比：特に A と否 A の対立を強調する用法である。

③ 展開：明確な否 A を対立させることができないものである。

④ 転換：前件と後件の間に逆接関係がなく、話題の一貫性がないものである。

岩澤（1985）は「『A』は一文であることもあるし、文章、段落、文脈、言語外現実であることもある。『A である』ことを『A』、『A でない』ことを『否 A』と呼ぶことにする」（49 頁）と説明している。上記のまとめからわかるように、岩澤（1985）とクワンチャイ（1999）の説明では、会話における「でも」の用法には、A と否 A の関係をもつ逆接と対比の用法もあれば、否 A そのものが問題にならない展開と転換の用法もある。しかしながら、岩澤（1985）とクワンチャイ（1999）がいう「でも」の会話における 4 用法は、前章でも論じたように事実上、逆接と対比にはっきりした区別がなく、展開と転換の区別も付きにくいことがある。したがって、本章では、例 25 と例 26 に示すように、日本語談話標識「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間に A と否 A の関係があるか否かということのみに注目した。

例 25　【A と否 A の関係が成り立つ場合】（作例）
私はまだ未成年です。でも、昨日お酒を飲みました。

例 26　【A と否 A の関係が成り立たない場合】（作例）
（暖房のあまり効かない教室で）
はい、今日の授業はここまで！でも、今日は一段と冷えるね。

具体的には、A と否 A の関係をもつ逆接と対比の用法（42 頁の①、②）を【A と否 A の関係あり】の場合に属するものとし、否 A そのものが問題にならない展開と転換の用法（42 頁の③、④）を【A と否 A の関係なし】の場合に属するものとする。以下の例 27 と例 28 は【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に相当する実例である。

例 27　（【A と否 A の関係あり】の場合）

話者	発話内容
L：	あの、太古の昔人間はこう文字を書けなかった訳じゃないですか？？。
R：	はい。
L：	だから目からの情報がない、で耳だけでこう、ね、 (はい) 音を聞いてそれを発して、っていう (はい) 道程ですよ。
L：	でも今は読み書きができて、(はい) で読み書きが大事だって言われてて、 それはやっぱりこう、話す方には関係してこないんですか？？。
L：	あたしは関係すると思うんですけど。

例 28　（【A と否 A の関係なし】の場合）

話者	発話内容
L：	今日はお疲れ様でした。
R：	あ、お疲れ様でした。
L：	どうでしたか？。
L：	<緊張します>{<} ,,

R：	<そうですね>{>}初めは凄い緊張しました <笑>。
R：	けど私も、あのー例えば、あのーここで録音している(うーん) 学会の、あの、ビデオとか、見返してみても、(うん) あ、私何でこんなこと言ってるんだろうと言うか,,
<中略>	
L：	いや、さっきのは結構スムーズに。
R：	あ、そうでした？？。
L：	ええ、かなり<流れが>{<} ,,
R：	<あー、そうでした>{>} ？？。
L：	よく、まとまってたと思い<ますけど>{<} 。
R：	<あ、そうですか>{>} ？？。
L：	えー、でも人間の言葉って不思議ですよね。
L：	通じてるんだけど後で聞くと、うーん、とんでもないものいっぱい<ありますよね>{<} 。

例 27 は、「太古の昔」と「今」を対比させているものである。「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間に対立関係が成り立つため、【A と否 A の関係あり】の場合に分類した。それに対し、例 28 では、「でも」が連結した後続発話「人間の言葉って不思議」に対立しそうな対象が先行発話に存在しないため、【A と否 A の関係なし】の場合に分類した。

日本語談話標識「でも」の分類作業においては、前後の文脈と関係なく「でも」の音声だけで判断してしまう懸念があるため、CSJ の 16 組から採集された 137 例の「でも」の用例を【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に分類する際に、音声資料を聞かずに文字資料だけで判断した。

また、分類の信頼性を検討するために、セカンドコーダー[10]を立て判断の一致率を Cohen's Kappa[11]（Bakeman & Gottman, 1986）で確認した。その結果、k=.761 という数値が得られた。k が.700 以上であるため、信頼性を保っていることがわかった。筆者とセカンドコーダーの判断が一致しない部分についてはセカンドコーダーと話し合い、母語話者の意見を尊重して分類を決定した。文字資料による分類の結果が決定されてはじめて音響分析の段階に入ることにした。

本章の具体的な考察手順は以下の通りである。まず、CSJ の 16 組の自由対話資料の中から、「でも」を【A と否 A の関係あり】と【A と否 A の関係なし】の両方の場合で使用している 11 名の被験者（男性 4 名、女性 7 名）[12]の用例を取り出した。次に、個人毎に【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合で使用した「でも」の持続時間長とピッチの平均値を出してそれを代表値とした上で検定を行った。

3.3. 韻律的特徴

日本語談話標識「でも」は 1 拍目にアクセント核がある頭高型の 2 拍語であるが、日本語談話標識「でも」の韻律的特徴としてこの 2 拍の持続時間長と 1・2 拍間の下がり具合の 2 点に注目することにした。

---

[10] セカンドコーダーは日本語教育経験をもつ日本語母語話者である。以下の章の分析についても同様である。

[11] Cohen's Kappa はコード化の基準、定義を決めた上で、二人の認定者が別個にデータのコーディングを行い、その一致度から、偶然一致した確率を差し引いたものである。

[12] 資料の数を保つために、性別を限定することはしない。以下の章の分析についても同様である。

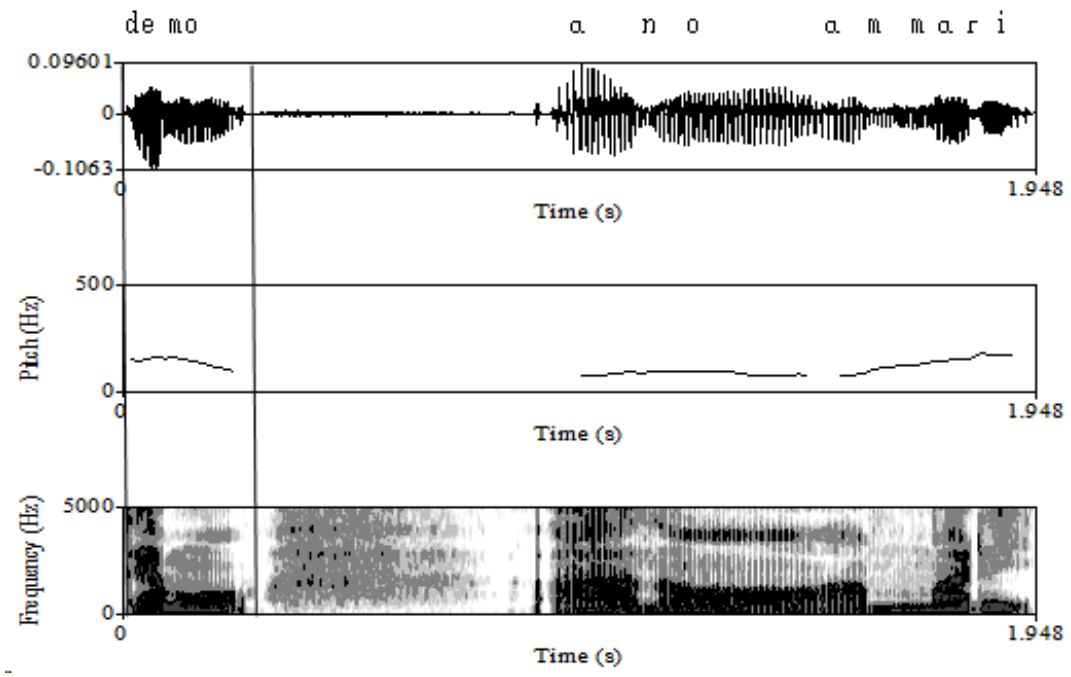

図 3　「でも、あのーあんまり」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム

本章では音声分析ソフトウェア Praat[13]を用い、日本語談話標識「でも」の持続時間長とピッチ変動を観察した。日本語談話標識「でも」の持続時間長は図 3 のように、音声波形とスペクトログラムを判断基準とし、「でも」の振動の開始点（[d]の破裂の瞬間）から、「でも」の振動の収束点までの時間を測定した。「でも」と後続発話との間に無音区間がない場合には、後続発話の始まりの単音までの区間を「でも」の持続時間長として計測した。また、ピッチの変動は「でも」の 1 拍目の最高点と 2 拍目の最低点を 100Hz ベースの半音値であるセミトーン値（st）[14]で測定した。

[13] http：//www.fon.hum.uva.nl/praat/に公開されているフリーウェア。本論文は ver.5.0.38 を使用した。

[14] 発話者の声の高さを考慮せず、音の F0 の変化幅を比較するため、音の F0 の数値（Hz）を対数化する。F0 の値（Hz）をセミトーン値（st）に換算する式は、semitone=39.86 ×log（F0/100）である。

3.3.1. 持続時間長

【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に用いられた日本語談話標識「でも」の長さには差異があるか否かを以下で考察する。11 名の被験者が【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に使用した「でも」の持続時間長（millisecond）を図 4 で示す。なお、棒グラフの上部の T 字は、標準誤差を表す。

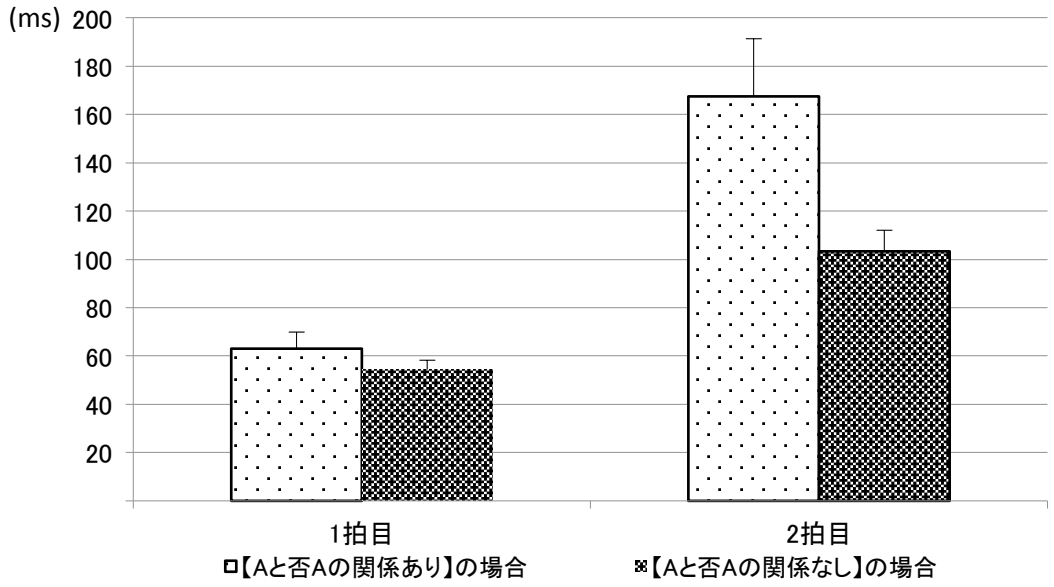

図 4　各場合の「でも」の発話持続時間長の変動（n=11）

【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合における「でも」各拍の持続時間長の差を、2（1 拍目・2 拍目）×2（【A と否 A の関係あり】の場合・【A と否 A の関係なし】の場合）の繰り返し要因のある分散分析により検討した。その結果、次の表 3 のような結果が得られた。

表 3　「でも」の各拍の持続時間長（ms）に関する場合の比較（n=11）

場合	「でも」の持続時間長（ms）			
	1 拍目		2 拍目	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【A と否 A の関係あり】の場合	63	23	167	79
【A と否 A の関係なし】の場合	54	13	103	29
両場合の差	9		64	
2×2 の分散分析の主効果と交互作用	拍	$F(1,10)=48.085$, $p<.001$		
	場合	$F(1,10)=6.433$, $p<.05$		
	交互作用	$F(1,10)=5.644$, $p<.05$		

表 3 の結果からわかるように、拍と場合との交互作用は、$F(1,10)=5.644$, $p<.05$* で存在している。単純主効果の分析結果は以下の表 4 で示す。

表 4　日本語母語話者が使用した「でも」の各拍の場合の長さの比較

位置	(I)　場合	(J)　場合	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率[a]	95% 平均差信頼区間[a]	
						下限	上限
1 拍目	【A と否 A の関係あり】	【A と否 A の関係なし】	8.617	7.605	.284	-8.328	25.562
2 拍目	【A と否 A の関係あり】	【A と否 A の関係なし】	64.091*	25.013	.028	8.360	119.822

*. 平均の差は .05 水準で有意である。

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

表4の分析結果に示したように、「でも」の2拍目「も」の持続時間長は【Aと否Aの関係あり】の場合の方が【Aと否Aの関係なし】の場合より長かった（$p<.05$*）。すなわち、【Aと否Aの関係あり】の場合と【Aと否Aの関係なし】の場合の区別は、【Aと否Aの関係あり】の場合の2拍目がより長い（64 ms）ことで

行っている。

更に、【Aと否Aの関係あり】と【Aと否Aの関係なし】の場合の主効果は有意であった[$F(1,10)=6.433$, $p<.05^*$]。つまり、【Aと否Aの関係あり】の場合に使用した「でも」の全体の長さは【Aと否Aの関係なし】の場合より長い（73 ms）ことがわかった。

以上のことから日本語談話標識「でも」の持続時間長の変動は日本語談話標識「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間にAと否Aの関係が存在するか否かということに大きく関わっていることが明らかになった。

3.3.2. ピッチ変動

「でも」は 1 拍目にアクセント核がある頭高型の 2 拍語であり、11 名の被験者が【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合において発する「でも」の最高ピッチ（1 拍目に存在）と最低ピッチ（2 拍目に存在）を図 5 に表示する。また、実線を引いたのは【A と否 A の関係あり】の場合の用法であり、点線を引いたのは【A と否 A の関係なし】の場合の用法である。なお、折れ線グラフの上部に示したのは、標準誤差である。

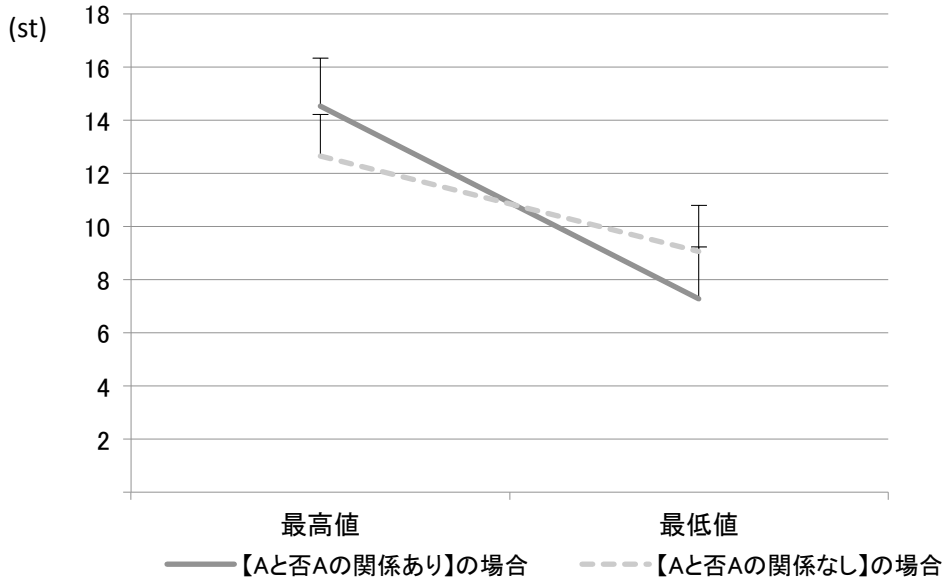

図 5　各場合の「でも」の 1・2 拍間のピッチ変動幅（n=11）

図 5 に示された 11 名の被験者が【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に使用した日本語談話標識「でも」のピッチ変動の差を、2（最高値・最低値）×2（【A と否 A の関係あり】の場合・【A と否 A の関係なし】の場合）の繰り返し要因のある分散分析により検討した。その結果は表 5 のとおりである。

表 5　「でも」の最高値と最低値（st）に関する場合の比較（n=11）

場合	「でも」のピッチ変動（st）			
	最高値		最低値	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【A と否 A の関係あり】の場合	14.52	6.02	7.27	6.47
【A と否 A の関係なし】の場合	12.64	5.21	9.05	5.78
両場合の差	1.88		-1.78	
2×2 の分散分析の主効果と交互作用	ピッチ	$F(1,10)=186.872$, $p<.001$		
	場合	$F(1,10)=0.005$, $p=.944$, *n.s.*		
	交互作用	$F(1,10)=24.720$, $p<.01$		

表 5 に明示されているように、ピッチと場合との交互作用は、$F(1,10)=24.720$, $p<.01^{**}$で存在していると考えられる。交互作用が存在するので、単純主効果の分析を行った。その結果を以下の表 6、表 7 で示す。

表 6　日本語母語話者が各場合に使用した「でも」のピッチ変動の比較

場合	(I) ピッチ	(J) ピッチ	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
【A と否 A の関係あり】	最高値	最低値	7.258*	.588	.000	5.948	8.568
【A と否 A の関係なし】	最高値	最低値	3.589*	.491	.000	2.495	4.684

*. 平均の差は .05 水準で有意である。

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

表 7　日本語母語話者が各場合に使用した「でも」の最高値と最低値の比較

ピッチ	(I) 場合	(J) 場合	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
最高値	【A と否 A の関係あり】	【A と否 A の関係なし】	1.889	.973	.081	-.280	4.058
最低値	【A と否 A の関係あり】	【A と否 A の関係なし】	-1.780*	.684	.026	-3.303	-.257

*. 平均の差は .05 水準で有意である。

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

表 6 に示すように、【A と否 A の関係あり】と【A と否 A の関係なし】のいずれの場合も、「でも」のピッチのパターンは同一の「高－低」パターンである

（p<.001***）。また、【A と否 A の関係あり】の場合の 95%平均差信頼区間は 5.948〜8.568、【A と否 A の関係なし】の場合の 95%平均差信頼区間は 2.495〜4.684 となっている。5.948>4.684 なので、日本語母語話者が【A と否 A の関係あり】の場合に使用した「でも」のピッチ変動幅は【A と否 A の関係なし】の場合より広いと考えられる。つまり、【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合の区別は、【A と否 A の関係あり】の場合のピッチ下降幅がより大きい（3.66st）ことで行っている。

更に、表 7 の分析からわかるように、両場合の間に見られるピッチ変動幅の差は「でも」の 2 拍目の最低値に起因していることも明らかになった（p<.05*）。すなわち、【A と否 A の関係あり】の場合は【A と否 A の関係なし】の場合より 2 拍目の「も」を低く発音する（1.78st）傾向があるといえよう。

以上のことから、話し手は「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間に A と否 A の関係があることを相手に示すために、「でも」の 2 拍目「も」を低く発音し、「でも」のピッチ下降幅に大きく変化をもたらすということが結論づけられよう。

3.3.3. 考察

日本語談話標識「でも」の音声的実現について分析した結果をまとめると、次のようになる。日本語談話標識「でも」が【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に使用される際の持続時間長とピッチ変動という韻律的特徴は異なっている。すなわち、日本語談話標識「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間に A と否 A の関係が存在するか否かということは日本語談話標識「でも」の音声的実現に大きな影響を与えていることがわかった。

日本語談話標識「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間に A と否 A の関係が

存在する場合、すなわち【A と否 A の関係あり】の場合には、日本語談話標識「でも」の発音に 2 拍目「も」の持続時間が長くなり、ピッチ変動幅が広くなるという特徴がある。一般的に最終拍の持続時間を長く延ばし、ピッチ変動を激しくすることにより、聞き手の注意を確実に喚起する可能性が高くなると思われる。【A と否 A の関係あり】の場合は A と否 A の関係を示すものであるため、特に聞き手の注意を喚起する必要がある。したがって、この場合における日本語談話標識「でも」の最終拍の延長とピッチの変動は、聞き手の注意を喚起して後続発話と先行発話との逆接・対比関係を強調する働きがあると考えられる。一方、【A と否 A の関係なし】の場合は A と否 A の関係を示すものではなく、聞き手の注意を引き付ける必要性が【A と否 A の関係あり】の場合より低いと思われる。そのため、【A と否 A の関係あり】の場合のように日本語談話標識「でも」の 2 拍目の延長と 1・2 拍間の激しい下降幅という現象が見られなかった。

3.4. 日本語談話標識「でも」の談話機能の再考

本節では主に日本語談話標識「でも」の韻律的特徴を根拠とし、日本語談話標識「でも」の談話機能を検討する。上述したように、日本語談話標識「でも」が【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に使用される際の持続時間長とピッチ変動という韻律的特徴は異なっている。本章では、こうした日本語談話標識「でも」の韻律的特徴を踏まえ、【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に使用される日本語談話標識「でも」の機能をそれぞれ対立予告と話題移行という機能に分類する。以下、この 2 つの談話機能について音響分析の結果を参照しながら、それぞれの会話例を説明

する。

3.4.1. 対立予告

日本語談話標識「でも」が対立予告の機能を果たすのは日本語談話標識「でも」が連結する先行発話と後続発話の間に A と否 A の関係がある場合であり、日本語談話標識「でも」のもっとも典型的な使い方と考えられる。話し手はこの「でも」を用いて先行する情報に対して対立意見を予告する。

例 29

話者	発話内容
R：	うん、後は、あのー、いかにその人に気持ち良く話してもらえるか。
L：	うーん、どうしたら、うーん、いいんですか、<それは>{<}。
R：	<あー>{>}どうでしょう、あんまり、こつはなくて、あのー、一番いいのは自分と合う方を探すしかないと思うんですね。
L：	うーん、でも職業柄そうも言ってられないじゃないですか?。

例 29 では、R は営業がうまくなる秘訣について、営業のプロに話し方のマニュアルを作ってもらい、講習会などで気持ち良く話してもらうことであると語っている。それを聞いて、L は営業のプロに気持ち良く話してもらえる方法を R に尋ねたが、R の返答に対して L は納得できないようで次のターン[15]で日本語談話標識「でも」を用いて疑いを提出した。この例の「でも」は A（R：一番いいのは自分と合う方を探す）と否 A（L：職業柄そうも言ってられないじゃないですか→自分と合う方を探すという方法はいけない）の対立関係を間接的に成立

[15] 話者交代の単位である。

させたものである。

図 6 はこの例で用いられた「でも」の音声的実現である。図 6 が示す通り、日本語談話標識「でも」が対立予告という機能を果たす際には、後で紹介する「でも」の話題移行という機能より全体が長く、特に 2 拍目の長さが伸びており、1・2 拍間のピッチ下降幅が大きいということがわかった。

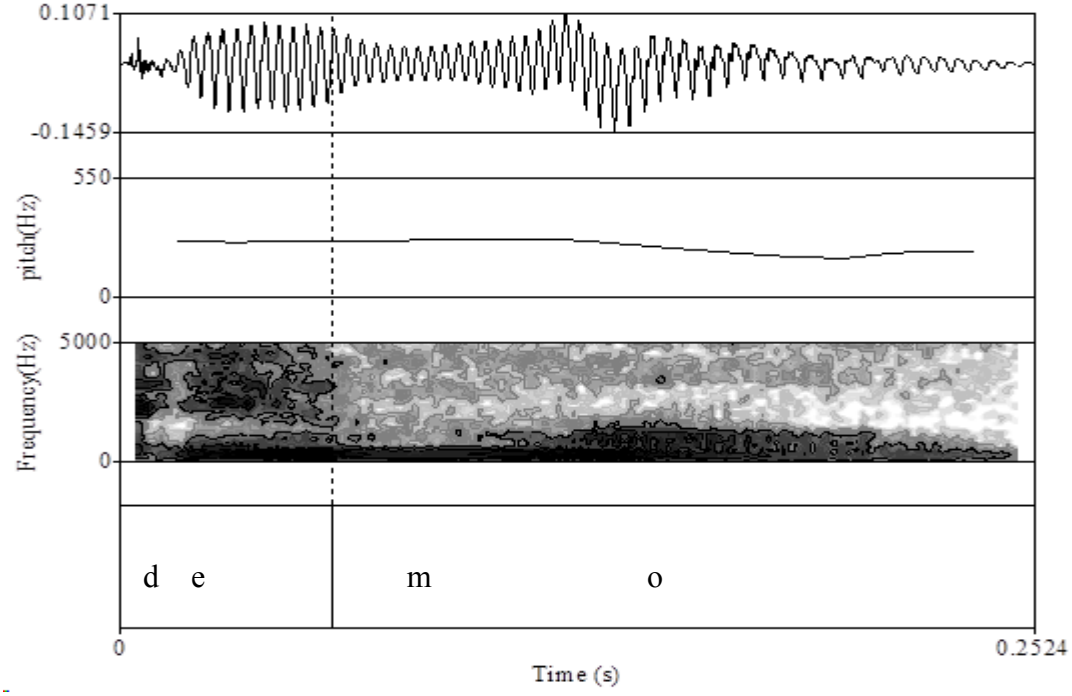

図 6　例 29 の「でも」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム

前述した通り、日本語談話標識「でも」の対立予告の機能は先行する情報に対して対立意見を予告するものである。もしこの先行情報が聞き手の情報領域に属する場合には、基本的に聞き手のフェイス[16]を脅かす恐れが高い行為となる。しかしながら、実際に談話資料を考察すると、丁寧さ（politeness）を表すため

[16] Brown & Levinson（1987）では、人間は「他者に邪魔されたくない欲求」（negative face）と「他者に評価・好かれたい欲求」（positive face）という 2 つの基本的な欲求がある。

にあえて日本語談話標識「でも」を使用する用法も観察された。この丁寧さを表出する用法として、2 種類のパターンが見られる。これらはそれぞれ、Leech（1983）の丁寧さの原則（Maxims of politeness）のうちの是認原則（Approbation Maxim）と謙遜原則（Modesty Maxim）に関与する。是認原則と謙遜原則は話し手の発言が他者と自己についての何らかの良し悪しの評価を伝える度合いに関係している（Leech, 1983）。

<是認原則の使用>

Leech（1983）によれば、是認原則とは他者の非難を最小とし、賞賛を最大とするものである。例 30 では、L は自分の声質が嫌いである（A）という話をしている。R はそれに対して日本語談話標識「でも」を用いた発話「でも全然そんなことないですよ」（否 A）で、自分の声質が最悪だという L の主張を打ち消そうとした。R の日本語談話標識「でも」を用いた発話は丁寧さの原則からすると、是認原則に基づいたものであることが明らかである。例 30 の日本語談話標識「でも」の音声的実現は次の図 7 のようである。

例 30

話者	発話内容
R：	あ、そうかテープ起こしとかする時に（うん）　やっぱ自分の,,
L：	最悪<ですね>{<}。
R：	<声とか>{>}　{笑いながら}。
L：	そこだけ早送りします {2 人で笑い}。
L：	もう、（うーん）　そうですよ。
R：	えー、でも全然そんなことないですよ。

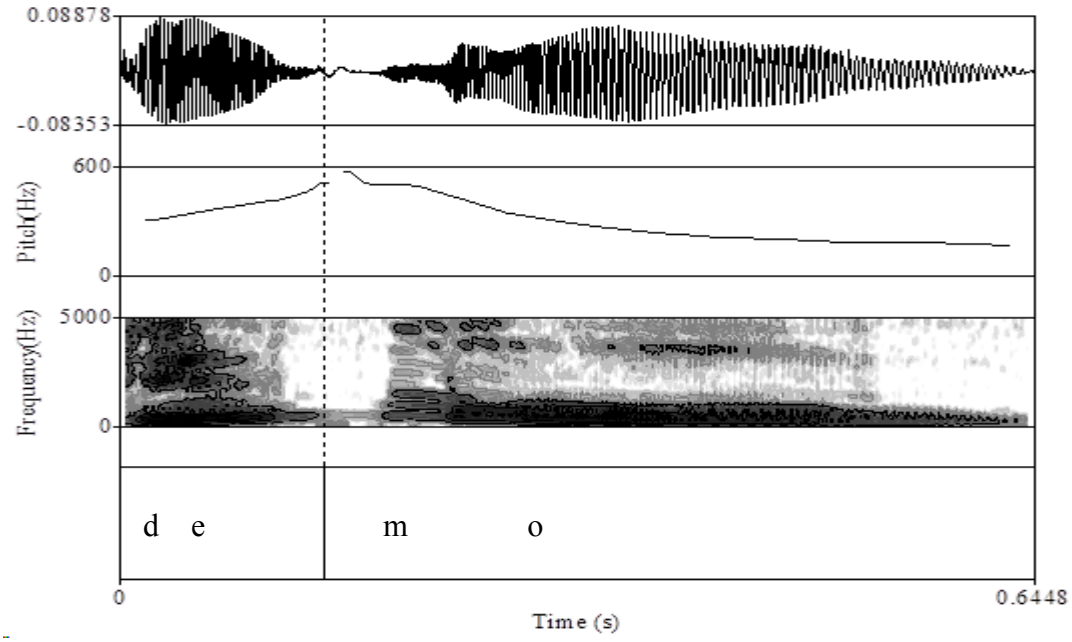

図 7　例 30 の「でも」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム

<謙遜原則の使用>

謙遜原則とは自己への賞賛を最小とし、非難を最大とするものである（Leech, 1983）。例 31 では、R の短大時代の専攻（心理学）と現在の専攻（法律）が全く異なっていることを聞いたあとで、L は R のことをほめている。L のほめ「凄いね」（A）に対し、R は日本語談話標識「でも」を用いた発話「でも全然できないですよ」（否 A）で否認し、自己を卑下した。この例の R の日本語談話標識「でも」を用いた発話は謙遜原則に従ったものであると判断できる。図 8 はこの例の音声的実現である。

例 31

話者	発話内容
R：	でそん時には心理学を、（あー）（あー）　専攻して,,
L：	へー。
R：	やってた。
L：	でまた今は??。
R：	今はですね、法律。
L：	えー、凄いね。
R：	え、でも全然できないですよ<笑いながら>。

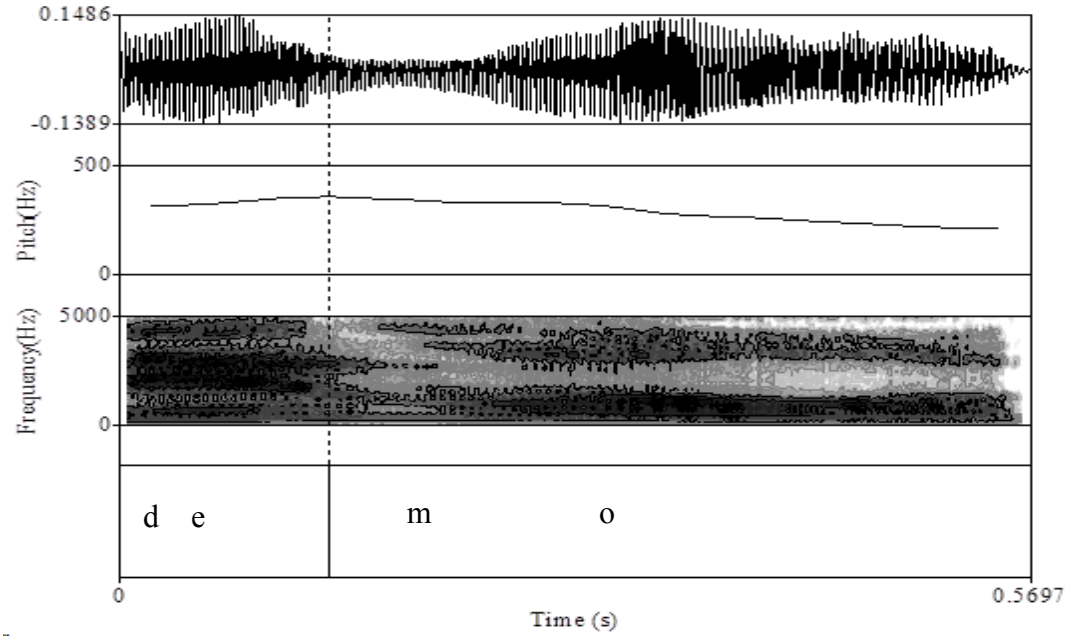

図 8　例 31 の「でも」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム

例 30 と例 31 の日本語談話標識「でも」の音声的実現は、「でも」の話題移行という機能より「でも」のピッチ変動が広く、全体の長さは長くて 2 拍目の持

続時間長が延長するという韻律的特徴が観察された。

3.4.2. 話題移行

日本語談話標識「でも」の話題移行の機能は、A と否 A の対立関係を示すものではなく、元の話題に戻したり、今の話題を更に発展させたりするために用いられるものである。

例 32

話者	発話内容
L：	はい、お願いします。
R：	はい、お願いします。
L：	ええ、でもそれはすいませんその延滞料金なんですけど、（ええ）最終的にその人達は返すつもりがないんですか<っていう訳じゃなく>{<}。
R：	<えー>{>}っとですねー、色んなパターンがあるんですね。

例 32 はインタビューが開始した直後の会話である。会話参与者双方が互いに挨拶をした後、L はいきなり日本語談話標識「でも」を用いて延滞料金の話に突入している。この日本語談話標識「でも」を用いた発話（否 A）は対応する先行発話（A）が存在しないため、A と否 A の対立関係を構築するものではないことは明らかである。後の文脈からすれば、会話参与者双方がインタビューの前にすでに R の仕事について話を交わしたことがあると考えられる。インタビューがあることで、その話題が一旦中断しインタビューの始まりの挨拶に移った。挨拶が終わった後、L は日本語談話標識「でも」を用いて再びインタビュー前の元の話題に戻した。この場合に用いた日本語談話標識「でも」の音声的実現を

図 9 に示す。図 9 からわかるように、この例の「でも」については、対立予告の場合よりピッチ下降幅が狭く、「でも」の全体の長さが短い。

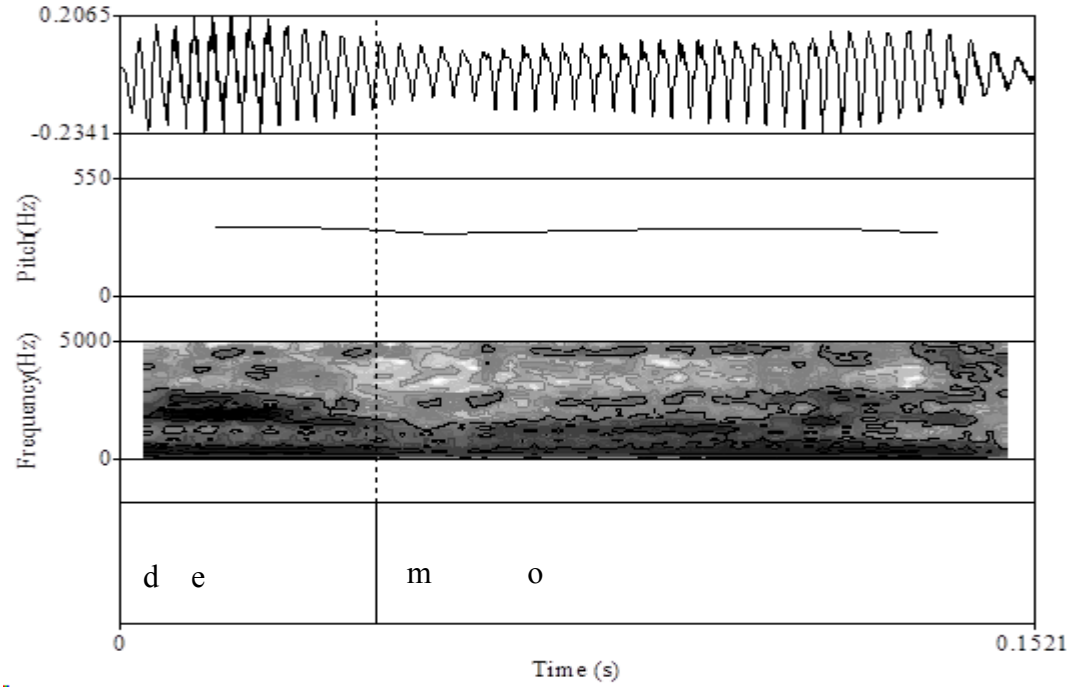

図 9　例 32 の「でも」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム

例 32 は話題を転換する例であるが、次の例 33 は日本語談話標識「でも」が繋ぐ後続発話と先行発話との間に明確な逆接・対比がなく、単に時間の経過を追って今の話題をさらに発展させるものである。岩澤（1985）などの先行研究によると、この用法は日本語談話標識「でも」の会話使用の中で最もよく使用される用法である。話題を発展するための日本語談話標識「でも」の使い方は話者の主張と感想を述べる際に多く観察され、またフィラー[17]と見なされるもの

[17] フィラーとはこれまで日本語で声的感動詞、間投詞、言いよどみ、つなぎの語、遊び言葉、冗長語、間投声、ヘジテイション（hesitation）などさまざまな名で呼ばれてきた現象のことである（山根, 2002）。

も少なからず存在する。

例 33

話者	発話内容
R：	だってあたし東京に来たばかりの時寂しかったですもん、何か喋ってもみんな反応してくれないし、（<笑>）突っ込んで突っ込んでみたいなね <笑いながら>。
L：	<笑>。
R：	返事して、反応してって。
L：	<おかしいですね>{<}。
R：	<デパートのお姉>{>}さんも冷たいし、（あー）　みんな優しいですよ、関西の人は。
L：	でもそう思いました大阪行った時。
R：	でしょ。
L：	うーん。
R：	でしょ。
L：	後ね、町歩いててもエネルギーがある大阪の方が。

例 33 は、関西人である R が上京した際の印象について語る会話である。この例で L が使用した日本語談話標識「でも」は R の主張「関西人はみんな優しい」（A）に対し、否 A を立てると言うよりもむしろ同感の意を示し、今現在の話題の更なる発展に貢献したものと考えられる。以下の図 10 は例 33 の日本語談話標識「でも」の音声的実現である。図 10 に示されるようにこの例の「でも」のピッチ下降幅が狭く、「でも」の全体の長さが短い。

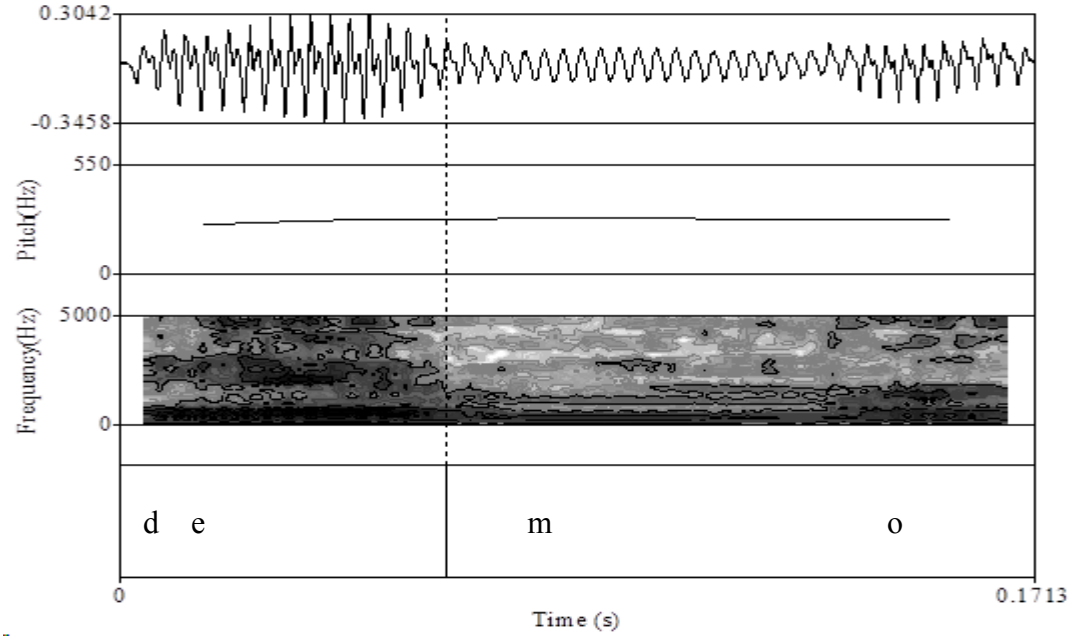

図 10　例 33 の「でも」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム

3.4.3. 「でも」の意味拡張に関する検討

上記では、日本語談話標識「でも」の対立予告と話題移行という 2 つの談話機能について、それぞれの会話例を挙げ、音響分析の結果と併せながら説明を行った。以下では、「でも」の意味拡張について詳しく説明する。岩澤（1985）が述べているように、「でも」のような逆接型接続詞は明確な論理関係の間でのみ使用されるわけではなく、主体的判断にまかされる面が多分にあるが、その部分がさらに増大し、逆接関係が曖昧化するにつれ、逆接性が薄くなって喪失してしまう。

日本語談話標識「でも」の対立予告という機能は、上述したように、「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間に A と否 A の対立関係が成り立つものである。しかしながら、「でも」の A と否 A がはっきりと対立する例は岩澤（1985）が

指摘しているように、実際には少なく、むしろ聞き手の判断と推論に頼り間接的に成り立たせることの方が多い。この聞き手の判断と推論の手掛かりは話し手が使用した「でも」の音声的実現であると考えられる。すなわち、話し手が使用した「でも」の音声的実現に長く延びる「も」の発音と比較的大きいピッチ下降という韻律的特徴があるが故に、A と否 A の対立関係を立てようとしているという話し手の意図を聞き手が的確に判断・推論することができると思われる。

一方、日本語談話標識「でも」の話題移行という機能は A と否 A の対立関係が成り立たず、岩澤（1985）が言うように逆接型接続詞の逆接性が薄くなり喪失してしまう段階にあると考えられる。A と否 A の対立関係を示すものではないため、聞き手の注意を引き付ける必要性もその分低いと思われる。したがって、A と否 A の対立関係を示す対立予告という機能のように、「でも」の持続時間長の変化とピッチの激しい変動といった傾向が見られなかったのである。

3.5. 本章のまとめ

本章では、まず、日本語談話標識「でも」を考察するにあたって使用した分析資料である『日本語話し言葉コーパス』について説明した。次いで、日本語談話標識「でも」が繋ぐ先行発話と後続発話の間に A と否 A の関係があるか否かに重点を置き、「でも」の 4 つの用法を【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に分類した。更に、それぞれの場合に現れる日本語談話標識「でも」の韻律的特徴を考察した。最後に、日本語談話標識「でも」に対して行った音響分析の結果に基づき、日本語談話標識「でも」の談話機能を対立予告と話題移行という 2 つの機能に分類しつつ、それぞれの談話機能を

詳述した。

前川・北川（2002）は音声による情報伝達過程を以下のように図式化することができると説明している。

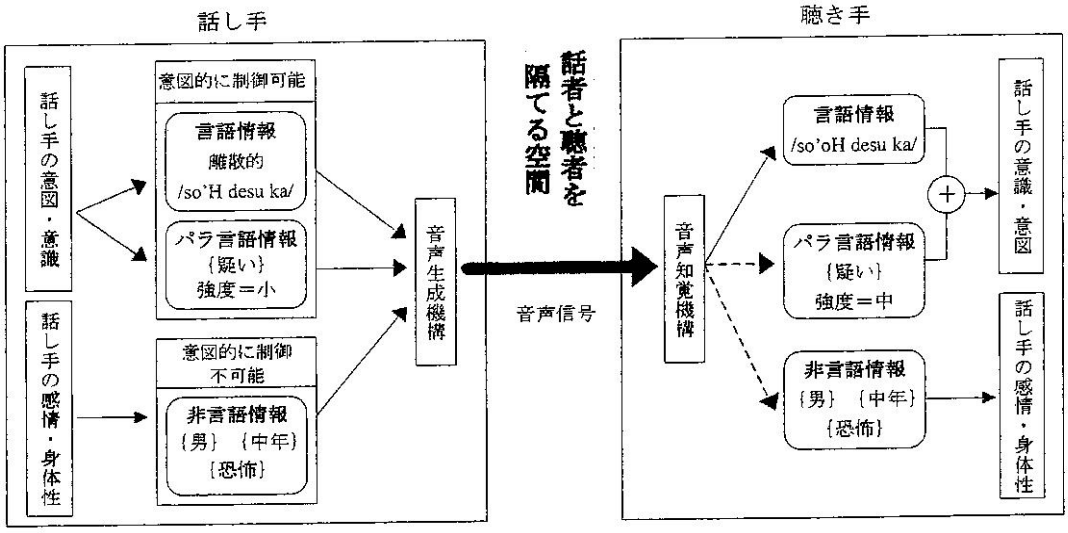

図 11　音声による情報伝達過程の模式図（前川・北川, 2002：48）

図 11 で示されているように、聞き手は言語情報とパラ言語情報を総合的に判断し、話し手が伝えようとする内容と目的を解釈する。本章の考察結果を前川・北川（2002）の模式図を用いて説明すると、以下の図 12 と図 13 となる。

図 12 と図 13 に示すように、日本語談話標識「でも」の伝達過程は 2 つのパターンにまとめられる。実線の矢印は、話し手の発話意図が、言語情報とパラ言語情報を通して聞き手に伝達する過程であり、破線の矢印は、聞き手が、言語情報とパラ言語情報によって話し手の発話意図を解釈する過程である。この 2 つのパターンについて以下で順次説明する。

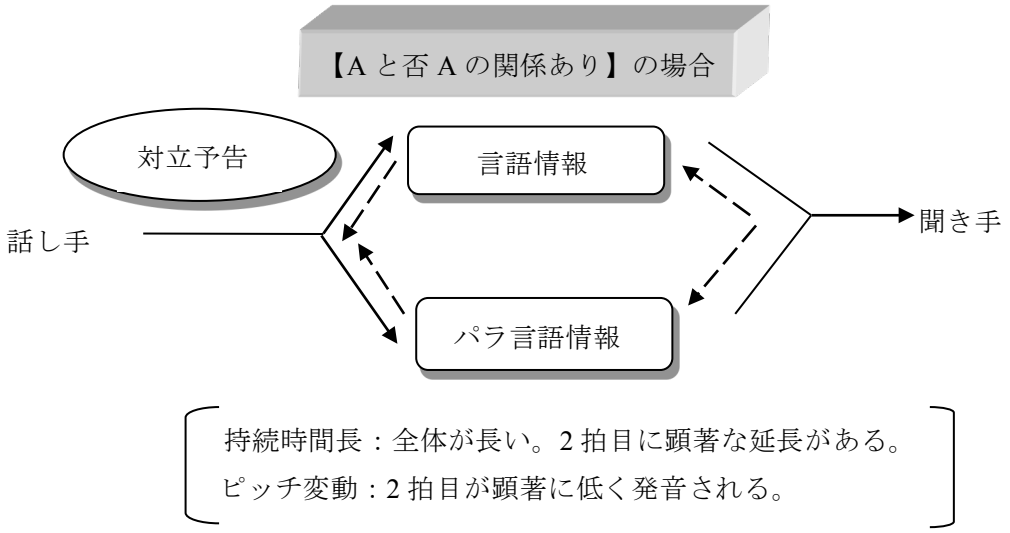

図 12　【A と否 A の関係あり】の場合における「でも」の伝達過程の模式図

まず、【A と否 A の関係あり】の場合では、話し手は先行する情報に対して対立関係を予告するつもりで日本語談話標識「でも」を使用する。この対立予告という意図をはっきりと聞き手に解読してもらうために、言語情報のほかに、2 拍目「も」の長さを延ばし、「でも」の 2 拍目「も」を低く発音してピッチを大きく変動させるという形でパラ言語情報の伝達に工夫をする。一方、聞き手は話し手から伝えられた言語情報と際立った韻律的特徴をもつパラ言語情報により、話し手の対立予告という意図の解釈にたどり着くことができると考えられる。

次に、【A と否 A の関係なし】の場合の伝達過程を見る。

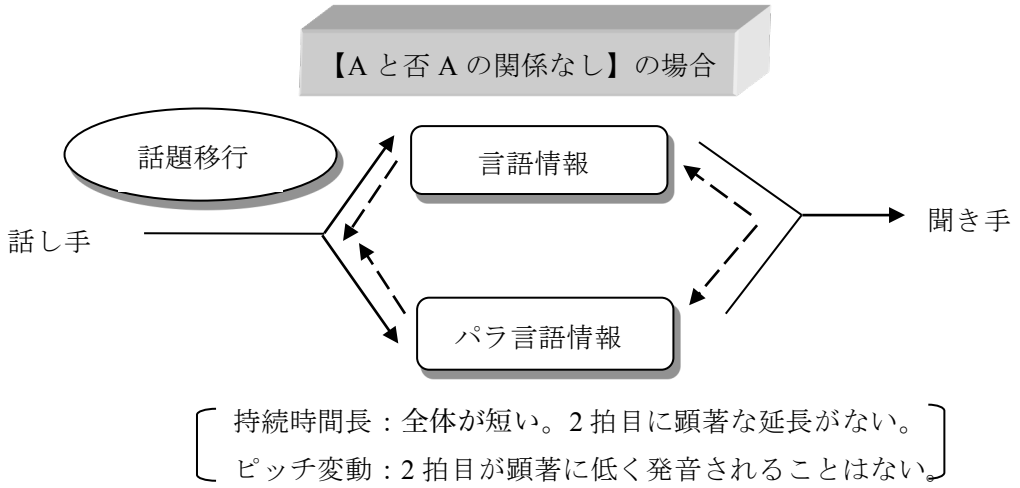

図 13　【A と否 A の関係なし】の場合における「でも」の伝達過程の模式図

【A と否 A の関係なし】の場合では、話し手は A と否 A の対立関係を立てるよりむしろ今の話題を更に発展させたり、元の話題に戻したりするために日本語談話標識「でも」を使用する。聞き手に誤解されないように、日本語談話標識「でも」の持続時間長とピッチ変動などの音声的実現にあまり変化を生じさせない。話し手の話題移行という意図を言語情報とパラ言語情報を通して聞き手に伝える。一方、聞き手は話し手が伝えてきた言語情報と際立った韻律的特徴を持たないパラ言語情報によって、話し手の話題移行という意図を的確に判断することができると考えられる。

第 4 章　日本語談話標識「だから」に関する考察

4.0. はじめに

本章では、まず、日本語談話標識「だから」を考察する際に使用した分析資料について説明をする。次いで、相互作用の観点から日本語談話標識「だから」を分類する仕方について述べる。最後に、日本語談話標識「だから」の使用の韻律的特徴に基づき、話し手が使用する日本語談話標識「だから」の談話機能を再考する。

4.1. 分析資料

日本語談話標識「だから」の音声的実現と談話機能を解明するにあたって、本章は第 3 章と同様に、前川他（2005）『日本語話し言葉コーパス』（Corpus of Spontaneous Japanese：略称 CSJ）を利用した。また、分析材料として使用したのは CSJ に収録されている 16 組、計 3 時間 36 分の自由対話資料である。なお、本章は研究目的に応じ、分析材料とする 16 組の文字資料を宇佐美（2003）の文字化原則にしたがって整え、発話文を基本単位とした研究用のデータベースを作成して使用する。

4.2. 相互作用の観点からの分類

林（2002）は「だから」の本質的な機能と特徴について、次のように述べている。

「だから」の本質的な機能は、「前件の S1 で述べた事象が、後件の S2 で述べる事象の原因・理由になることを表す」というものである。そして、「だから」で導入される結果や結論という後件は、言語内知識がなくても、聞き手と共有しているはずの言語外常識や知識に支えられ、聞き手に必然的な理解を得られるという「話し手の確信」が含まれているといった特徴を持っている。

（林，2002：306-307）

ところが、聞き手が事態を十分に認識していない場合には、この「話し手の確信」が含意された日本語談話標識「だから」の音声的実現は蓮沼（1991）と谷崎（1994）がいう焦燥感と苛立ちのニュアンスに聞こえることがあると考えられる。したがって、聞き手の事態認識が十分であるか否かに応じて日本語談話標識「だから」の音声的実現が変わってくると思われる。この音声的実現を明らかにするために、本章では話し手が用いた日本語談話標識「だから」の機能解明に重点を置くという先行研究の手法と異なり、聞き手の発話行為に焦点を当て、CSJ から採集された日本語談話標識「だから」の 59 個の用例の使用状況を【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合に分けて論を進めていく。

59 個の日本語談話標識「だから」の用例の分類を行う際に、「だから」の音声からの影響を避けるために、文字資料だけで判断した。また、分類の信頼性を確認するため、セカンドコーダーを立てカッパ係数（Cohen’s Kappa）を求めた。その結果、k=.932 という実質的に一致していると見なされる高い数値が確認された。筆者とセカンドコーダーの判断が一致しない部分についてはセカンドコ

ーダーと話し合い、母語話者の意見を尊重して分類を決定した。文字資料による分類の結果が決定されてはじめて音響分析の段階に入ることにした。

以下ではまず、【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合という分類の仕方について説明する。

4.2.1. 【聞き手認識十分】の場合

【聞き手認識十分】の場合とは、話し手は聞き手の応答から聞き手が事態を十分に認識していることを把握できる場合である。今回の考察で採集された 59 例では、約半分（29 例）の日本語談話標識「だから」の使用がこの【聞き手認識十分】の場合に当たっていた。日本語談話標識「だから」は原因・理由を導くという本質的な機能をもつため、一般的に日本語談話標識「だから」が用いられる環境といえば、この【聞き手認識十分】の場合をすぐ思い浮かべるであろう。

以下では聞き手の応答を同意、理解、立場一致表明ありの 3 つのパターンに分類し、それぞれの会話例を挙げながら説明する。

<同意>

分析資料では 8 例見られたが、話し手が日本語談話標識「だから」を使用する前に、聞き手が「うん」(4 例)、「はい」(2 例)、「そうです（よ）ね」(2 例)の語句で話し手の論述に同意の旨を示しているものである。例 34 では、R は L に自分が今年テニスで肉離れする「ぶりってやる」ことが多いと語りつつ、テニスのボレーという打ち方を説明している。ワンバウンドした方が打球が合わせ易いがその分走らないと取れないという性質があるという R の説明を聞いた後、L は「あーそうですね」という発話で R の論述に賛成の意思表示をした。R

はＬの同意表明の発話によってＬが事態に十分な認識があることを確認した上で、日本語談話標識「だから」を用いて前述した肉離れのこととボレーの関係を補足で説明している。

例 34[18]

話者	発話内容
R：	ボレーって、あのー、もう<すぱっとこう、うーん>{<}。
L：	<瞬発力ですもんね>{>}。
R：	怖いですよ、目の前にボール来るの。
L：	そうでしょうね。
R：	うーん、こう下から来た方が（ええ）（ええ）合わせ易いって言うか（うん）（うん）、でもその分走らないと取れないんですけど。
L：	あー、そうですね。
R：	うーん、だから、うーん、あのー、最後にぶりってやったのもやっぱりボレー取ってましたね。
L：	<笑> 痛そう。

<理解>

今回の分析資料では 8 例観察されたが、聞き手が「なるほど」(3 例)、「そうなんだ」(2 例)、「そっか」(2 例)、「あー」(1 例）の語句で話し手の発話内容に理解の意を示しているものである。例 35 では、R はＬが派遣会社に登録した際の感想を聞いた後、企業側が派遣会社の人を採用する実態について語っている。ＬはＲが提出した「企業側もまだ派遣会社の人を採用することに慣れていない」

[18] 文字化に用いた記号については、本論文の付録資料を参照されたい。

という情報を聞いた後、「あーなるほどね」と理解の意思表示をした。L の反応を見て、R は自分が伝えたいことを L に理解してもらえるという自信を得たため、日本語談話標識「だから」で具体的な例を導き出し、自分が伝達したい内容を更に具体化させている。

例 35

話者	発話内容
L：	うーん、ぞんざいに扱う結構派遣会社っていうのいっぱいあるので。
R：	うん、で、ま、派遣会社もそうなんですけど、企業側もね、（うーん）まだまだその派遣会社の人を採用して働いてもらうということに慣れてない企業ってのはやっぱりいっぱいあるんですよ。
L：	あー、なるほどね。
R：	うーん、だからさっきの話じゃないですけども、（ええ）妙に上司がその仕事をする指揮指揮命令者が、（ええ）派遣の人を社員じゃないもんだから怒鳴り付けてみたり、（あー）お前こんなこともできないのか何の為に金払ってると思うんだよってみたいなことをね,,

<立場一致表明あり>

立場一致表明ありとは、聞き手の応答から聞き手が話し手と同じ立場に立つことがはっきりわかるものである。今回の分析資料では 13 例が立場一致表明ありの場合に相当した。例 36 では、R は自分の発話の内容を後で見返すとおかしいものがたくさんあると説明している。その後、L も「人間の言葉は不思議で後で聞くととんでもないものがたくさんある」と語り、R と同様な意見を提示した。R は L が自分と同じ立場に立ったことを確認した後、日本語談話標識「だから」

を用いて聞き手にも必ず同感してもらえるはずの自分の感想を述べている。他の例も表現そのものに違いはあるが、立場一致表明の有無については明確に判断することが可能であった。

例 36

話者	発話内容
R：	けど私も、あのー、例えば、あのー、ここで録音している（うーん）学会の、あの、ビデオとか見返してみても、（うん）あ、私何でこんなこと言ってるんだろうと言うか、<笑>もう何か書き起こしてみるとむちゃくちゃな何か、<笑>構文になってたり。
L：	<笑>。
R：	それさっき言ったでしょう、みたいなことおんなじこと繰り返してたりするので,,
L：	<あれね>{<}。
R：	<多分>{>}さっきのでもそういうことがあったんじゃないかというような感じです。
L：	<笑>。
L：	いや、さっきのは結構スムーズに。
R：	あ、そうでした？？。
L：	ええ、かなり<流れが>{<},,
R：	<あー、そうでした>{>}？？。
L：	よく、まとまってたと思い<ますけど>{<}。
R：	<あ、そうですか>{>}？？。
L：	えー、でも人間の言葉って不思議ですよね。

L：	通じてるんだけど後で聞くと、（うーん）とんでもないものいっぱい<ありますよね>{<}。
R：	<そうそうそう>{>}、その、そうなんですよ。
R：	だから本当自分の声聞く程（あー）恥ずかしいことは,,
L：	本当本当。
R：	ないんですけど。

4.2.2. 【聞き手認識不十分】の場合

【聞き手認識不十分】の場合とは、話し手は聞き手の反応から聞き手の認識が十分である証拠が得られない場合である。すなわち、聞き手の反応から同意、理解、立場一致表明ありという意味合いが取れない場合である。本章の分析資料とする談話資料では、【聞き手認識十分】の場合と同様に、半分ほど（30 例）の日本語談話標識「だから」の使用が【聞き手認識不十分】の場合に相当した。【聞き手認識不十分】の場合では、聞き手の応答に応じて更に質問、意外性の表明、立場一致表明なしという 3 つの下位分類をすることができる。以下では質問、意外性の表明、立場一致表明なしという聞き手の反応について、会話例をもって検討する。

<質問>

話し手の日本語談話標識「だから」の使用を導きやすい聞き手の発話は WH 疑問文や YES-NO 疑問文のような質問の場合である。分析資料では 5 例観察されたが、その内訳は「～かな?」(2 例)、「～ですか?」(2 例)、「何?」(1 例）である。聞き手が話し手に質問するという行為は、聞き手には話し手が論じてきた事態についての十分な認識がないことの現れである。蓮沼（1991）は WH 疑

問文や YES-NO 疑問文の場合に「だから」が返答の冒頭に用いられることについて、次のように述べている。

> ここで「だから」を使う話し手の態度には、特別な含みが感じられる。すなわち、当然分かっているはずのことを聞き手が聞いているというふうに捉え、聞き手の質問をまともな質問として扱っていないという態度が感じられるのである。
>
> （蓮沼，1991：146）

例 37 では、L は泥団子についての説明を R に求めている。しかし、泥団子のことはこの前少し話したという R の回答に対し、L にはそれを聞いた覚えが全くないようで「泥で団子を作って何?この大会とか優勝とか」という発話で R の発話内容を確認した。その次の日本語談話標識「だから」が導く R の説明「だからできるだけ奇麗な泥団子を作るというような大会があったんですけど」は谷崎（1994）が述べているように、「一度言ったのに繰り返し説明しなければならないことに対する苛立ちが暗示される」（87 頁）と感じられる。

例 37

話者	発話内容
L：	なるほど、この次の、泥団子。
R：	あ、ん、泥、あ、これは少し話した、あの、ん、あのー、あの、泥で団子を作るっていう話。
L：	あー。
L：	泥で団子を作って何?この大会とか優勝とか。

R：	あー、あー、ええ、いや、だから、そのー、あの、できるだけ奇麗な泥団子を作るっていうような大会があったんですけど,,

<意外性の表明>

聞き手がそれまでの議論について意外性を表明した後で、話し手が日本語談話標識「だから」を使用する場合である。分析資料では 4 例が見られた。意外性を示すものには「えー」(2 例）と「へー」(1 例)、「そう」(1 例）の語句が観察された。なお、ここでいう「えー」や「へー」などの語句はいわゆるあいづちではなく、前後に間があって 1 発話文と見なされるものである。例 38 では、派遣社員は正社員ではないことで悪口雑言を言う上司の行為はセクハラの部分に入るとの R の説明を聞き、L は不思議に思って「へー」と反応した。R は L の反応を見て L の事態に対する認識が不十分と感じ、次のターンで日本語談話標識「だから」を用いて更なる説明をした。

例 38

話者	発話内容
R：	<精神的に>{>}やっぱりやると、（うーん）これはやっぱり就業違反なんですよ。
L：	うーん。
R：	うーん、厳密に言うと。
L：	なるほどね。
R：	もうセクハラの部分に入るんですね、それもね。
L：	へー。

R：	うん、だから、企業側もやっぱりその辺のところを派遣会社を使う、（うーん）　便利だよ安いよということと同時に、派遣の人を使う時のやっぱり、（うーん）ある程度どういう風に使ってあげるのがいいのかなということをやっぱ少しは、（うーん）思っといてくれないといけないということでしょうね。

<立場一致表明なし>

話し手が自らの論を展開しようとしても、聞き手の反応から話し手と同一の立場に立っている確信が得られない場合に現れる日本語談話標識「だから」である。今回の分析資料では 21 例が立場一致表明なしの場合に相当した。この立場一致表明なしの用例すべてにおいて、話し手の日本語談話標識「だから」の使用は例 39 のように、話し手が自らの論を展開している最中に観察された。また、その際に見られる聞き手の反応（ええ）、（うん）などもあいづちの場合がほとんどである。他の例については、立場一致表明ありと明確に判断できるもの以外は立場一致表明なしと見なした。

例 39

話者	発話内容
R：	後ぱっと聞いた時には、（ええ）結構こうすらって喋ってるな（うん）（うん）と思う人でも、意外とこう細かく聞いてみるとあんまり発音が明瞭じゃなくてこう、（うん）聞き取りづらかったりとか、（へー）っていうこともあって、ま、大体印象は一致するんですけどね、（ふーん）あのー、うーん、だから、この人は結構ちゃんと喋ってるなと思ったら後からもう大体喋ってるんですけど、たまにそういう、傾向

	のずれっていうのが、（うーん）うーんありますね。

4.3. 韻律的特徴

日本語「だから」は 1 拍目にアクセント核がある 3 拍語である。この 3 拍語の持続時間長と 1･2 拍間の下がり具合が話し手が論じてきた事態についての聞き手の認識が十分であるか否かによっていかに変化していくかを以下で考察する。

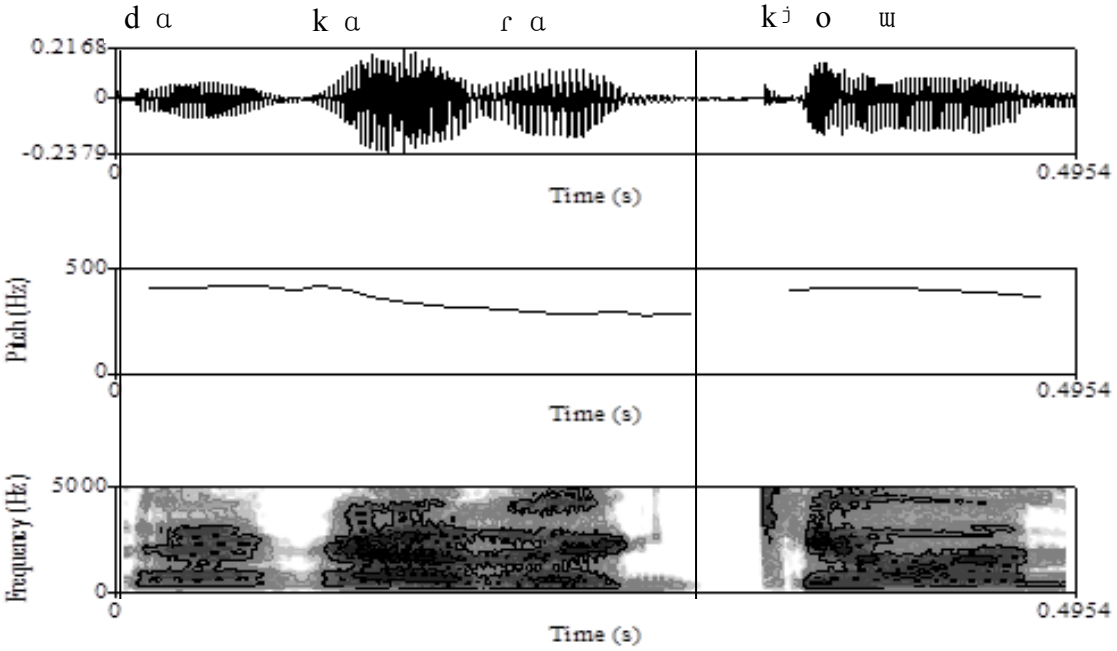

図 14　「だから、今日」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム

本章では第 3 章と同様に音声分析ソフトウェア Praat を使用し、日本語談話標識「だから」の持続時間長とピッチ変動を観察することによって得た、日本語談話標識「だから」の韻律的特徴の全体像を示す。日本語談話標識「だから」

の持続時間長は図 14 のように、音声波形とスペクトログラムを判断の基準とし、「だから」の振動が開始するところ（[d]の破裂の瞬間）から、振動が収束するところまでの時間を測定したが、「だから」と後続発話との間に無音区間がない場合、後続発話の始まりの単音までの区間を「だから」の持続時間長として計測した。また、「だから」のピッチ変動は「だから」の 1 拍目の最高値と 2 拍目の最低値をセミトーン値（st）で測定した。

本章の具体的な考察手順は以下の通りである。まず、CSJ の 16 組の自由対話資料の中から、「だから」を【聞き手認識十分】と【聞き手認識不十分】の両方の場合で使用している 11 名の被験者（男性 5 名、女性 6 名）の用例を取り出した。それから、個人毎に【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合で使用した「だから」の持続時間長とピッチ変動の平均値を出してそれを代表値とした上で検定を行った。

4.3.1. 持続時間長

まずは【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合について、日本語談話標識「だから」の持続時間長を比較する。

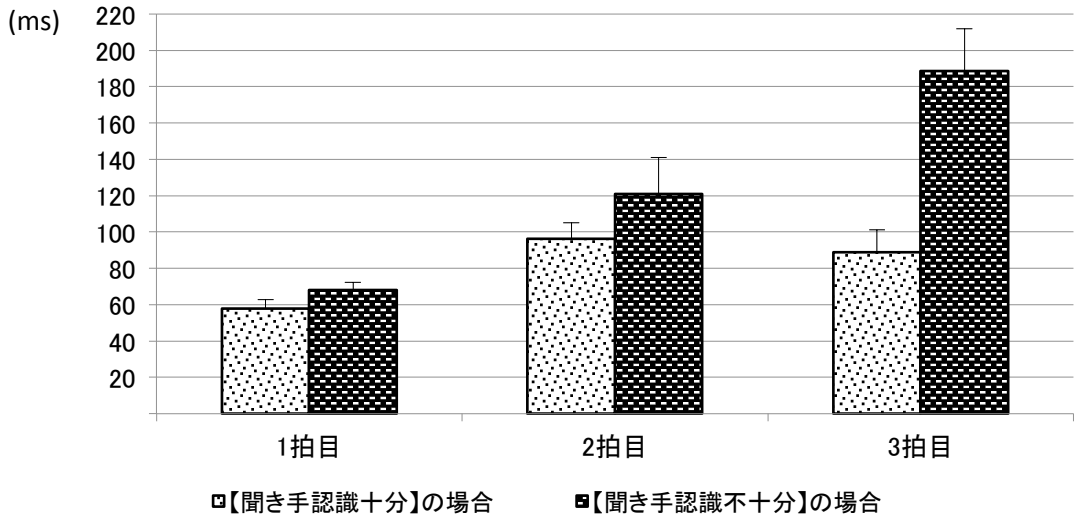

図 15　各場合の「だから」の発話持続時間長の変動（n=11）

図 15 は各場合の日本語談話標識「だから」の各拍の持続時間長を示したものである。なお、棒グラフの上部に示したのは、標準誤差である。【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合における「だから」各拍の持続時間長の差を、3（1 拍目・2 拍目・3 拍目）×2（【聞き手認識十分】の場合・【聞き手認識不十分】の場合）の繰り返し要因のある分散分析を行った。その結果は次のとおりである。

表 8　「だから」の各拍の持続時間長（ms）に関する場合の比較（n=11）

場合	「だから」の持続時間長（ms）					
	1 拍目		2 拍目		3 拍目	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【聞き手認識十分】の場合	58	16	96	29	89	40
【聞き手認識不十分】の場合	68	14	121	67	188	77
両場合の差	-10		-25		-99	
3×2 の分散分析の主効果と交互作用	拍		$F(2,20)=24.645$, $p<.001$			
	場合		$F(1,10)=9.267$, $p<.05$			
	交互作用		$F(2,20)=12.832$, $p<.001$			

表 8 の結果からわかるように、拍と場合との交互作用は、$F(2,20)=12.832$, $p<.001^{***}$で存在していると考えられる。単純主効果の分析の結果を以下の表 9 で示す。

表 9　日本語母語話者が各場合に使用した「だから」の持続時間長の比較

位置	(I)　場合	(J)　場合	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
1 拍目	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	−10. 296	6. 525	. 146	−24. 836	4. 243
2 拍目	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	−24. 562	16. 888	. 176	−62. 189	13. 066
3 拍目	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	−99. 418*	26. 036	. 003	−157. 430	−41. 405

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

*. 平均の差は .05 水準で有意である。

表 9 の分析結果に示したように、【聞き手認識不十分】の場合において発された日本語談話標識「だから」は【聞き手認識十分】の場合より 3 拍目「ら」が長い（$p<.01^{**}$）。すなわち、【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合の区別は、主に【聞き手認識不十分】の場合の 3 拍目がより長い（99 ms）ことで行っていると思われる。

また、【聞き手認識十分】と【聞き手認識不十分】の場合の主効果は有意であった[$F(1,10)=9.267$, $p<.05^{*}$]。つまり、【聞き手認識不十分】の場合に使用した「だから」の全体の長さは【聞き手認識十分】の場合より長い（134 ms）ことが明らかになった。

以上のことから、日本語談話標識「だから」の持続時間長の変動は聞き手が事態を十分に認識しているか否かによって変化しているということが結論付けられる。

4.3.2. ピッチ変動

「だから」は 1 拍目にアクセント核をもつ頭高型の 3 拍語であり、1 拍目の最高値と 2 拍目の最低値を図 16 に表示した。実線を引いたのは聞き手の反応が【聞き手認識十分】の場合に相当するものであり、点線を引いたのは【聞き手認識不十分】の場合に相当するものである。なお、折れ線グラフの上部に示したのは、標準誤差である。

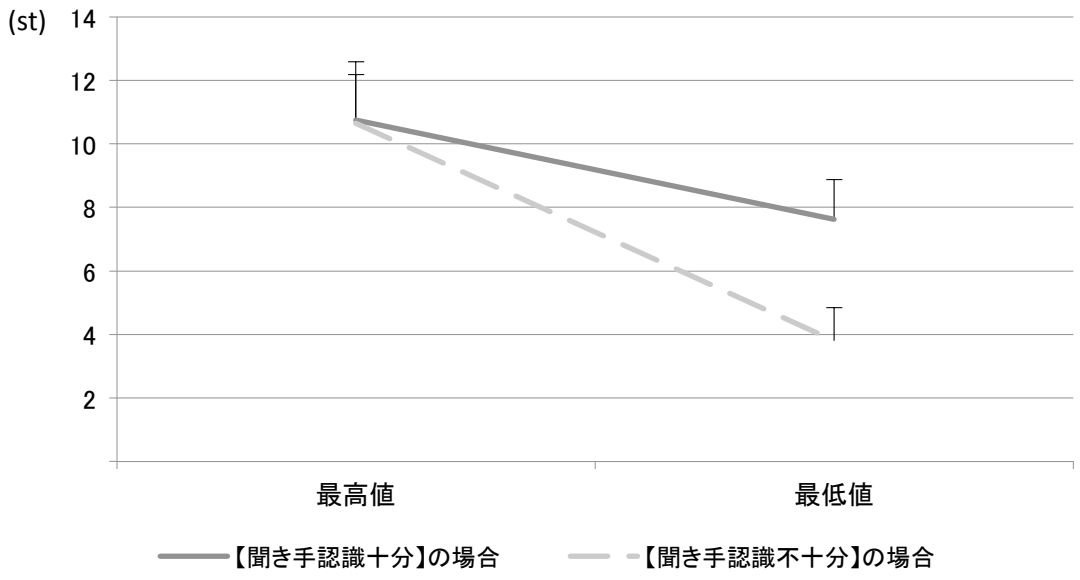

図 16　各場合の「だから」のピッチ変動幅（n=11）

【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合に使用した日本語談話標識「だから」のピッチ変動を 2（最高値・最低値）×2（【聞き手認識十分】の場合・【聞き手認識不十分】の場合）の繰り返し要因のある分散分析により検討した。その結果、次の表 10 のような結果が得られた。

表 10　「だから」の最高値と最低値（st）に関する場合の比較（n=11）

場合	「だから」のピッチ変動（st）			
	最高値		最低値	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【聞き手認識十分】の場合	10.74	4.81	7.62	4.18
【聞き手認識不十分】の場合	10.66	6.42	3.80	3.44
両場合の差	0.08		3.82	
2×2 の分散分析の主効果と交互作用	ピッチ	$F(1,10)=47.865$, $p<.001$		
	場合	$F(1,10)=16.187$, $p<.01$		
	交互作用	$F(1,10)=12.808$, $p<.01$		

表 10 に明示されているように、ピッチと場合との交互作用は、$F(1,10)=12.808$, $p<.01^{**}$で存在していると考えられる。単純主効果の分析の結果を以下の表 11、表 12 で示す。

表 11　日本語母語話者が各場合に使用した「だから」のピッチ変動の比較

場合	(I)　ピッチ	(J)　ピッチ	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
【聞き手認識十分】	最高値	最低値	3. 122*	. 399	. 000	2. 233	4. 010
【聞き手認識不十分】	最高値	最低値	6. 852*	1. 193	. 000	4. 194	9. 510

*. 平均の差は .05 水準で有意である。

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

表 12　日本語母語話者が各場合に使用した「だから」の最高値と最低値の比較

ピッチ	(I)　場合	(J)　場合	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
最高値	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	. 087	. 703	. 904	−1. 479	1. 653
最低値	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	3. 817*	. 721	. 000	2. 210	5. 424

*. 平均の差は .05 水準で有意である。

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

表 11 に示すように、【聞き手認識十分】と【聞き手認識不十分】のいずれの場合においても、1 拍目から 2 拍目へのピッチ変化は、「高－低」パターンである（$p<.001^{***}$）。また、【聞き手認識十分】の場合の 95%平均差信頼区間は 2.233

～4.010、【聞き手認識不十分】の場合の 95%平均差信頼区間は 4.194～9.510 となっている。4.194>4.010 なので、日本語母語話者が【聞き手認識不十分】の場合に使用した「でも」のピッチ変動幅は【聞き手認識十分】の場合より広いと考えられる。言い換えれば、【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合の区別は、【聞き手認識不十分】の場合のピッチ下降幅がより大きい（3.74st）ことで行っている。

更に、表 12 の分析結果からわかるように、【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合に見られるピッチ変動幅の差は、「だから」の最低値に起因していることも明らかになった。すなわち、【聞き手認識不十分】の場合は【聞き手認識十分】の場合より「だから」の最低値を低く発音する（3.82st）傾向があるといえよう。

以上の考察結果からいえば、聞き手が事態を十分に認識しているか否かということは「だから」の最低値とピッチ下降幅の差によって区別している可能性が高い。

4.3.3. 考察

日本語談話標識「だから」の音声的実現についての分析結果を以下のようにまとめる。

本章では、【聞き手認識十分】の場合における聞き手の反応に対して同意、理解、立場一致表明ありという下位分類をし、【聞き手認識不十分】の場合における聞き手の反応に対して質問、意外性の表明、立場一致表明なしの 3 つに分類した。話し手が【聞き手認識不十分】の場合に使用した日本語談話標識「だから」の音声的実現には【聞き手認識十分】の場合と異なった現象が窺われた。まず、日本語談話標識「だから」の持続時間長については、【聞き手認識十分】

の場合より全体の長さが長く、特に最終拍「ら」に顕著な延長が生じることが観察された。次に、日本語談話標識「だから」のピッチ変動についても【聞き手認識十分】の場合より 2 拍目の最低値を低くし、「だから」のピッチ下降幅を大きくする傾向が見られた。何故【聞き手認識不十分】の場合にこのような韻律的特徴が観察できたのであろうか。それは聞き手の反応を見て聞き手の事態に対する認識が不十分と感じ、話し手は自分の主張を一層強調したい気持ちになり、そのことが日本語談話標識「だから」の音声的実現に反映したものと考えられる。

4.4. 日本語談話標識「だから」の談話機能の再考

今までの先行研究は、日本語談話標識「だから」のコミュニケーション上の韻律的特徴まで考察しておらず、単に会話データの談話構造を踏まえて日本語談話標識「だから」の談話機能について論じているものがほとんどである。そこで、本章の以下の考察では主に日本語談話標識「だから」の韻律的特徴を根拠とし、その談話機能を再考する。

上述したように、日本語談話標識「だから」の韻律的特徴は、【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合で持続時間長とピッチ変動が異なっている。本章ではこのような日本語談話標識「だから」の韻律的特徴に基づき、日本語談話標識「だから」の談話機能を結論提出と理解要請という 2 つの機能に分類する。結論提出の機能は【聞き手認識十分】の場合に使用される日本語談話標識「だから」の機能であるのに対し、理解要請の機能は【聞き手認識不十分】の場合に用いられる日本語談話標識「だから」の機能である。

以下では新たに提案した日本語談話標識「だから」の結論提出と理解要請と

いう 2 つの談話機能について、音響分析の結果を参照しながらそれぞれの会話例を説明する。

4.4.1. 結論提出

日本語談話標識「だから」が連結した先行発話と後続発話の間に何らかの因果関係が認められるのは日本語談話標識「だから」のもっとも基本的な用法であると考えられる。谷崎（1994）によれば、実際の会話では結果を導く「だから」の用法が約 40%の高い頻度で使用されている。本章では、この実会話における因果関係を導く「だから」を結論提出という機能に分類する[19]。この結論提出という機能を果たすのも日本語談話標識「だから」の典型的な機能といえよう。また、この日本語談話標識「だから」が先行発話に対する結論を導くため、前述した通りに、話し手は日本語談話標識「だから」を使用する前に同意、理解、立場一致表明ありのような聞き手の反応を得なければならない。

例 40

話者	発話内容
R：	でも何か通信中退ってめちゃくちゃ格好悪くないですか?。
L：	うーん、かなり。
R：	だから絶対やめないと思って,,
L：	<偉い>{<} 。
R：	<何年掛かってもやめないって、見栄の為>{>}にやめないとか思って。

[19] 蓮沼（1991）では独話型に還元可能な用法と呼び、谷崎（1994）では「だから」の意味論的機能と呼んでいる。先行研究によって名称が異なっているが、同じ概念を指している。

例 40 では、R は自分の「通信中退は格好悪いこと」という考え方を L にも同感を得られるか否かを確認するために、ひとまず L に聞いてみた。その後、L の「うーん、かなり」という返答から L も同じ考え方を持っていることを確認できてはじめて、日本語談話標識「だから」を用いて「通信はやめない」という結論を導いた。この「だから」の音声的実現を図式化すると図 17 のようになる。すなわち、以下で説明する日本語談話標識「だから」の理解要請の機能より「だから」の F0 曲線は激しい傾きが見られず、「だから」の最終拍にも顕著な延長が観察されなかった。

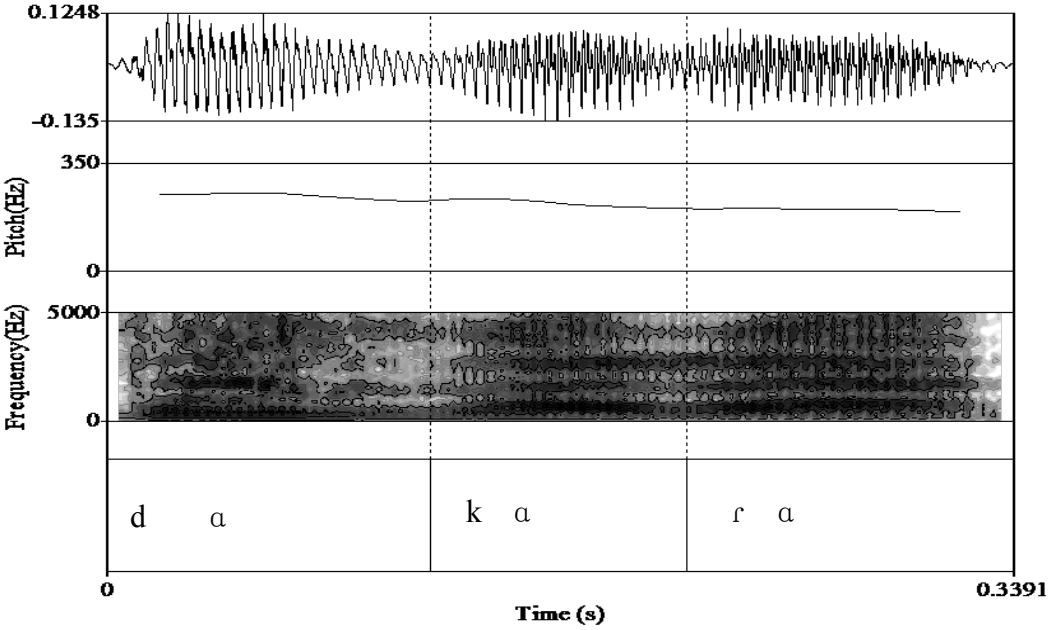

図 17　例 40 の「だから」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム

例 40 は話し手が日本語談話標識「だから」を用いて「だから」の前後発話にある原因／結果という関係を明示する用例であるが、実際の会話では次の例 41 のように日本語談話標識「だから」の導く結論が先行発話の内容を一般化・具

体化したものであるという用例もある。

例 41

話者	発話内容
R：	やっぱりあのー、プロの方っていうのは素人を嫌うんですね。
L：	うーん。
R：	うん、だから業界のこと勉強全く分かんない時は、（うん） 例えば本見てこういうこと勉強したんですけど、（うん）でも本ていうのは本当に断片的なことなんで、（うーん）このこと、ここどうな（ん）実際はどうなんですかね??。

例 41 では、R は営業の仕方を業界のプロに尋ねる方法について語っている。R はまず、「プロの方は素人を嫌う」という抽象的概念を L に説明した。L の同意という反応を得たあと、日本語談話標識「だから」を用いて具体例を挙げながら結論を述べている。図 18 はこの例で用いた「だから」の音声的実現を図式化したものである。図 18 に見られるように、「だから」の持続時間長とピッチ変動には際立った特徴が見られなかった。

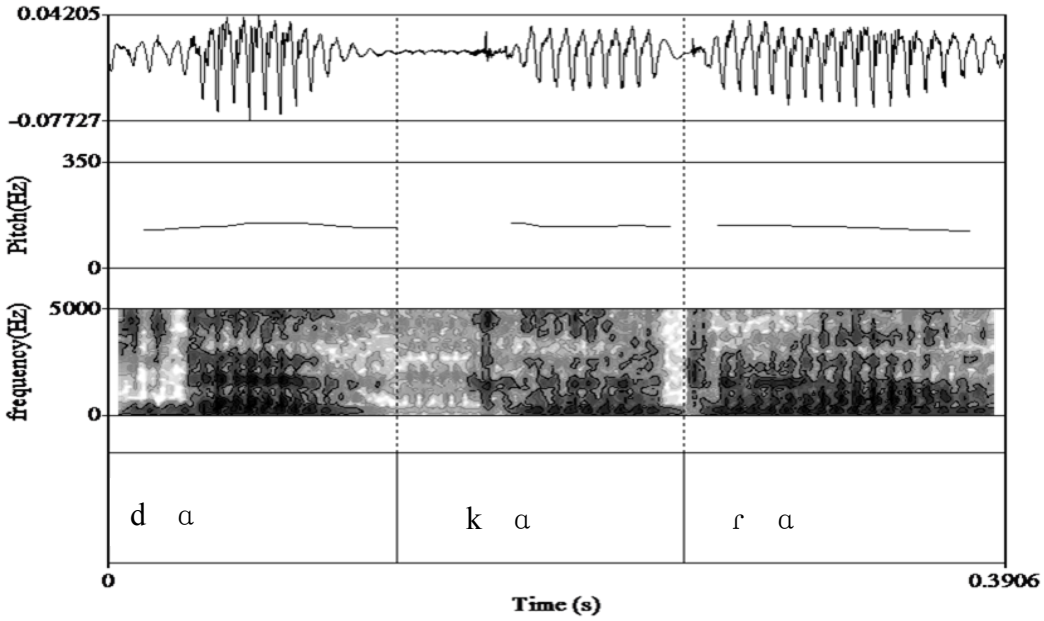

図 18　例 41 の「だから」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム

結論提出という機能を果たす日本語談話標識「だから」の音声的実現は、全体的にいえば、例 40 と例 41 の結果と同じように、ピッチ変動が平坦で、「だから」の最終拍の長さにも顕著な延長が見られないことが多い。

日本語談話標識「だから」の結論提出という機能は従来、「だから」が認識される因果関係を表す用法に当てはまるものであるが、第 2 章で論じてきたように、談話で使用する「だから」の用法には必ずしも因果関係を表すわけではないものもある。この因果関係を表さない日本語談話標識「だから」は主に、聞き手の反応や返答から聞き手の事態認識が十分である証拠が得られない場合に観察される。以下では、【聞き手認識不十分】の場合に現れる因果関係を表さない日本語談話標識「だから」の理解要請という談話機能について説明する。

4.4.2. 理解要請

理解要請という談話機能は話し手が聞き手の質問、意外性の表明と立場一致表明なしのような【聞き手認識不十分】の場合に使用される日本語談話標識「だから」の用法である。例 42 は理解要請の機能としての日本語談話標識「だから」の用例である。

例 42

話者	発話内容
R：	あの、それが、初めはその相手が、人だと思ってね、(うーん)うまく動いてるとそう思う訳ですよね、(あー)あたかも相手はコンピューターなんだけど人がいるかのように感じる。
L：	はい。
R：	けど使ってると何かおかしいな、(うん)あ、コンピューターだったんだと、(うん)思うと非常にショックに感じるってこともあるね。
L：	はー。
R：	うん、何か騙されたみたいな、(あー)感じになって、うん、だからそういう意味じゃ、初めからもうコンピューターはコンピューターらしくあった方がいいと。
L：	はー。
R：	うーんあまりなまじ人間そっくりだと、(うーん)人間だと思って話し始めて途中でコンピューターだと思うと、がっかりする、っていうことがあってね。

例 42 では、R はコンピューターの人工知能について L に説明している。R が持論を展開している間、L の大半の反応は「うん」、「あー」などのあいづちをうつだけである。L の反応から L の事態に対する認識が十分である証拠を得られないため、R は日本語談話標識「だから」を用いて L に事態を十分に認識させるように自らの論を進めていく。この場合に使用された「だから」の音声的実現は図 19 に示された通り、最終拍「ら」が長く延びているほか、2 拍目が低く発音されたことも観察された。

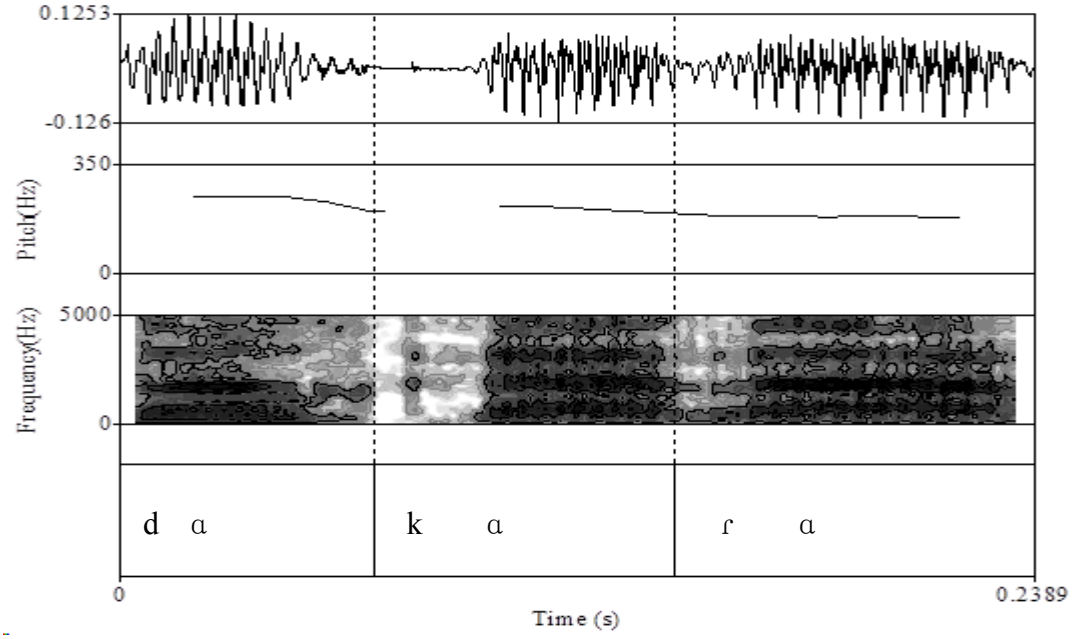

図 19　例 42 の「だから」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム

また、日本語談話標識「だから」の理解要請の談話機能の中で、特に聞き手の質問という反応に対して発された日本語談話標識「だから」の最終拍「ら」には著しい延長が見られた。聞き手の質問という反応に対して使用する日本語談話標識「だから」について、加藤（1995）は相手の理解を当然のこととして

求めるという主体の情意が働いていると述べ、メイナード（2004）は相手が分かってくれないという状況を察知・理解した上で「分かってくれ」、「もう既に言ったことだけど」という主体の感情を込めた使い方と説明している。

次の例は例 37 の再掲であるが、話を聞いた覚えがない L の質問に対し、R が使用した「だから」の音声的実現は図 20 に示された通り、2 拍目の最低値を低くし、最終拍「ら」を特に長く持続させて発音するという傾向がある。

例 43　（例 37 の再掲）

話者	発話内容
L：	なるほど、この次の、泥団子。
R：	あ、ん、泥、あ、これは少し話した、あの、ん、あのー、あの、泥で団子を作るっていう話。
L：	あー。
L：	泥で団子を作って何?この大会とか優勝とか。
R：	あー、あー、ええ、いや、だから、そのー、あの、できるだけ奇麗な泥団子を作るっていうような大会があったんですけど,,

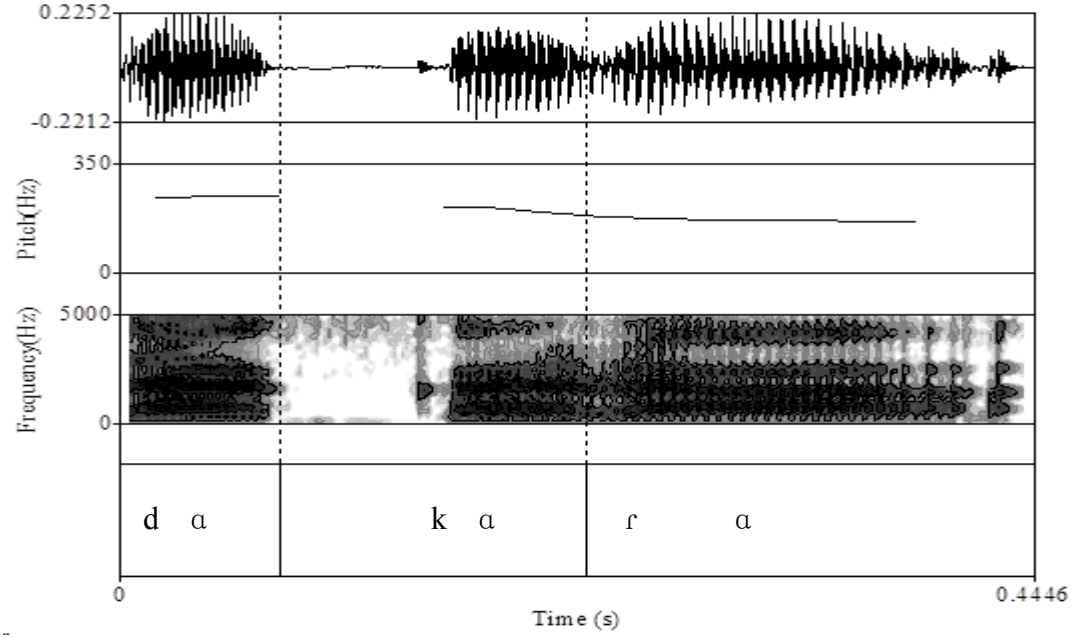

図 20　例 43 の「だから」の音声波形、F0 曲線及びスペクトログラム

【聞き手認識不十分】の場合の中で、特に質問という聞き手の反応に対し、話し手が日本語談話標識「だから」の最終拍「ら」に著しい延長を生じさせたことが観察された。聞き手の質問に対する話し手の「だから」の使用は苛立ちと感じられると言われているが、そのような感じられ方は「だから」の最終拍「ら」が長く延びることに起因するものと考えられる。もっとも、相手に物事を説くような状況で最終拍を長く発音するというのは、日本語談話標識「だから」に限った話ではなく、例えばキミネー、ソレサー、アノサーなどの表現にも見られる。だが言うまでもなく、最終拍の延長に伴う焦燥感と苛立ちのニュアンスは、日本語談話標識「だから」に固有のものである。

4.4.3. 「だから」の意味拡張に関する検討

以上では日本語談話標識「だから」の結論提出と理解要請という 2 つの談話

機能について、音響分析の結果を合わせながらそれぞれの会話例を説明した。上述したように、日本語談話標識「だから」の結論提出という談話機能は【聞き手認識十分】の場合に現れ、「だから」の連結した前後発話に因果関係が存在している。この結論提出という機能として働いた日本語談話標識「だから」の最終拍の長さには顕著な延長が見られず、日本語談話標識「だから」のピッチ変動にも著しい変化が観察されなかった。一方、理解要請という機能は【聞き手認識不十分】の場合に現れ、日本語談話標識「だから」の連結した前後発話には因果関係が存在しないと考えられる。日本語談話標識「だから」の理解要請という機能を音声面に反映し、日本語談話標識「だから」の最終拍「ら」が延長し、日本語談話標識「だから」の 2 拍目が顕著に低く発音され、ピッチレンジが大きくされるという特徴が見られた。

「だから」の因果関係を表す用法からそうでない用法がどのように派生されたのかについて、体系的に考察したものとして小西（2003）が挙げられる。小西（2003）は会話における「だから」の機能拡張について、次のように述べている。

> 従来の用法が持っていた発話内容レベルの因果関係（文間の因果関係）の表示という文法機能から、因果関係の前件・後件が発話行為レベルに拡張されたという過程を経て、「コミュニケーション障碍が生じていること」「発話者はそれを解決しようとしていること」を表示するという談話上の機能の獲得へと至ったと言える。
>
> （小西，2003：71）

つまり、「だから」は文間の因果関係の表示から、発話行為間の因果関係を表

すようになり、最後に話し手の発話態度の表示という対人的用法に拡大した。ここで提案した日本語談話標識「だから」の結論提出と理解要請という 2 つの談話機能は小西（2003）の説で解釈してみると、日本語談話標識「だから」の結論提出という機能は発話行為間の因果関係を表すもので、理解要請という機能は話し手の発話態度を表すものと考えられる。本章が日本語談話標識「だから」の結論提出と理解要請という 2 つの談話機能に対して行った音響分析の結果、結論提出の機能と理解要請の機能の音声的実現が異なっている。したがって、「だから」の用法は対人的用法になればなるほど、「だから」の持続時間長とピッチ変動といった音声的実現が変わってくるといえるのではないかと考えられる。

4.5. 本章のまとめ

本章では、まず、日本語談話標識「だから」を考察する際に分析資料として使用した『日本語話し言葉コーパス』について説明をした。次いで、相互作用の観点から日本語談話標識「だから」の使用を【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合に分け、それぞれの用例と各場合の韻律的特徴を分析して考察した。最後に、日本語談話標識「だから」の使用の韻律的特徴に基づき、話し手が使用する日本語談話標識「だから」の談話機能を再考し、結論提出と理解要請という 2 つの機能を抽出してそれぞれの談話機能について説明を行った。

本章で得られた結果を以下の図 21 と図 22 にまとめる。実線の矢印は、話し手の発話意図が、言語情報とパラ言語情報を通して聞き手に伝達する過程であり、破線の矢印は、聞き手が、言語情報とパラ言語情報によって話し手の発話

意図を解釈する過程である。図 21 と図 22 の 2 つのパターンについて以下で順次説明を行う。

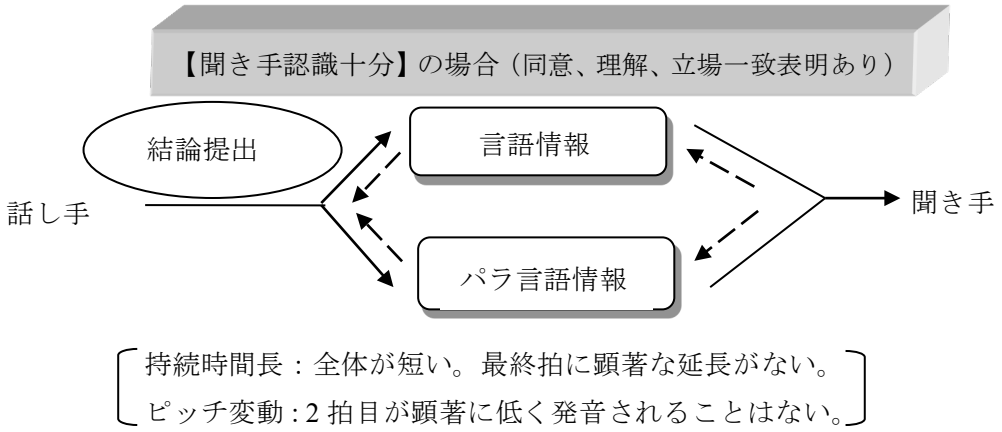

図 21　【聞き手認識十分】の場合における「だから」の伝達過程の模式図

まず、【聞き手認識十分】の場合では、話し手は聞き手の同意、理解、立場一致表明ありという反応から聞き手の事態認識が十分であることを確信する。それで、結論提出の意図で日本語談話標識「だから」を用いる。話し手のこの結論提出という意図は更に言語情報とパラ言語情報を通して聞き手に伝達する。一方、聞き手は事態に対する認識があるため、話し手が伝えてきた言語情報とパラ言語情報によって話し手が用いた日本語談話標識「だから」の意図は結論提出であることをすぐ理解することができると考えられる。

次に、【聞き手認識不十分】の場合における「だから」の伝達過程を見ていく。

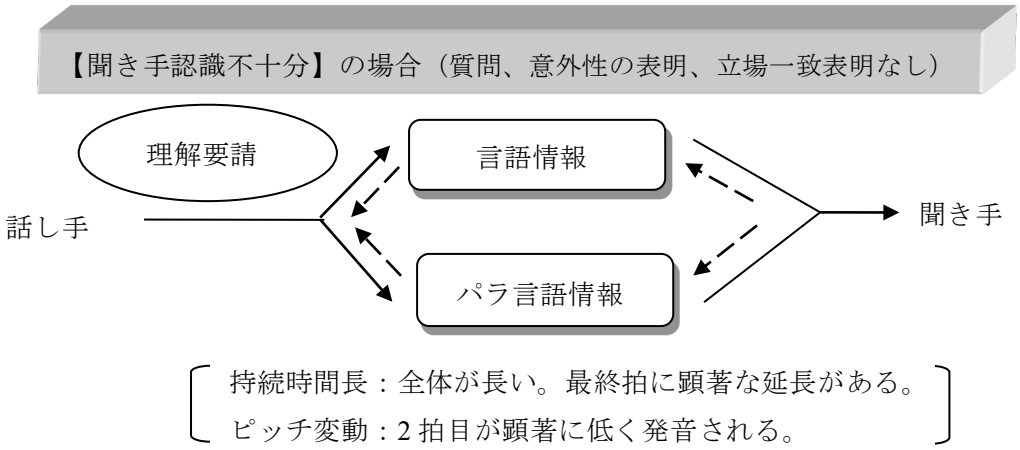

図 22　【聞き手認識不十分】の場合における「だから」の伝達過程の模式図

【聞き手認識不十分】の場合では、話し手は聞き手の質問、意外性の表明と立場一致表明なしという反応から聞き手が実態に対してまだ十分に理解していないと感じる。それで、理解要請という意図で日本語談話標識「だから」を用いる。話し手は自分の理解要請という意図を正確に聞き手に伝えるために、言語情報のほかに、最終拍「ら」を長く継続させ、「だから」の 2 拍目「か」を低く発音するようにパラ言語情報の伝達に工夫をする。一方、聞き手は事態に対する認識がないため、話し手が用いた言語情報と際立った韻律的特徴をもつパラ言語情報を総合的に判断して話し手の理解要請という意図を理解することができると考えられる。

第 5 章　中国語母語学習者の会話における「でも」「だから」の使用位置及び共起表現に関する考察

5.0. はじめに

日本語学習者と会話を交わす際に日本語母語話者に不自然さを感じさせる理由の 1 つは日本語学習者の接続詞の使い方が日本語母語話者とかなり違うことであると言われている（倉持・鈴木，2007）。したがって、日本語学習者が会話で接続詞を使用する状況及び日本語母語話者の使用との差異を究明することは日本語教育にとってかなり重要な課題だと思われる。

そこで、本章では、中国語母語学習者が実会話で使用する日本語談話標識「でも」「だから」の位置と共起表現を調査し、日本語母語話者との差異を明らかにすることを目的とする。なお、文法上の問題よりも、日本語学習者がどのように話すかという話し方が実際のコミュニケーションの上で重要であると考え、以下の調査では、中国語母語学習者が使用した「でも」と「だから」を取り上げて誤用かどうかの議論をすることを避け、どのような使い方をどの程度使用しているかを見ることに焦点を当てる。

本章では、まず、本章の分析資料、調査対象者と分析方法を示す。次いで、使用位置と共起表現の種類について説明する。最後に、コレスポンデンス分析の手法を用い、各日本語レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が使用した日本語談話標識「でも」「だから」の使用位置と共起表現の特徴を分析して考察する。

5.1. 分析資料

中国語母語学習者と日本語母語話者が会話で使用する日本語談話標識「でも」「だから」の位置と共起表現の差異を調査するにあたって、本章は同じ OPI 手法を用いた KY コーパス[20]、日本語学習者会話データベース[21]と上村コーパス[22]を使用する。

OPI はアメリカ外国語教育協会（The American Council on the Teaching of Foreign Languages：略称 ACTFL）が開発した外国語の口頭運用能力を測るためのインタビューテストである。その正式名称は “ACTFL Oral Proficiency Interview”である。OPI テストは外国語を話す能力の下限と上限を決めて学習者の会話能力レベルの判定を行う。その全体の流れは、被験者をリラックスさせる「導入部（Warm Up）」、下限を見極める「レベルチェック（Level Checks）」と上限を決める「突き上げ（Probes）」を交互に進行する部分、タスク能力を測るための「ロールプレイ（Role Play）」、インタビューを終える「終結部（Wind Down）」の 4 つの部分から構成されている。

テスター資格をもったテスターはこの流れに沿って被験者に質問し、また全体のインタビュー過程が録音される。インタビュー終了後にテスターと第 2 テ

---

[20] KY コーパスとは、中国語、英語、韓国語母語学習者が 30 人ずつ（初級 5 人、中級 10 人、上級 10 人、超級 5 人ずつ）、計 90 人分の OPI データを集めた大規模のデータベースである。その「KY」は、コーパスの作成者である鎌田（Kamada）と山内（Yamauchi）の頭文字を取ったものである。

[21] この研究は、国立国語研究所 Web ページ「日本語教育ネットワーク」の「日本語学習者会話データベース」によって提供されたデータを利用して行われたものである。「日本語学習者会話データベース」が収集された中国語母語学習者データ数は合計 43 件で、そのうち、2009 年 12 月の時点では文字化資料と音声資料ともに公開されたものが 22 件である。

[22] 上村コーパスは日本語母語話者と非母語話者の発話のパターンの比較分析と日本語教育向けの基礎資料となる日本語会話コーパス構築を目的とし、日本語母語話者（54 名）、非母語話者（66 名）計 120 名に行った日本語 OPI の文字化テキストを収録したものである。

スターが録音テープを聞き、各自が機能・タスク、場面/話題、テキストの型、正確さの 4 つの面から被験者の会話能力レベルを判定する。テスターと第 2 テスターの判定結果が一致してはじめて被験者の会話能力レベルが決定する。レベルは初級、中級、上級、超級の 4 つのレベルがあるが、初級、中級、上級のレベルについては、更に、-上・-中・-下に分けられている。

5.2. 調査対象者

KY コーパスと日本語学習者会話データベースは日本語学習者のみのコーパスであるのに対し、上村コーパスは日本語母語話者と日本語学習者両者のデータを含んでいるため、上村コーパスのみを用いて比較研究することがもっとも妥当であると思われる。しかし事実上、上村コーパスに収録されている中国語母語学習者のデータが少ないため、本章では日本語母語話者のデータは上村コーパスを用いるのに対し、中国語母語学習者のデータは日本語学習者データが豊富である KY コーパスと日本語学習者会話データベースを使用することにした。

上村コーパスに収録されている日本語母語話者のデータには 54 名のものがあるが、本章ではテスターと被験者の間の力関係を考慮し、テスターと学生の関係をもつ 23 名の被験者を選び出した。具体的には、日本語母語話者 23 名と中国語母語学習者 42 名（中級学習者 23 名、上級学習者 19 名）[23]を調査対象者とした。

なお、本章が使用した KY コーパス、日本語学習者会話データベースと上村

[23] 初級学習者と超級学習者の人数が少ないため、本章の調査対象者から除外した。本章の調査対象者の内訳は、KY コーパス（中級学習者 10 名、上級学習者 10 名）と日本語学習者会話データベース（中級学習者 13 名、上級学習者 9 名）である。

コーパスはすべて OPI 手法を取ったものであるため、1 つのインタビューの時間は 15-30 分に制限されている。したがって、本章の調査対象となる各グループの会話量は以下の通りである。日本語母語話者は 345-690 分、中級学習者は 345-690 分、上級学習者は 285-570 分である。

5.3. 分析方法

本章では KY コーパス、日本語学習者会話データベースと上村コーパスに収録されている中国語母語学習者と日本語母語話者のデータについて以下の手順で分析を行った。

まず、タスクによって「でも」「だから」が出やすいものとそうでないものがあるのではないかという懸念があるため、上述した OPI テストの構成要素の 1 つである「ロールプレイ」の部分を 3 つのコーパスからすべて排除した。次にインタビューの文字化資料から調査対象者の発話文のみを抽出し、調査対象者の発話文に混在するテスターのあいづちなどの分析に不適切な内容を削除した。それから、調査対象者の発話文を日本語形態素解析ツール『茶筌』[24]にかけ、その結果を手作業で確認した後、調査対象者の発話総語数[25]と「でも」「だから」の出現数を算出した。最後に、「でも」「だから」の使用位置と共起表現を考察して集計した。

[24] 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科自然言語処理学講座（松本研究室）に開発された日本語形態素解析ツールである。
[25] 延べ形態素数を指す。

5.4. 使用概況

中国語母語学習者と日本語母語話者が会話で使用する「でも」「だから」の使用位置と共起表現を考察する前に、まず、中級学習者、上級学習者と日本語母語話者が使用した異なり形態素数と延べ形態素数、また会話で使用する接続詞の異なり頻度（type frequency）と延べ頻度（token frequency）について説明する。

表 13　各グループの異なり形態素数及び延べ形態素数

グループ	人数	異なり形態素数	延べ形態素数
中級学習者	23	3391	43652
上級学習者	19	3881	45772
母語話者	23	3293	33898

表 14　各グループが使用した接続詞の異なり頻度及び延べ頻度

グループ	人数	異なり頻度		延べ頻度	
		使用数	使用割合（%）	使用数	使用割合（%）
中級学習者	23	15	0.44	798	1.83
上級学習者	19	29	0.75	689	1.51
母語話者	23	29	0.88	275	0.81

表 13 は各グループの異なり形態素数と延べ形態素数であり、表 14 は各グループが使用した接続詞の異なり頻度[26]と延べ頻度[27]である。接続詞の使用の異なり頻度からみると、上級学習者と日本語母語話者が会話で多様な接続詞を使用

[26] 異なり接続詞の使用数÷異なり形態素数
[27] 延べ接続詞の使用数÷延べ形態素数

しているが、中級学習者が使用した接続詞のバリエーションが少ないということが判明した。他方、接続詞使用の延べ頻度からみると、中級学習者と上級学習者が会話で使用する接続詞の割合はすべて日本語母語話者より高いということがわかった。

次の表 15 は中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が会話で多く使用した接続詞とその使用割合[28]を示すものである。

表 15　各グループが多く使用した接続詞及び使用割合（%）

グループ	中級学習者	上級学習者	母語話者
1 位	でも	でも	でも
	(0.79)	(0.42)	(0.19)
2 位	だから	だから	だから
	(0.29)	(0.31)	(0.16)
3 位	例えば	例えば	で
	(0.27)	(0.18)	(0.12)

表 15 に見られるように、「でも」と「だから」は共に中級学習者、上級学習者と日本語母語話者が会話で多く使用した接続詞であることが明らかになった。また、中級学習者と上級学習者の「でも」「だから」の使用割合はいずれも日本語母語話者の「でも」「だから」の使用割合を大幅に超えていることがわかった。

以下では、中級・上級レベルの中国語母語学習者が実際に日本語談話標識「でも」「だから」を発話のいかなる位置で用いているのか、またいかなる表現と共起しているのかを、日本語母語話者の結果と比較しながら考察する。

[28] 接続詞の使用数÷総語数（延べ形態素数）

5.5. 使用位置及び共起表現の種類についての説明

本章では日本語談話標識「でも」「だから」の使用位置を発話冒頭部と発話中途部の 2 つに分けて考察する。発話冒頭部とは、発話者がターン[29]を取得する場合であり、発話中途部とは発話者がターンを維持する場合である。

発話冒頭部に現れた日本語談話標識「でも」「だから」の共起表現として ϕ（例 44・例 45）と緩和語句（例 46・例 47）の 2 類があると考えられる。ϕ は発話者が直接に日本語談話標識「でも」／「だから」を使ってターンを取得し、共起表現がないことを意味する。緩和語句とは、発話者が直接に日本語談話標識「でも」／「だから」を用いることを避け、言いよどみ（「まあ」、「あの」、「えーと」、「うーん」等）や応答詞（「はい」、「ええ」等）などのような実質内容がないものを使い、相手の発話をとりあえず受けるものである。

例 44　［上村コーパス、T.O.（M）[30]］

T：　そうですね。で、も、例えばねあの会社ーなんかで、そういう、まあ、モデルみたいな、社会がそこにある訳ですね、（ああー）学生が真似をしている、でそういう社会、っていうの、どうですかねえ。

S：　でも変わっていくと思いますよ。あのー、／やっぱり、僕ーはあんまり、こう、マジョリティーに属する考え方をしない方ですけど、（ええ、ええ）こう周りの雰囲気を見てても、（うんうん）やっぱり、更にこう、個人主義っていうんでしょうかねえ、（うん）人は人っていうのが、徹底ー、してき

[29] メイナード（1993）はターンについて、「会話において一人の話者が話す権利を行使するその発話中の単位で、会話の当事者によりその何らかの意味又は機能を持っていると認められたものである」（56 頁）と定義している。

[30] T.O.はそれぞれ被験者の名前と苗字の頭文字を取ったもので、M は被験者の性別を表すものである。

てるんで、今のーおじさんとかが全部死ねば、亡くなれば。あはは。

例 45　［上村コーパス、K.O.（F）］

T：　ああ、高いん、高いですか？映画は。

S：　高いですよー。今千ー、三百円ー（うん）は、下らないですし、（うーん）五百円、いく所もありますし、二千円かかる映画も、出てきましたよねえ。

T：　うん、そうですかー。

S：　だからちょっと、（うん）手が、出ないていう、（うん）ほんとに。

例 46　［上村コーパス、M.K.（F）］

T：　あの、学生さんは、その、学校の帰りとかは、例えばどんなことをするんでしょうね。

S：　うーん、でも、そんなに時間が無いですよねえ。（うーん）だから少しどこかに寄って話をしたり（うーん、うーん、うーん）そういう事が多いです。

例 47　［上村コーパス、R.Y.（M）］

T：　じゃ、暇が無いってことでしょうね。きっとお暇な時間はないと。アルバイトしてらっしゃいますか。

S：　ああ、そう、だから（うん）ようするに学期中私ね（ええ）あの、自己限定ていうかな（うん）学期中は、勉学に取り組むと（はい）、勉学に集中するという方針を、あのー私自分で自分に課しておりますから（はい、はい）ね、アルバイトは大学の古い資料を整理する週４時間ぐらいのアルバイトにとどめると。

一方、発話中途部は発話者がターンを維持する場合であるが、前接したものの形式が完結標識（例 48・例 49)、接続助詞（例 50・例 51)、言いよどみ（例 52・例 53)、その他のいずれであるかによって、4 つに分類することができる。ここでいう完結標識とは、話者の 1 つの発話文が終了していることを示せるものである。例えば、「デス・マス／デシタ・マシタ」、「ダ／ダッタ」など、あるいは「よ」、「ね」のような終助詞である。

例 48　［上村コーパス、T.A.（F)］

T：　ああ、そうですか。でも、前もって調べとかないと、あの、ああ、見とけばよかったって（ああ）いう風なこともありません。

S：　そうですね。（うーん）それはあります。（うーん）でもまあ、あの、あった時が、出会いだったんだと。

例 49　［上村コーパス、K.N.（M)］

T：　よく、スポーツ、体力づくりなんていわれますが、（そうですね、え）ん。そういうものではなくて。

S：　え、あの、やはり部活とか何かだと、体力づくりもありますけども、やはり時間も長くかけないといけないですし（ん)、記録とかいうこともありますので、（ん）やはり大変だと思います。（ん）だからやはりー、そういう部活とかではなくて、自分のマイペースで、あの、自分のペースにあった（ん）ような運動で、え、今はそういう、あの、あまり負担のかからない運動ーしてます。（ん）はい。

例 50　［上村コーパス、T.A.（M）］

T：　はい。（はい）ああそうで、何を勉強なさいました？

S：　ええとー、自分の専攻分野はま、あの、一応国際コミュニケーションなんですけど、でもそれとは全く関係のないような、写真とか（うん）、あと、／うーん、絵とか、（うん）あとドイツ語とか（うん）そういうのばっかり取ってて、実際、こっちの学校に移った単位っていうのも、あの、３単位か４単位ぐらいで、（うん）ええ少なかったんですけど。

例 51　［上村コーパス、S.K.（M）］

T：　で、運転のほうはその、いわゆるペーパードライバーではなくて実際に、運転するおつもりで、皆さん。

S：　いえ、いやあやはり/（うん）え、学生はお金がそんなにありませんから（あー）だからその点は、ちょっともったいない気もするんです（うーん）けれども。ま、この時期、しかないだろうということで、はい。

例 52　［上村コーパス、S.K.（M）］

S：　ドーピングですか？

T：　はい。

S：　うーん、まあー、その方面についてよく（うん）分からないですねー。（うーん）うーん、でも、やっぱりその記録をあげようと思えばやってしまう、ものなんでしょうけれどもねー。（うーん、うーん）ええ。

例 53　［上村コーパス、R.Y.（M）］

S：　（前略）ええ。チンパンジーに言葉を教えている先生の試みが（はい、はい）あのー（ありますね）のって（はい）これは面白い仕事があるなー（はい、はい）と思ってね。うん、だからその、そういう仕事を僕もやりたいと、最初思ってたんだけれども（うん）、（後略）

また、その他とは、例えば、言い直し（例 54）、倒置文（例 55）などのような完結標識、接続助詞、言いよどみという 3 つの分類に入らないものである。

例 54　［上村コーパス、M.N.（F）］

T：　英語を（はい）ああ、そうですか（はい、ハハ）。その、まあ家庭教師とか塾とかー（ええ）日本の受験戦争ですという、あの（ええ）あのーことをしてらっしゃる方が多いんですけども（はい）受験、まあ今の受験制っていうんですか（はい）システムについて（ええ）どういうふうに考えてらっしゃいますか？

S：　あーやっぱりなんか、まあ塾で教えたことがあるんですけども（あっそうですか、うん）その時にやっぱりこうーなんか勉強、中学二年生の例えば英語をなんですけど（はい）それをみたときに、でもその男の子は中学一年生の始めの頃の英語さえもあんまりよくわかってなかったですね（ええ）、（後略）

例 55　［上村コーパス、Y.I.（F）］

T：　何か、その、選手自身は知らないで、監督とかにそういう、その、薬をあの、服用するように言われて、（うん）してしまうっていうようなケースも

あるようなんですけれどもね。（ああ）その、オリンピックの最初の、その精神に戻って、（ええ）っていうような、その議論もなされてるんですけれども、うん、それに関してはどうですか？

S：　そうですね、いや、あの、本来はそういうーことはなしにー、（うん）あのーやるべきだと思うんですけれども（うん）オリンピックーもーきれいな部分ばっかりじゃないですよねー（うん）じ、実際にはー、（うん）だからなんか、そういう問題が出てきてしまうのはー（うん）なんか、うん、あの、必然かなーとは思ってしまいますね。

5.6. 日本語談話標識「でも」の使用状況

以下では、まず中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が使用した日本語談話標識「でも」の使用位置と共起表現について説明する。

5.6.1. 使用位置

中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が発話冒頭部と発話中途部で日本語談話標識「でも」を用いた数を表 16 で示す。

表 16　各グループが発話冒頭部と発話中途部で使用した「でも」の度数

	中級学習者	上級学習者	母語話者
発話冒頭部	55	32	13
発話中途部	288	161	51
合計	343	193	64

中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者の使用した日本語談話標識「でも」が発話冒頭部と発話中途部に分布する状況は等確率（ランダム）に起こるか否かを検討するために、各グループの結果に対してカイ二乗分布を使った一様性の検定（chi-square test of goodness-of-fit）を行った。分析の結果はすべてのグループが有意となった［中級学習者：$\chi^2(1)=158.277, p<.001$；上級学習者：$\chi^2(1)=86.223, p<.001$；母語話者：$\chi^2(1)=22.563, p<.001$］。つまり、各グループはランダムの 50%ではなく、共に発話冒頭部よりも発話中途部で日本語談話標識「でも」を多く使用する傾向がある。以下では、各グループが用いた日本語談話標識「でも」の共起表現について説明する。

5.6.2. コレスポンデンス分析による共起表現の解析

中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が発話冒頭部と発話中途部で日本語談話標識「でも」と併用する表現の頻度を表 17 のクロス集計表で示す。

表 17　「でも」の発話冒頭部及び発話中途部における共起表現の使用度数

位置	共起表現	中級学習者	上級学習者	母語話者	合計
発話冒頭部	ϕ	31	17	1	49
	緩和語句	24	15	12	51
発話中途部	完結標識	155	61	5	221
	接続助詞	58	57	26	141
	言いよどみ	44	27	7	78
	その他	31	16	13	60
合計		343	193	64	

中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が発話冒頭部と発話中途部で使用した日本語談話標識「でも」は、いかなる表現と共起する傾向があるかを解明するために、本章はコレスポンデンス分析（Correspondence Analysis）を行う。コレスポンデンス分析はクロス集計表の複雑なデータ行列構造を散布図で単純化する手法である。類似した各要素が散布図内の付近に配置されるため、要素の類似性を視覚的に把握することが可能である。

表 17 に示されたように、本節の分析変数は 2 つあるが、1 つ目はグループ（中級学習者・上級学習者・母語話者）、2 つ目は各位置の共起表現（発話冒頭部：ϕと緩和語句；発話中途部：完結標識、接続助詞、言いよどみ、その他）である。

コレスポンデンス分析に入る前に、表 17 のクロス集計表に対して独立性の検定（chi-square test for independence）を行ったが、有意な結果が得られた[$\chi^2(10)=60.711$, $p<.001$***]。すなわち、グループによって日本語談話標識「でも」が使用される際の共起表現に違いがあるといえる。

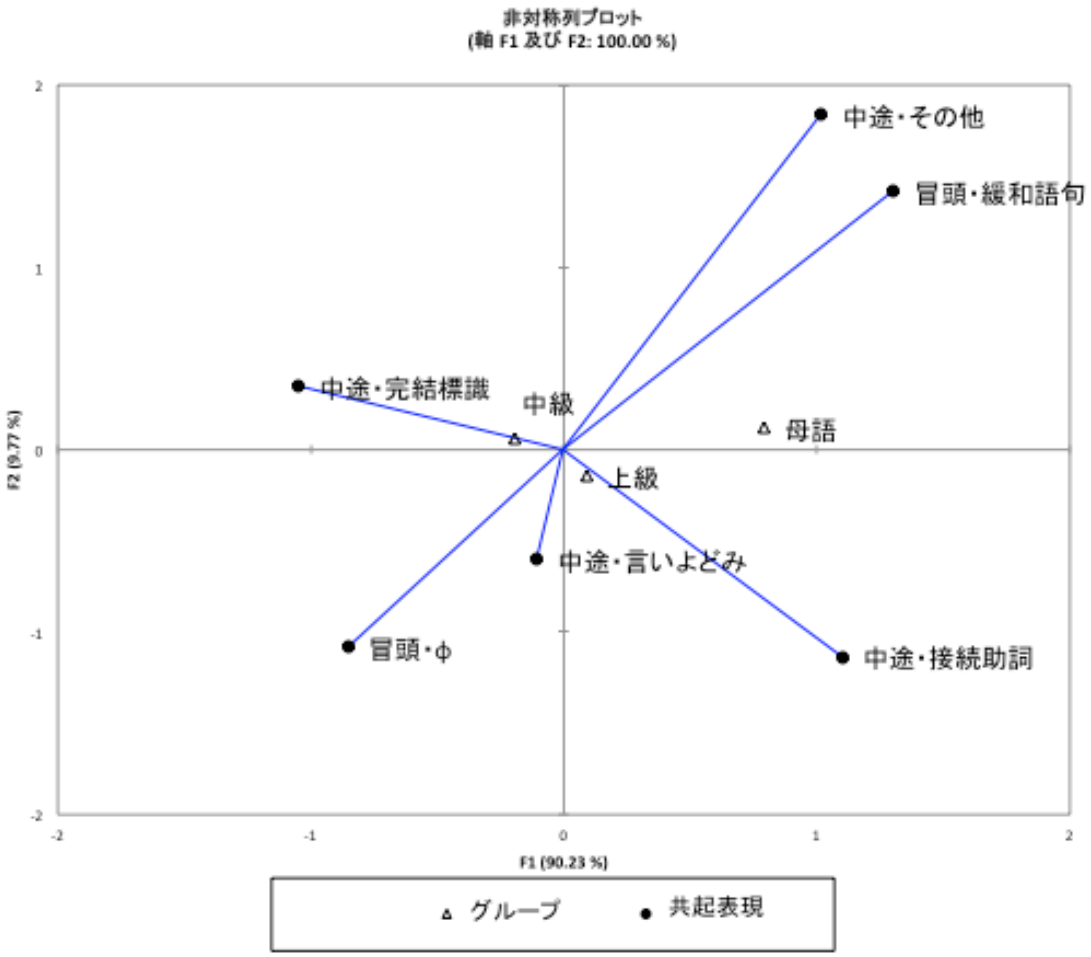

図 23　コレスポンデンス分析の結果による「でも」の散布図

図 23 の散布図は表 17 のクロス集計表にコレスポンデンス分析を実行した結果であり、もっとも寄与率[31]の高い第 1 次元（90.23%）と第 2 次元（9.77%）の得点を 2 次元散布図に投影したものである。中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が日本語談話標識「でも」を使用する際にいかなる表現と併用する特徴があるかは図 23 から読み取れる。図の中の項目は距離が近いほど類似した性質があり、逆に、項目の距離が遠いほど異なる性質を持っていると考えられる。また、両軸の交差点は平均値を表している。但し、内田（2006）

[31] 各次元（各主軸）がもとの情報の何割を説明しているかを示す。（内田 2006：16）

が指摘したように、散布図上の近さだけから解釈をすると意味づけを誤ることがある。したがって、以下の考察は散布図のほかに、列ファイル（column profiles）の情報も参考にしながら解釈を行った。

図 23 の中の三角形に示されたのは、中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者というグループ変数であるが、第 1 次元（90.23%）の横軸に沿って左から右に行くにつれて、中級→上級の順となり、中国語母語学習者の使用状況は日本語母語話者の方に向かって推移している様子が窺われる。言い換えれば、中国語母語学習者の日本語レベルが高ければ高いほど日本語談話標識「でも」の共起表現の使用は日本語母語話者に接近していくことが明らかになった。また図 23 と下記の表 18 から窺われるように、上級学習者は、母語話者よりも中級学習者に近く位置しているため、中国語母語学習者と日本語母語話者は、異なるグループであることがわかった。

表 18　「でも」の場合における各グループのカイ 2 乗距離

	中級	上級	母語
中級	0	0.347	0.990
上級	0.347	0	0.751
母語	0.990	0.751	0

更に、各グループの日本語談話標識「でも」の使用にどのような共起表現が特徴的に出現しているかは図 23 と下記の表 19 から読み取れる。

母語話者は、中級学習者、上級学習者と比べると、「冒頭・緩和語句」[32]、「中

[32] 「冒頭・緩和語句」＝発話冒頭部で緩和語句との共起表現、「中途・接続助詞」＝発話中途部で接続助詞との共起表現。以下同様。

途・接続助詞」と「中途・その他」を多く使用する特徴があるが、「冒頭・φ」に関しては、中級・上級レベルの中国語母語学習者が多く使用するという特徴を持っており、日本語母語話者と中国語母語学習者はこれらの特徴によって区別することができる。他方、中級学習者と上級学習者を比べると、中級学習者は、「中途・完結標識」を多く使用する特徴を持っているが、上級学習者は、「中途・言いよどみ」を多く使用する特徴がある。また、上級学習者は、「中途・接続助詞」の使用に関しては、中級学習者と母語話者の中間点にあると考えられる。

表 19　「でも」の場合における各グループのプロファイル

	中級	上級	母語	平均
冒頭・φ	0.090	0.088	0.016	0.065
冒頭・緩和語句	0.070	0.078	0.188	0.112
中途・完結標識	0.452	0.316	0.078	0.282
中途・接続助詞	0.169	0.295	0.406	0.290
中途・言いよどみ	0.128	0.140	0.109	0.126
中途・その他	0.090	0.083	0.203	0.125
合計	1.000	1.000	1.000	1.000

5.6.3. 本節のまとめ

以下では、日本語談話標識「でも」の使用位置と共起表現について分析した結果をまとめて考察する。

第 1 に、中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者の日本語談話標識「でも」の使用位置の分布に大差が見られず、共に発話中途部で多く使

用されている。

第 2 に、日本語談話標識「でも」の共起表現については、日本語母語話者は発話冒頭部で日本語談話標識「でも」を緩和語句と一緒に使用し、発話中途部で日本語談話標識「でも」を接続助詞とその他の表現と併用する特徴がある。一方、日本語母語話者に比べ、中国語母語学習者が特徴的に使用している日本語談話標識「でも」の共起表現は次のようである。中級学習者は「冒頭・ϕ」と「中途・完結標識」であり、上級学習者は「冒頭・ϕ」と「中途・言いよどみ」である。つまり、発話冒頭部では、中級学習者と上級学習者は何も加えずに日本語談話標識「でも」を用いる特徴があるが、発話中途部では、中級学習者は 1 つの文を完結してから日本語談話標識「でも」を使用し、上級学習者は言いよどみながら日本語談話標識「でも」を使用する特徴がある。更に、中国語母語学習者の日本語談話標識「でも」の共起表現の使用は中級→上級のように、目標言語の日本語母語話者の使用に近づいていくこともコレスポンデンス分析の散布図から確認することができた。

5.7. 日本語談話標識「だから」の使用状況

本節では、中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が会話で使用する日本語談話標識「だから」の位置と共起表現について説明する。

5.7.1. 使用位置

中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が発話冒頭部と発話中途部で使用した日本語談話標識「だから」の数を表 20 で示す。

表 20　各グループが発話冒頭部と発話中途部で使用した「だから」の度数

	中級学習者	上級学習者	母語話者
発話冒頭部	15	18	5
発話中途部	113	122	50
合計	128	140	55

中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が使用した日本語談話標識「だから」の分布状況を検討するために、日本語談話標識「でも」の場合と同様に、各グループの結果に対して一様性の検定を行った。その結果はすべてのグループが有意となった［中級学習者：$\chi^2(1)=75.031$, $p<.001$；上級学習者：$\chi^2(1)=77.257$, $p<.001$；母語話者：$\chi^2(1)=36.818$, $p<.001$］。つまり、各グループは共に発話冒頭部よりも発話中途部で日本語談話標識「でも」を多く使用する傾向がある。

以下では、各グループが用いた日本語談話標識「だから」の共起表現について説明する。

5.7.2. コレスポンデンス分析による共起表現の解析

中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が発話冒頭部と発話中途部で日本語談話標識「だから」を使用する際の共起表現の使用頻度を表 21 で示す。

表 21　「だから」の発話冒頭部及び発話中途部における共起表現の使用度数

位置	共起表現	中級学習者	上級学習者	母語話者	合計
発話冒頭部	ϕ	8	10	1	19
	緩和語句	7	8	3	18
発話中途部	完結標識	82	64	23	169
	接続助詞	19	25	9	53
	言いよどみ	7	19	4	30
	その他	5	14	15	34
合計		128	140	55	

中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が発話冒頭部と発話中途部で使用した日本語談話標識「だから」はどのような結びつきで使用されているかを明らかにするために、日本語談話標識「でも」の場合と同様に分析変数をグループ（中級学習者・上級学習者・母語話者）と各位置の共起表現（発話冒頭部：ϕ と緩和語句；発話中途部：完結標識、接続助詞、言いよどみ、その他）にし、コレスポンデンス分析を行う。また、コレスポンデンス分析に入る前に、表 21 のクロス集計表に対して独立性の検定を行ったが、中級学習者、上級学習者と日本語母語話者の共起表現の使用にグループ間の差異が見られた [$\chi^2(10)=33.067$, $p<.001$***]。コレスポンデンス分析の結果は以下の図 24 の通りである。

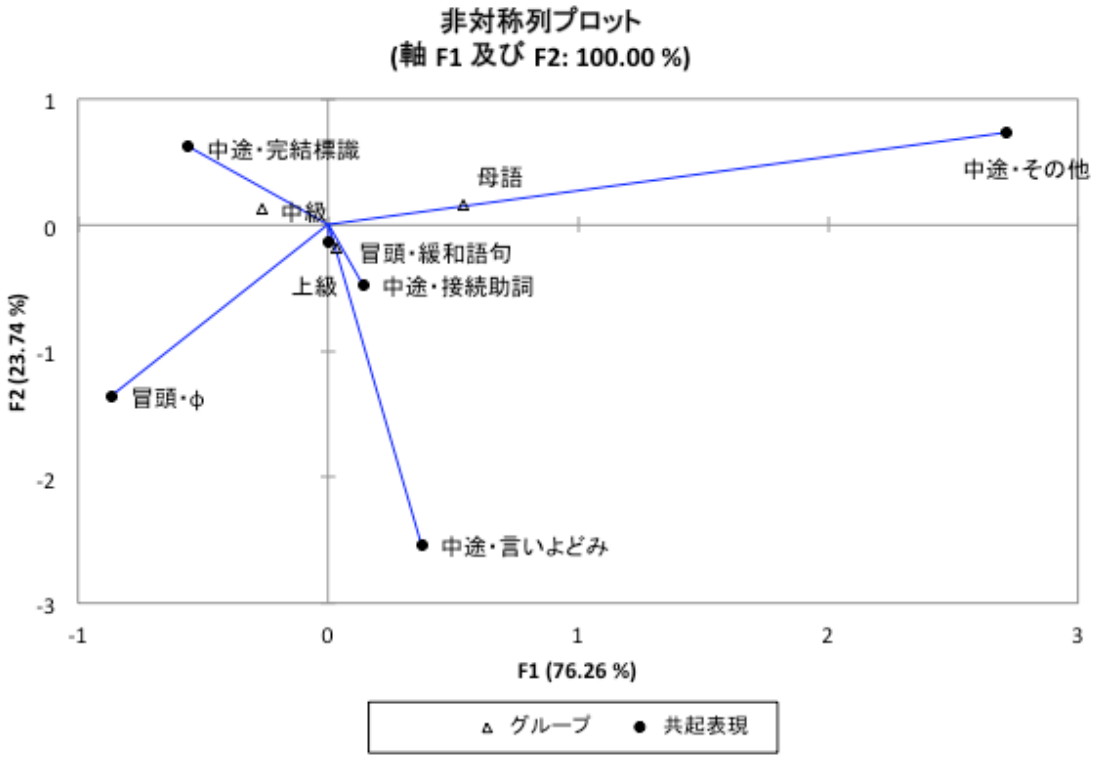

図 24　コレスポンデンス分析の結果による「だから」の散布図

図 24 は第 1 次元（76.26%）と第 2 次元（23.74%）の得点を 2 次元散布図に投影したものである。両軸の交差点は平均値を表している。図 24 の各グループの所在位置から、異なる日本語レベルの学習者の関係が観察できる。第 1 次元（76.26%）の横軸に沿って、中級学習者、上級学習者、母語話者の順番で並んでいるため、中国語母語学習者は学習が進むと母語話者に近づくと解釈される。また図 24 と下記の表 22 から窺われるように、上級学習者は、母語話者よりも中級学習者に近く位置しているため、中国語母語学習者と日本語母語話者は、異なるグループを構成していることが明らかになった。

表 22　「だから」の場合における各グループのカイ 2 乗距離

	中級	上級	母語
中級	0	0.421	0.807
上級	0.421	0	0.615
母語	0.807	0.615	0

表 23　「だから」の場合における各グループのプロファイル

	中級	上級	母語	平均
冒頭・ϕ	0.063	0.071	0.018	0.051
冒頭・緩和語句	0.055	0.057	0.055	0.055
中途・完結標識	0.641	0.457	0.418	0.505
中途・接続助詞	0.148	0.179	0.164	0.164
中途・言いよどみ	0.055	0.136	0.073	0.088
中途・その他	0.039	0.100	0.273	0.137
合計	1.000	1.000	1.000	1.000

更に、図 24 と上記の表 23 からわかるように、日本語母語話者は、中国語母語学習者と比べると、「中途・その他」を多く使用するが、「冒頭・ϕ」に関しては、中国語母語学習者が多く使用するという特徴を持っており、日本語母語話者と中国語母語学習者の両グループは、これらの特徴によって区別することができる。中級学習者と上級学習者を比較すると、中級学習者は、「中途・完結標識」を多く使用する特徴を持っているが、上級学習者は、「中途・言いよどみ」を多く使用する特徴がある。これらの両グループを区別する特徴は、両グループの「でも」の使用特徴と一致している。

5.7.3. 本節のまとめ

各グループが使用した日本語談話標識「だから」の使用位置と共起表現について分析した結果を以下で説明する。

第 1 に、中級・上級レベルの中国語母語学習者と日本語母語話者が日本語談話標識「だから」を発話冒頭部または発話中途部で使用するという使用位置の分布には差異がなく、共に発話中途部に多く使用する傾向がある。

第 2 に、日本語談話標識「だから」の共起表現については、中級学習者、上級学習者と日本語母語話者のグループ間の差違が観察された。日本語母語話者が特徴的に使用している日本語談話標識「だから」の共起表現は「中途・その他」であることから、日本語母語話者の日本語談話標識「だから」の使用は発話中途部に偏り、またその際の「だから」に前接した共起表現のバリエーションが多様化していることが明らかになった。一方、日本語母語話者に比べ、中国語母語学習者が特徴的に使用している日本語談話標識「だから」の共起表現は次のようである。中級学習者は「冒頭・φ」と「中途・完結標識」であり、上級学習者は「冒頭・φ」と「中途・言いよどみ」である。つまり、発話冒頭部では、中級学習者と上級学習者は何も加えずに日本語談話標識「だから」を用いる特徴があるが、発話中途部では、中級学習者は 1 つの文を完結してから日本語談話標識「だから」を使用し、上級学習者は言いよどみながら日本語談話標識「だから」を使用する特徴がある。また、日本語談話標識「でも」の場合と同様に、中国語母語学習者の日本語談話標識「だから」の共起表現の使用状況は中級→上級のように、目標言語の日本語母語話者の使用に近づいていくことも確認できた。

5.8. 考察

本章は主に、中級・上級レベルの中国語母語学習者が日本語談話標識「でも」「だから」を使用する際の生起位置と共起表現について、日本語母語話者の使用状況と比較しながら分析したものである。

日本語談話標識「でも」「だから」の使用位置と共起表現を考察する前に、まず、中級・上級レベルの中国語母語学習者の日本語談話標識「でも」「だから」の使用割合について検討する。全体的にいえば、中級・上級レベルの中国語母語学習者の日本語談話標識「でも」「だから」の使用割合は日本語母語話者の使用割合を遥かに超えていることがわかった。日本語学習者が日本語母語話者より口頭で接続詞を多用する現象について、加藤（1984）と新村（1996）では日本語学習者に丁寧度レベルによって発話スタイルを変化させる能力が不十分なためであると解釈している。本章で扱っている中国語母語学習者の日本語談話標識「でも」「だから」の使用についても同様なことがいえると思われる。例えば、日本語母語話者はフォーマルなスタイルであるインタビューで、例 56 のように、目上の人に対して日本語談話標識「でも」に替わって「ただ」のようなほかの表現[33]をよく使用している。

例 56　［上村コーパス、T.O.（M）］

T：　うん。法律的にはね、ほんとは飲んでもいけないし、煙草もいけない、ですよね。

S：　ただ、うん、煙草とか、は別にいいんですけれど、一気とか人に飲ませるっていうのは、それは法律以外の部分で、人として僕は、自分が飲まされ

[33] 陳（2008）は、論文指導の場面では、教師に対して日本人学生は「でも」「だけど」「しかし」などの談話標識より、「ただ」を使用する頻度が高いと指摘している。

んのやだから、人にも飲ませないんですけどね。

しかし、中国語母語学習者は改まりの度合いが異なる場面での切り替えがうまくできず、発話の論理性を表すために初級段階で既に習った「でも」を頻繁に使用している。つまり、中級・上級レベルの中国語母語学習者には、場面に応じて言語形式を切り替えることができないという社会言語能力の問題が残っていると思われる。

日本語学習者が使用する日本語は流暢であるにもかかわらず、表現が不適切であったり、場合によっては不快な感じを与えたりすることがある。その原因のひとつに社会言語能力があると考えられる。特に、日本語学習者の語彙能力と文法能力が高くなるほど、社会言語的な適切さへの期待も高まるはずである。このことから日本語の社会言語能力を身につけることが日本語学習者にとって極めて重要であると考えられる。

また、上記の分析結果からわかるように、発話冒頭部より発話中途部で日本語談話標識「でも」「だから」を使用することが多いのは日本語母語話者と中級・上級レベルの中国語母語学習者の共通する点である。しかしながら、日本語母語話者と中級・上級レベルの中国語母語学習者の間には以下のような相違点もある。

日本語母語話者の場合では、日本語談話標識「でも」を、発話冒頭部で言いよどみや応答詞などの緩和語句の後ろに付加し、発話中途部で接続助詞及びその他の表現と共起させる比率が高い。日本語談話標識「だから」の使用については、発話中途部に偏って共起表現のバリエーションが豊富である。

一方、中級学習者は発話冒頭部で何も加えずに日本語談話標識「でも」「だから」を使用し、発話中途部で 1 つの文を完結してから日本語談話標識「でも」「だ

から」を使用する特徴がある。上級学習者は発話冒頭部で直接に日本語談話標識「でも」「だから」を用い、発話中途部で言いよどみながら日本語談話標識「でも」「だから」を多く使用する特徴が観察された。中級・上級レベルの中国語母語学習者に見られた発話冒頭部と発話中途部の共起表現はいずれも日本語母語話者と異なる結果である。

以上からもわかるように、中級レベルの中国語母語学習者の日本語談話標識「でも」「だから」の使用については、発話中途部における完結標識との高い共起率が特徴である。つまり、中級レベルの中国語母語学習者は発話中途部で 1 つの文を完結してから日本語談話標識「でも」「だから」を使用する傾向がある。渡邊（1996）によれば、中国語話者の日本語話しことばでの談話展開のスタイルは順接でも逆接でも完結文の連結で構成していく傾向が強い。中級レベルの中国語母語学習者のこのような使用傾向は渡邊（1996）の指摘を検証するものといえよう。

また、中級・上級レベルの中国語母語学習者の発話冒頭部における使用では ϕ との高い共起率が目を引くところである。つまり、フォーマルな場面で目上の人に対し、日本語母語話者は自分の口調と意見表明を柔らかく聞こえるように緩和語句と一緒に用いて相手の発話を受ける傾向がある一方、中級・上級レベルの中国語母語学習者は直接に日本語談話標識「でも」「だから」を使って相手の発話を受ける傾向があった。その中で、中級学習者と上級学習者が発話冒頭部で直接に日本語談話標識「だから」を使用してターンを取得する特徴があることは興味深い。例 57 は上級学習者 01 が使用した日本語談話標識「だから」の 1 例である。

例 57　［KY コーパス、CA01[34]］

S：　ええっと、そうですねえ、あのう、西洋人は、あのう、罪とか、そういう、あの悪とかは西洋人の考えかた、あの国民性、ひと、人間ついての考えかたですけど、日本人、その中にあんまり私、賛成ではないんですけど、あの何か、恥の文化とか、書かれました。

T：　うん、あ、どうしてそのＳさんは、その、それは反対なんですか？

S：　だから、あの、日本に実際に日本に来て、そういう、ことあまり感じてなかったから。

T：　ああ、じゃ、Ｓさんは日本は何の文化だと思いますか？

S：　やはり日本は、あの何て、大和民族ひとつの民族、けっこうあのう集団、的なことが、あの、何と言いますか、集団的な文化といえないですけど。

T：　うーん、集団文化ねえ、はー、何かみんなで一緒に何かするとゆうような、ねえ、〈そうですねえ〉ううん、そういう文化だって〈うん、うん〉思いますか？

S：　だから、だから日本人あんまり個性がある人が、そういう人が、あまりいないと思いますけど、(後略)

例 57 では、上級学習者 01 はテスターの質問に対し、日本語談話標識「だから」を答えの冒頭に置いている。メイナード（2005）は、「だから」になんらかの押しの強さを感じさせるものがあるため、「だから」の使用には相手が目上の人の場合制限があると指摘している。また、WH 疑問文や YES-NO 疑問文の場

[34] 表記仕方の再掲である。CA01 のような「2 つのローマ字＋2 桁の数字」という番号を通し、被験者の母語と OPI における言語能力の判定結果がわかる。1 つ目のローマ字は被験者の母語を表し、英語（E）、中国語（C）、韓国語（K）である。2 つ目のローマ字は OPI の判定結果で、初級（N）、中級（I）、上級（A）、超級（S）である。最後の 2 桁の数字は同じ母語で同じレベルの被験者内での通し番号である。

合に日本語談話標識「だから」を返答の冒頭に用いることについて、その危険性を述べた研究は蓮沼（1991）や谷崎（1994）などがある。蓮沼（1991）は次のように説明している。

> ここで「だから」を使う話し手の態度には、特別な含みが感じられる。すなわち、当然分かっているはずのことを聞き手が聞いているというふうに捉え、聞き手の質問をまともな質問として扱っていないという態度が感じられるのである。
>
> （蓮沼，1991：146）

例 57 では、テスターが質問するというのは、上級学習者 01 の反対理由を知らないからだと見るのが普通である。それ故、上級学習者 01 の発話冒頭における日本語談話標識「だから」の使用は、事態を十分に認識していないテスターには失礼になる恐れがあると考えられる。

事実上、ACTFL の基準によると、中級レベルと上級レベルの学習者が使用するテクストの型はそれぞれ、「不連続な文」と「段落」である。渡邊（1996）では、学習者が談話レベルのひとまとまりの発話を試みる段になると、学習者の日本語の展開スタイルは母語の展開スタイルに似てくると述べている。例 57 はまさに上級学習者 01 が中国語の母語干渉による負の転移の影響を受けて発話したものであると考えられる。中国語の場合には、WH 疑問文に対して「因為～」という接続詞を使って理由を説明する習慣がある。したがって、上級学習者 01 は日本語の場合でも慣習的に「因為～」と似たような日本語の接続詞「だから」を使用してしまう可能性があると考えられる。

学習者は中級以上の日本語レベルになると、ようやく自分の意思で意見を述

べることができるようになったが、その一方で、日本語の展開スタイルが母語の影響を強く受けていると思われる。中級学習者と上級学習者が発話冒頭部で緩和語句を使わずに直接に日本語談話標識「だから」を使用することはこの母語の影響が 1 つの原因だと考えられよう。

5.9. 本章のまとめ

本章では、まず、本章の分析資料、調査対象者と分析方法を示した。次いで、使用位置と共起表現の種類について説明した。最後に、コレスポンデンス分析の手法を用い、中級・上級レベルの中国語母語学習者が使用した日本語談話標識「でも」「だから」の使用位置と共起表現の特徴を分析して考察した。

本章の調査を通して明らかになったことは次のようである。全体的にいえば、日本語談話標識「でも」「だから」の使用位置については、中級・上級レベルの中国語母語学習者には日本語母語話者のように、発話中途部の使用が多く観察された。一方、日本語談話標識「でも」「だから」の共起表現については、中国語母語学習者の日本語能力が上達するにつれ、徐々に日本語母語話者に近づいていくことが明らかになった。以下の表 24 は本章の考察結果のまとめである。

表 24　各グループの「でも」「だから」の使用位置と共起表現の使用特徴

グループ	でも		だから	
	使用位置	共起表現	使用位置	共起表現
中級学習者	発話中途部	発話冒頭部 φ 発話中途部 完結標識	発話中途部	発話冒頭部 φ 発話中途部 完結標識
上級学習者	発話中途部	発話冒頭部 φ 発話中途部 言いよどみ	発話中途部	発話冒頭部 φ 発話中途部 言いよどみ
母語話者	発話中途部	発話冒頭部 緩和語句 発話中途部 接続助詞、その他	発話中途部	発話中途部 その他

第 6 章　中国語母語学習者の会話における「でも」「だから」の音声的実現に関する考察

6.0. はじめに

日本語学習者の発話に語彙や文法の誤りがないにもかかわらず、日本語母語話者である聞き手には不快に感じる場合がある。日本語学習者に相手を不快にさせようとする意図はないが、このような摩擦が生じてしまうのである。その原因の一つとして、音声の韻律的特徴が要因であることが挙げられる。

日本語母語話者が日本語談話標識「でも」「だから」を使用する際の音声的実現については、第 3 章と第 4 章で考察を行った。その考察結果からわかるように、日本語母語話者は同じ日本語談話標識「でも」「だから」であっても機能や用法の違いによって韻律を使い分けることがある。しかし、日本語学習者にはこの種の使い分けが難しい可能性があるが、実態はよくわかっていない。そこで、本章では各日本語レベルの中国語母語学習者が実会話で日本語談話標識「でも」「だから」を使用する際の音声的実現に焦点を当て、日本語母語話者との相違を明らかにする。

本章では、まず、本章の分析資料、分類と音響分析の仕方を説明する。それから、中国語母語学習者が使用する日本語談話標識「でも」「だから」の音声的特徴を考察してまとめる。

6.1. 分析資料

前章では日本語母語話者のデータは上村コーパスを用い、中国語母語学習者

のデータは KY コーパスと日本語学習者会話データベースを使用した。しかし事実上、上村コーパスの音声資料を転用することができず、KY コーパスには音声資料が含まれていないため、上村コーパスと KY コーパスにある日本語母語話者と中国語母語学習者の音声的実現に対して更なる分析を行うことができない。したがって、本章では中国語母語学習者の音声的実現に対する分析は音声資料が公開された日本語学習者会話データベースに収録されている中級レベルと上級レベルの中国語母語学習者に対して行う。また、その対照資料として使用した日本語母語話者のデータは第 3 章と第 4 章の考察でも使った『日本語話し言葉コーパス』である。

6.2. 分類

第 3 章と第 4 章の結果からわかるように、日本語母語話者は日本語談話標識「でも」「だから」を発音する際の韻律によって、発話の意図を区別している。換言すれば、日本語母語話者が【A と否 A の関係あり】の場合／【A と否 A の関係なし】の場合に発音する日本語談話標識「でも」の用法と、【聞き手認識十分】の場合／【聞き手認識不十分】の場合に発音する日本語談話標識「だから」の用法の韻律的特徴は異なっている。したがって、分析に入る前に、中級学習者と上級学習者が使用した日本語談話標識「でも」の用例（中級学習者：158 例、上級学習者：44 例）を【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に分類し、日本語談話標識「だから」の用例（中級学習者：43 例、上級学習者：38 例）を【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合に分類した。

日本語談話標識「でも」と「だから」の分類[35]をするにあたって、セカンドコーダーを立て、筆者との一致率を Cohen's Kappa（Bakeman & Gottman, 1986）で測定した。その結果、日本語談話標識「でも」の場合は k=.732、日本語談話標識「だから」の場合は k=.860 という数値が得られ、信頼性を保っていることがわかった。また、一致しない部分についてはセカンドコーダーと話し合い、母語話者の意見を尊重して分類を決定した。文字資料による分類の結果が決定されてはじめて音響分析の段階に入ることにした。

6.3. 音響分析

本章では、第 3 章と第 4 章の日本語母語話者の場合と同じように、音声分析ソフトウェア Praat を使用し、中級・上級レベルの中国語母語学習者が発話した日本語談話標識「でも」「だから」の持続時間長、ピッチ変動という 2 つの韻律的要素を考察した。持続時間長の測定は音声波形とスペクトログラムを判断基準とし、振動が開始するところ（[d]の破裂の瞬間）から、振動が収束するところまでの時間を測定したが、後続発話との間に無音区間がない場合、後続発話の始まりの単音までの区間を計測した。また、日本語の「でも」「だから」はいずれも頭高型アクセントをもつ語であるため、ピッチの変動は 1 拍目の最高値と 2 拍目の最低値を測定した。なお、発話者が発する日本語談話標識「でも」「だから」のピッチの下降幅を比較するために、ピッチの値（Hz）をセミトーン値（st）に換算した。

第 3 章と第 4 章の日本語母語話者に対して行った音響分析の材料である CSJ

[35] 「でも」「だから」の音声は分類の判断を左右する可能性があるため、音声を聞かずに文字資料のみで分類を行った。

は、各話者の音声資料が個別に収録されているため、日本語母語話者の使用した日本語談話標識「でも」「だから」のすべてが音響分析に使用可能である。それに対し、本章の分析資料として使用した日本語学習者会話データベースは、各話者の音声資料が個別に収録されていないため、両話者の声の重なりなどの原因で音響分析に使用できないデータもある。以下の分析ではこのような音響分析に使用できないデータを排除した。

6.4. 日本語談話標識「でも」の音声的特徴

本節の具体的な考察手順は以下の通りである。まず、日本語学習者会話データベースから、「でも」を【A と否 A の関係あり】と【A と否 A の関係なし】の両方の場合で使用している中級学習者 13 名（男性 3 名、女性 10 名）と上級学習者 5 名（女性 5 名）の用例を取り出した。それから、個人毎に【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合で使用した「でも」の持続時間長とピッチ変動の平均値を出してそれを代表値とした上で検定を行った。なお、本節の対照資料として用いたのは第 3 章で使用した CSJ の日本語母語話者 11 名のデータである。

以下では、中級学習者と上級学習者が使用した日本語談話標識「でも」の持続時間長とピッチ変動の観点から音声的実現を分析する。

6.4.1. 持続時間長

第3章の考察結果からわかるように、日本語母語話者は【Aと否Aの関係あり】の場合の2拍目の持続時間を【Aと否Aの関係なし】の場合より長くすることにより、両者を区別して使用している。

学習者が【Aと否Aの関係あり】の場合と【Aと否Aの関係なし】の場合の区別を、【Aと否Aの関係あり】の場合に2拍目の持続時間をより長くすることによって行っていることを学習することは、容易ではないと考えられる。以下では、中級学習者と上級学習者の使用状況を順次見ていく。

1）　中級学習者の場合

中級学習者が各場合に使用した日本語談話標識「でも」の各拍の持続時間長の変化を図 25 で示す。棒グラフの上部に示したのは、標準誤差である。

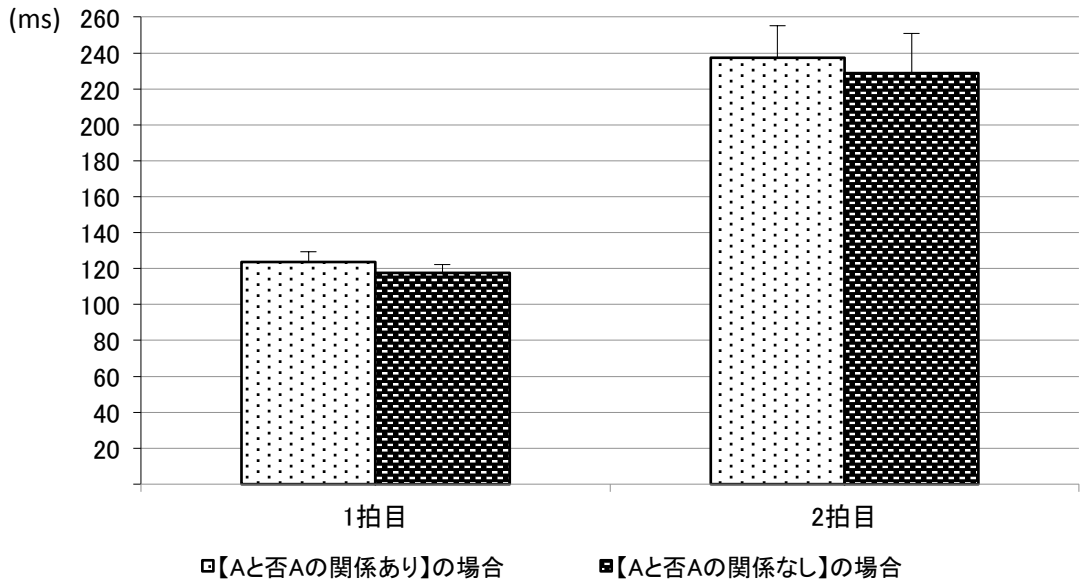

図 25　中級学習者が各場合に使用した「でも」の長さの変動（n=13）

中級学習者の各場合の日本語談話標識「でも」の持続時間長の使用状況を明らかにするために、2（1 拍目・2 拍目）×2（【A と否 A の関係あり】の場合・【A と否 A の関係なし】の場合）の繰り返し要因のある分散分析により検討した。その結果は以下のとおりである。

表 25　「でも」の各拍の持続時間長（ms）に関する場合の比較（中級 n=13）

場合	「でも」の持続時間長（ms）			
	1 拍目		2 拍目	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【A と否 A の関係あり】の場合	124	20	237	64
【A と否 A の関係なし】の場合	118	16	229	80
両場合の差	6		8	
2×2 の分散分析の主効果と交互作用	拍	$F(1,12)=45.581$, $p<.001$		
	場合	$F(1,12)=0.399$, $p=.539$, *n.s.*		
	交互作用	$F(1,12)=0.018$, $p=.895$, *n.s.*		

表 25 に示したように、拍と場合との交互作用は、$F(1,12)=0.018$, $p=.895$, *n.s.* で存在していない。また、以下の表 26 の結果からわかるように、中級学習者の場合では、「でも」の 1 拍目と 2 拍目における【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合の持続時間長に有意な差がなかった。更に、表 25 の結果からもわかるように、【A と否 A の関係あり】と【A と否 A の関係なし】の場合の主効果は有意でなかったため[$F(1,12)=0.399$, $p=.539$, *n.s.*]、中級学習者が【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に使用した「でも」の全体の長さには相違が見られるとは言えない。

つまり、中級学習者は日本語母語話者のように「でも」の長さを調整して【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合を区別することができないといえよう。

表 26　中級学習者が使用した「でも」の各拍の場合の長さの比較

位置	(I)　場合	(J)　場合	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
1 拍目	【A と否 A の関係あり】	【A と否 A の関係なし】	5.951	5.939	.336	-6.989	18.891
2 拍目	【A と否 A の関係あり】	【A と否 A の関係なし】	8.582	20.530	.683	-36.149	53.313

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

2）　上級学習者の場合

上級学習者が各場合に使用した日本語談話標識「でも」の持続時間長の変動を図 26 で示す。棒グラフの上部に示したのは、標準誤差である。

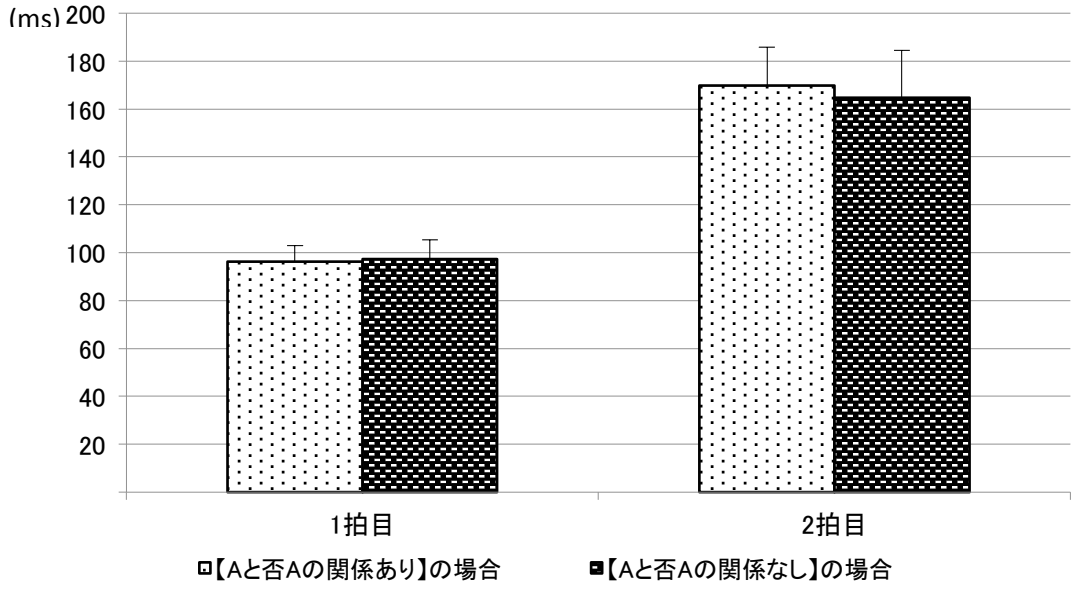

図 26　上級学習者が各場合に使用した「でも」の長さの変動（n=5）

2（1 拍目・2 拍目）×2（【A と否 A の関係あり】の場合・【A と否 A の関係なし】の場合）の繰り返し要因のある分散分析を行った結果、以下のような結果

が得られた。

表 27　「でも」の各拍の持続時間長（ms）に関する場合の比較（上級 n=5）

場合	「でも」の持続時間長（ms）			
	1 拍目		2 拍目	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【A と否 A の関係あり】の場合	96	15	170	36
【A と否 A の関係なし】の場合	97	17	165	44
両場合の差	-1		5	
2×2 の分散分析の主効果と交互作用	拍	$F(1,4)=17.151$, $p<.05$		
	場合	$F(1,4)=0.041$, $p=.849$, *n.s.*		
	交互作用	$F(1,4)=0.076$, $p=.797$, *n.s.*		

表 27 に示したように、拍と場合との交互作用は、$F(1,4)=0.076$, $p=.797$, *n.s.* で存在していない。また、次の表 28 に見られるように、上級学習者が使用した「でも」の各拍の持続時間には、【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合による有意な差異が見いだせなかった。更に、表 27 の結果からもわかるように、【A と否 A の関係あり】と【A と否 A の関係なし】の場合の主効果は有意でなかったため[$F(1,4)=0.041$, $p=.849$, *n.s.*]、上級学習者が【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に使用した「でも」の全体の長さには違いがあるとは言えない。

すなわち、上級学習者は、中級学習者と同様に「でも」の持続時間を調整して【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合を区別することを学習できていない。

表 28　上級学習者が使用した「でも」の各拍の場合の長さの比較

位置	(I)　場合	(J)　場合	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率[a]	95% 平均差信頼区間[a]	
						下限	上限
1 拍目	【A と否 A の関係あり】	【A と否 A の関係なし】	-1.056	8.502	.907	-24.661	22.549
2 拍目	【A と否 A の関係あり】	【A と否 A の関係なし】	5.106	19.404	.805	-48.768	58.981

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

6.4.2. ピッチ変動

今度は、中級学習者と上級学習者が【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に使用した日本語談話標識「でも」のピッチ変動を考察する。

日本語母語話者は、「でも」を使用する場合、1拍目「で」は常に2拍目「も」よりも高いピッチで発音しているが、第3章の考察結果からわかるように、日本語母語話者は【Aと否Aの関係あり】の場合と【Aと否Aの関係なし】の場合の区別を【Aと否Aの関係あり】の場合の2拍目の最低値を【Aと否Aの関係なし】の場合よりも低くすることによって行っている。

1拍目「で」は常に2拍目「も」よりも高いピッチで発音されているので、学習者がこの「高－低」パターンを習得することは、それほど困難ではないと考えられるが、【Aと否Aの関係あり】の場合と【Aと否Aの関係なし】の場合の区別を【Aと否Aの関係あり】の場合の2拍目の最低値を【Aと否Aの関係なし】の場合よりも低くすることによって行っていることを学習することは、容易ではないと考えられる。

1）　中級学習者の場合

図 27 で示したのは中級学習者が各場合に使用した「でも」のピッチ変動幅である。実線を引いたのは【A と否 A の関係あり】の場合に相当するものであり、点線を引いたのは【A と否 A の関係なし】の場合に相当するものである。折れ線グラフの上部に示したのは、標準誤差である。

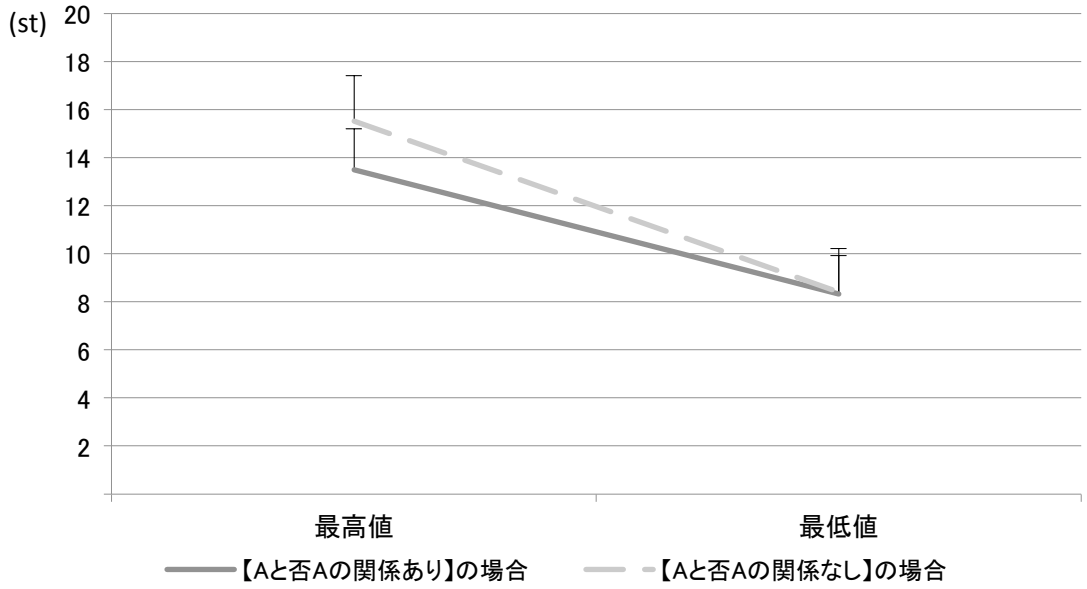

図 27　中級学習者が各場合に使用した「でも」のピッチ変動幅（n=13）

【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合において、中級学習者がどのように「でも」のピッチを操作するのかを明らかにするために、2（最高値・最低値）×2（【A と否 A の関係あり】の場合・【A と否 A の関係なし】の場合）の繰り返し要因のある分散分析を行った。その結果は以下の表 29 のとおりである。

表 29　「でも」の最高値と最低値（st）に関する場合の比較（中級 n=13）

場合	「でも」のピッチ変動（st）			
	最高値		最低値	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【A と否 A の関係あり】の場合	13.50	6.14	8.32	5.73
【A と否 A の関係なし】の場合	15.51	6.79	8.40	6.52
両場合の差	-2.01		-0.08	
2×2 の分散分析の主効果と交互作用	ピッチ	$F(1,12)=43.444$, $p<.001$		
	場合	$F(1,12)=2.432$, $p=.145$, *n.s.*		
	交互作用	$F(1,12)=15.564$, $p<.05$		

表 29 に明示されているように、ピッチと場合との交互作用は、$F(1,12)=15.564$, $p<.05$*で存在していると考えられる。交互作用が存在するので、単純主効果の分析を行った。その結果を以下の表 30 と表 31 で示す。

表 30　中級学習者が各場合に使用した「でも」のピッチ変動の比較

場合	(I)　ピッチ	(J)　ピッチ	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
【A と否 A の関係あり】	最高値	最低値	5. 172*	. 778	. 000	3. 478	6. 866
【A と否 A の関係なし】	最高値	最低値	7. 117*	1. 120	. 000	4. 676	9. 558

*. 平均の差は .05 水準で有意である。

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

表 31　中級学習者が各場合に使用した「でも」の最高値と最低値の比較

ピッチ	(I)　場合	(J)　場合	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
最高値	【A と否 A の関係あり】	【A と否 A の関係なし】	−2. 018*	. 621	. 007	−3. 372	−. 664
最低値	【A と否 A の関係あり】	【A と否 A の関係なし】	−. 073	. 797	. 928	−1. 809	1. 663

*. 平均の差は .05 水準で有意である。

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

表 30 で明らかように、各場合の 1 拍目の最高値は共に 2 拍目の最低値より有意に高い結果が得られたため、1 拍目「で」を常に 2 拍目「も」よりも高いピッチで発音することは学習されている。しかし、表 31 に示すように、【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合の最低値に有意差がなかったため、【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合の区別を【A と否 A の関係あり】の場合の 2 拍目のピッチを【A と否 A の関係なし】の場合よりも低くすることによって行っていることは学習されていない。

また、表 31 に見られるように、【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合の最高値に有意な結果が得られたため、中級学習者は、日本語母語話者とは逆に、両者の区別を【A と否 A の関係なし】の場合の「でも」の 1 拍目のピッチを【A と否 A の関係あり】の場合より高く発音する事によって行っていることが明らかになった。

2)　上級学習者の場合

上級学習者が各場合に使用した「でも」のピッチ変動幅を図 28 で示す。実線を引いたのは【A と否 A の関係あり】の場合に相当するものであり、点線を引

いたのは【A と否 A の関係なし】の場合に相当するものである。折れ線グラフの上部に示したのは、標準誤差である。

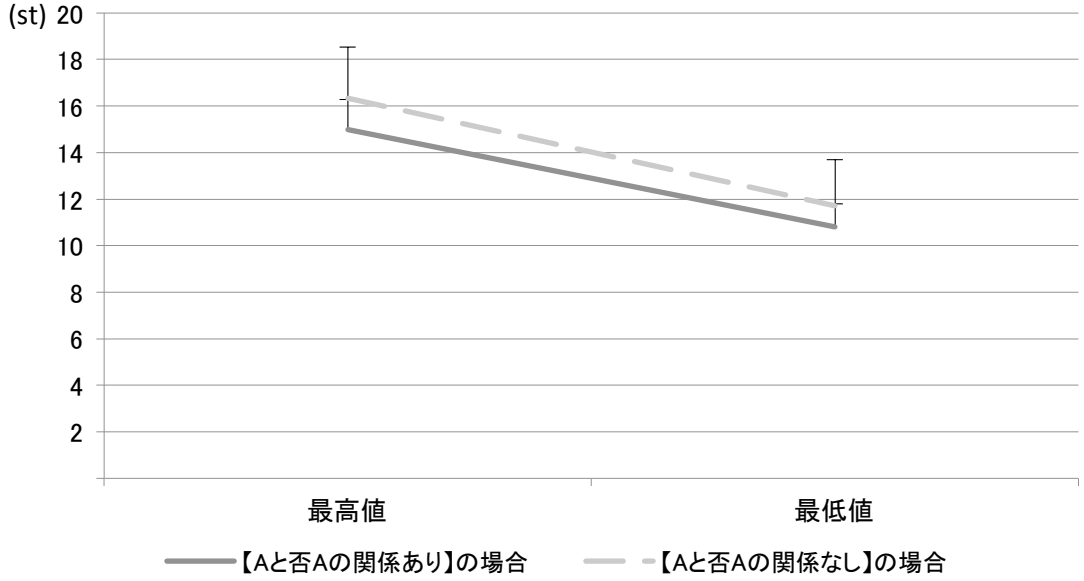

図 28　上級学習者が各場合に使用した「でも」のピッチ変動幅（n=5）

中級学習者と同様に、2（最高値・最低値）×2（【A と否 A の関係あり】の場合・【A と否 A の関係なし】の場合）の繰り返し要因のある分散分析により検討した。その結果は以下のとおりである。

表 32　「でも」の最高値と最低値（st）に関する場合の比較（上級 n=5）

場合	「でも」のピッチ変動（st）			
	最高値		最低値	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【A と否 A の関係あり】の場合	14.97	2.95	10.81	2.22
【A と否 A の関係なし】の場合	16.33	4.93	11.70	4.47
両場合の差	-1.36		-0.89	
2×2 の分散分析の主効果と交互作用	ピッチ	$F(1,4)=45.803$, $p<.01$		
	場合	$F(1,4)=0.897$, $p=.397$, *n.s.*		
	交互作用	$F(1,4)=0.508$, $p=.515$, *n.s.*		

表 32 に示したように、ピッチと場合との交互作用は、$F(1,4)=0.508$, $p=.515$, *n.s.* で存在しないと考えられる。また、下記の表 33 の結果からわかるように、上級学習者も、中級学習者と同様に、各場合の 1 拍目の最高値が共に 2 拍目の最低値より有意に高い結果が得られたため、1 拍目「で」を常に 2 拍目「も」よりも高いピッチで発音することは学習している。しかし、表 34 に示すように、【A と否 A の関係あり】と【A と否 A の関係なし】の両場合の最高値と最低値に有意な差が得られなかったため、上級学習者は、中級学習者のような最高ピッチによって【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合を区別するという誤りを犯していないが、最低ピッチによる使用場合の区別もまだ学習していないことがわかった。

表 33　上級学習者が各場合に使用した「でも」のピッチ変動の比較

場合	(I)　ピッチ	(J)　ピッチ	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
【A と否 A の関係 あり】	最高値	最低値	4.167*	.548	.002	2.644	5.690
【A と否 A の関係 なし】	最高値	最低値	4.631*	.869	.006	2.218	7.043

*. 平均の差は .05 水準で有意である。

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

表 34　上級学習者が各場合に使用した「でも」の最高値と最低値の比較

ピッチ	(I)　場合	(J)　場合	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
最高値	【A と否 A の関係 あり】	【A と否 A の関係 なし】	-1.359	1.283	.349	-4.921	2.203
最低値	【A と否 A の関係 あり】	【A と否 A の関係 なし】	-.896	1.182	.491	-4.178	2.387

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

6.4.3. 本節のまとめ

以下では、中級学習者と上級学習者が各場合に使用した日本語談話標識「でも」の持続時間長とピッチ変動といった音声的実現を日本語母語話者と比較した結果をまとめる。

本節の分析結果からわかるように、中級学習者と上級学習者は 1 拍目「で」を常に 2 拍目「も」よりも高いピッチで発音することは学習している。しかし、日本語母語話者のように「でも」の各拍の持続時間長とピッチ変動によって使用場合を区分することは学習していない。すなわち、「でも」の各拍の持続時間

長とピッチ変動を用い、【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合を正しく区別することができない。また、日本語学習者の使い方の中で、中級学習者の最高ピッチによる日本語母語話者と異なった区分の仕方が興味深い。

6.5. 日本語談話標識「だから」の音声的特徴

中級学習者と上級学習者が日本語談話標識「でも」を使用する際の持続時間長とピッチ変動を前節で考察した。本節では、中級学習者と上級学習者が使用する日本語談話標識「だから」の音声的実現を分析する。また、分析に入る前に、まず、日本語学習者会話データベースから、「だから」を【聞き手認識十分】と【聞き手認識不十分】の両方の場合で使用している中級学習者 6 名（男性 1 名、女性 5 名）と上級学習者 4 名（女性 4 名）の用例を取り出した。それから、個人毎に【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合で使用した「だから」の持続時間長とピッチ変動の平均値を出してそれを代表値とした上で検定を行った。なお、本節の対照資料として用いたのは第 4 章で使用した CSJ の日本語母語話者 11 名のデータである。

6.5.1. 持続時間長

第 4 章の考察結果から、日本語母語話者が【聞き手認識不十分】の場合に使用した日本語談話標識「だから」は【聞き手認識十分】の場合より 3 拍目「ら」が長いということがわかった。このような「だから」の使用場合の区別は、日本語学習者にとって困難であることが予測される。

1）　中級学習者の場合

図 29 に示されたのは、中級学習者が各場合に使用した日本語談話標識「だから」の各拍の持続時間長の変化である。棒グラフの上部に示したのは、標準誤差である。

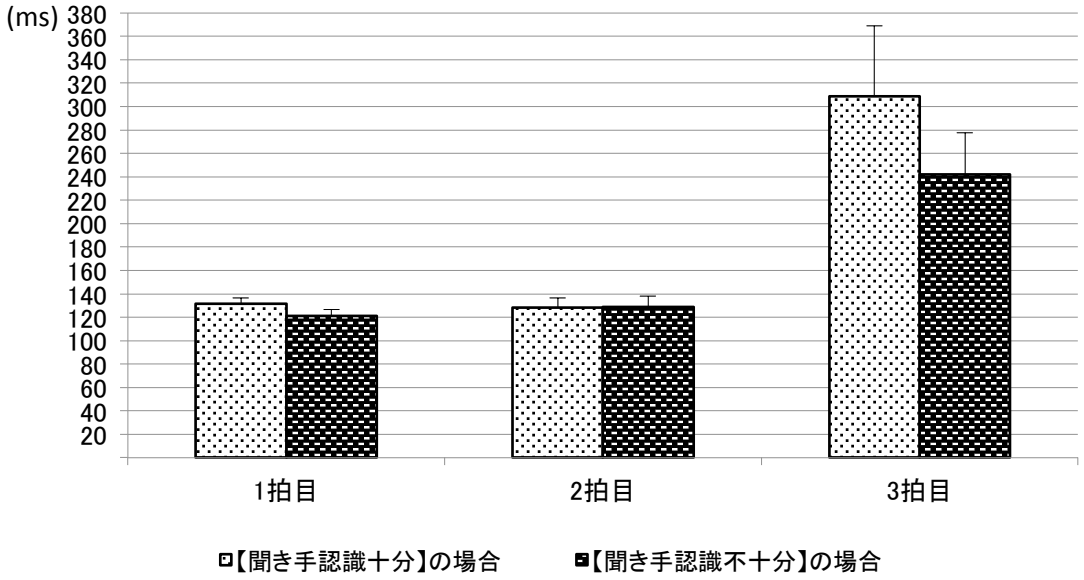

図 29　中級学習者が各場合に使用した「だから」の長さの変動（n=6）

中級学習者が【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合に使用した日本語談話標識「だから」の持続時間長の状況を明らかにするために、3（1 拍目・2 拍目・3 拍目）×2（【聞き手認識十分】の場合・【聞き手認識不十分】の場合）の繰り返し要因のある分散分析により検討した。その結果は以下のとおりである。

表 35　「だから」の各拍の持続時間長（ms）に関する場合の比較（中級 n=6）

場合	「だから」の持続時間長（ms）					
	1 拍目		2 拍目		3 拍目	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【聞き手認識十分】の場合	132	12	128	21	309	147
【聞き手認識不十分】の場合	121	13	129	24	242	86
両場合の差	11		-1		67	
3×2 の分散分析の主効果と交互作用	拍		$F(2,10)=18.465$, $p<.001$			
	場合		$F(1,5)=1.162$, $p=.330$, *n.s.*			
	交互作用		$F(2,10)=0.953$, $p=.418$, *n.s.*			

表 35 に示したように、拍と場合との交互作用は、$F(2,10)=0.953$, $p=.418$, *n.s.* で存在していない。また、以下の表 36 に示したように、「だから」の 1 拍目・2 拍目・3 拍目における【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合の持続時間長に有意な差がなかったため、中級学習者が用いた「だから」の 3 拍のそれぞれの持続時間長はいずれも差異のないパターンであり、差を付ける必要性すら認識していないことがわかった。更に、表 35 の結果からもわかるように、【聞き手認識十分】と【聞き手認識不十分】の場合の主効果は有意でなかったため[$F(1,5)=1.162$, $p=.330$, *n.s.*]、中級学習者が【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合に使用した「だから」の全体の長さには相違が見られるとは言えない。

表 36　中級学習者が各場合に使用した「だから」の持続時間長の比較

位置	(I)　場合	(J)　場合	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
1 拍目	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	10.391	4.377	.064	-.860	21.641
2 拍目	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	-.510	4.453	.913	-11.956	10.936
3 拍目	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	66.692	66.127	.359	-103.294	236.678

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

2)　上級学習者の場合

上級学習者が各場合に使用した日本語談話標識「だから」の持続時間長の変動を図 30 で示す。棒グラフの上部に示したのは、標準誤差である。

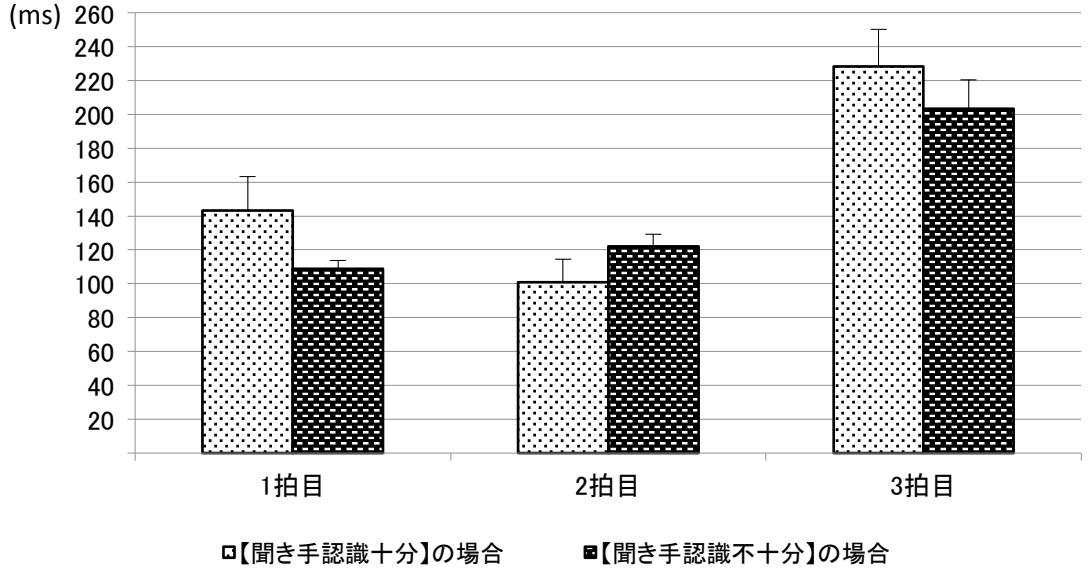

図 30　上級学習者が各場合に使用した「だから」の長さの変動（n=4）

3（1 拍目・2 拍目・3 拍目）×2（【聞き手認識十分】の場合・【聞き手認識不十分】の場合）の繰り返し要因のある分散分析を行った結果、以下のような結果が得られた。

表 37　「だから」の各拍の持続時間長（ms）に関する場合の比較（上級 n=4）

場合	「だから」の持続時間長（ms）					
	1 拍目		2 拍目		3 拍目	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【聞き手認識十分】の場合	143	40	101	28	228	44
【聞き手認識不十分】の場合	109	10	122	15	203	35
両場合の差	34		-21		25	
3×2 の分散分析の主効果と交互作用	拍		$F(2,6)=28.677$, $p<.01$			
	場合		$F(1,3)=0.460$, $p=.546$, *n.s.*			
	交互作用		$F(2,6)=5.418$, $p<.05$			

表 37 に示したように、拍と場合との交互作用は、$F(2,6)=5.418$, $p<.05^{*}$で存在している。単純主効果の分析結果を以下の表 38 で示す。

表 38 に示したように、中級学習者の結果と同様に、「だから」の 1 拍目・2 拍目・3 拍目における【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合の持続時間長に有意な差がなかった。すなわち、上級学習者は「だから」の 3 拍のそれぞれの持続時間長に対し、【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合を区別せずにいずれも差異のないパターンを使用していることが明らかになった。また、表 37 の結果からもわかるように、【聞き手認識十分】と【聞き手認識不十分】の場合の主効果は有意でなかったため[$F(1,3)=0.460$,

p=.546, *n.s.*]、上級学習者が【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合に使用した「だから」の全体の長さには違いがあるとは言えない。

表 38　上級学習者が各場合に使用した「だから」の持続時間長の比較

位置	(I)　場合	(J)　場合	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
1 拍目	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	34.363	19.258	.172	-26.925	95.651
2 拍目	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	-21.266	12.250	.181	-60.250	17.717
3 拍目	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	25.183	29.490	.456	-68.668	119.033

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

6.5.2. ピッチ変動

この節では、中級学習者と上級学習者が【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合に使用した日本語談話標識「だから」のピッチ変動を考察する。

日本語母語話者は、「だから」を使用する場合、1 拍目「だ」は常に 2 拍目「か」よりも高いピッチで発音しているが、第 4 章の考察結果からわかるように、日本語母語話者は【聞き手認識不十分】の場合の 2 拍目の最低値を【聞き手認識十分】の場合よりも低くすることによって両場合を区別している。

両場合に共通な「高－低」パターンは、学習が容易と予測されるが、「だから」のピッチ変動によって【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合を区分することは、容易ではないと予測される。

1）　中級学習者の場合

図 31 で示したのは中級学習者が各場合に使用した「だから」のピッチ変動幅である。実線を引いたのは聞き手の反応が【聞き手認識十分】の場合に相当するものであり、点線を引いたのは【聞き手認識不十分】の場合に相当するものである。折れ線グラフの上部に示したのは、標準誤差である。

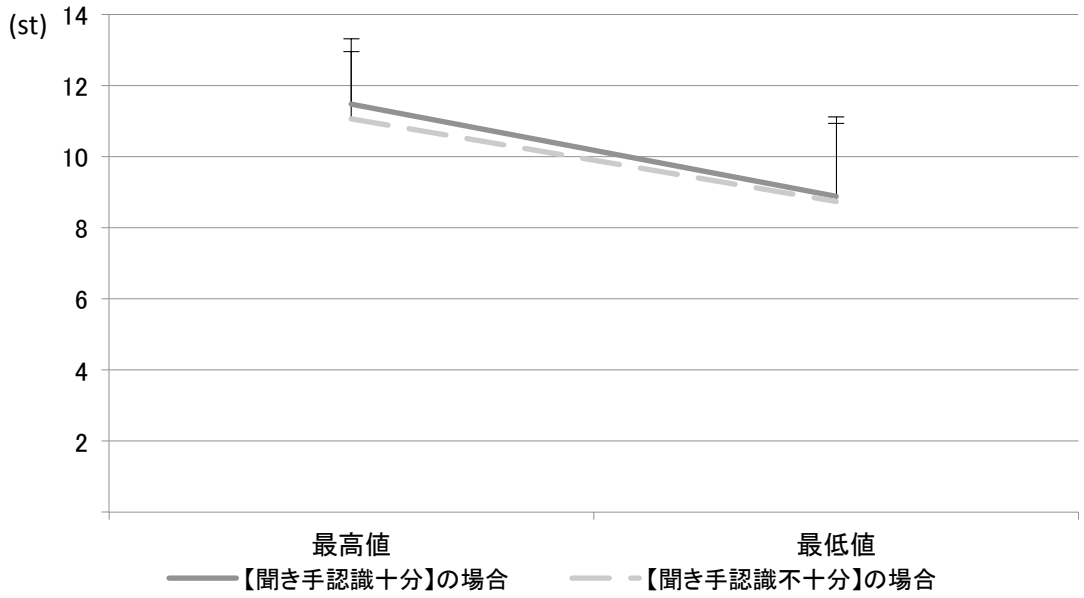

図 31　中級学習者が各場合に使用した「だから」のピッチ変動幅（n=6）

中級学習者が「だから」のピッチを操作する仕方の差異を明らかにするために、2（最高値・最低値）×2（【聞き手認識十分】の場合・【聞き手認識不十分】の場合）の繰り返し要因のある分散分析を行った。その結果は以下のとおりである。

表 39　「だから」の最高値と最低値（st）に関する場合の比較（中級 n=6）

場合	「だから」のピッチ変動（st）			
	最高値		最低値	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【聞き手認識十分】の場合	11.48	4.51	8.88	5.45
【聞き手認識不十分】の場合	11.05	4.63	8.74	5.37
両場合の差	0.43		0.14	
2×2 の分散分析の主効果と交互作用	ピッチ	$F(1,5)=35.804$, $p<.01$		
	場合	$F(1,5)=0.149$, $p=.715$, *n.s.*		
	交互作用	$F(1,5)=0.406$, $p=.552$, *n.s.*		

表 39 に示したように、ピッチと場合との交互作用は、$F(1,5)=0.406$, $p=.552$, *n.s.* で存在していない。また、下記の表 40 の分析結果からわかるように、各場合の 1 拍目の最高値は共に 2 拍目の最低値より有意に高い結果が得られたため、中級学習者は予測通りに、「だから」に共通の「高－低」パターンを学習している。しかし、表 41 の分析結果からわかるように、【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合の最低値に有意な差異が見いだせなかったため、中級学習者は日本語母語話者のように最低ピッチによる【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合の区別を学習していない。つまり、中級学習者は日本語母語話者のように、【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合を区別するために、「だから」のピッチを調整することができないといえる。

表 40　中級学習者が各場合に使用した「だから」のピッチ変動の比較

場合	(I)　ピッチ	(J)　ピッチ	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
【聞き手認識十分】	最高値	最低値	2.594*	.551	.005	1.178	4.011
【聞き手認識不十分】	最高値	最低値	2.317*	.357	.001	1.399	3.236

*. 平均の差は .05 水準で有意である。

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

表 41　中級学習者が各場合に使用した「だから」の最高値と最低値の比較

ピッチ	(I)　場合	(J)　場合	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
最高値	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	.422	.891	.656	-1.869	2.713
最低値	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	.145	.616	.823	-1.438	1.728

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

2)　上級学習者の場合

上級学習者が各場合に使用した「だから」のピッチ変動幅を図 32 で示す。実線を引いたのは聞き手の反応が【聞き手認識十分】の場合に相当するものであり、点線を引いたのは【聞き手認識不十分】の場合に相当するものである。折れ線グラフの上部に示したのは、標準誤差である。

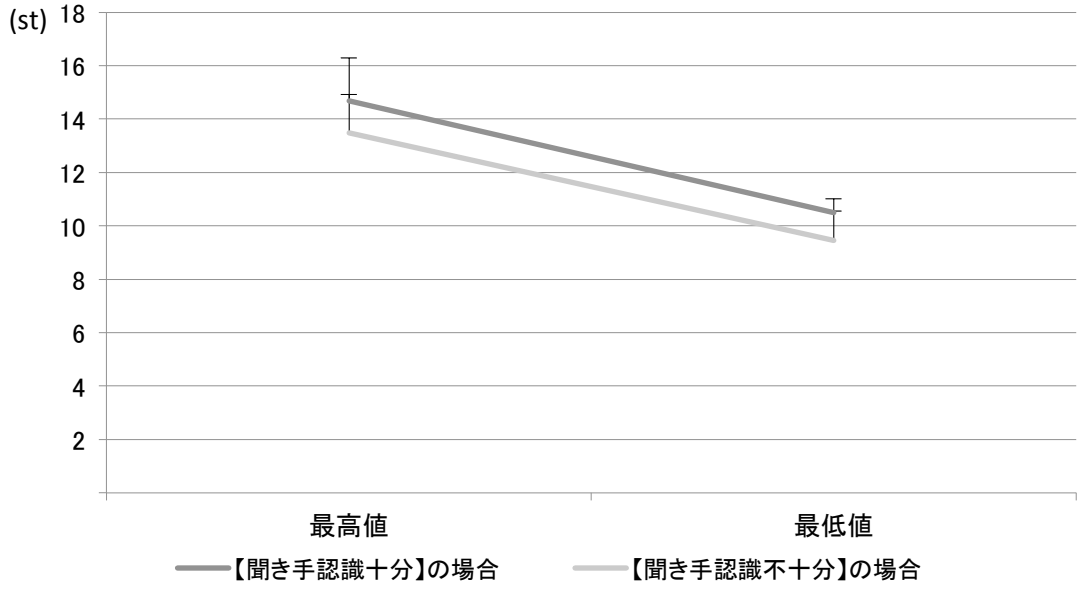

図 32　上級学習者が各場合に使用した「だから」のピッチ変動幅（n=4）

中級学習者と同様に、2（最高値・最低値）×2（【聞き手認識十分】の場合・【聞き手認識不十分】の場合）の繰り返し要因のある分散分析により検討した。その結果は以下のとおりである。

表 42　「だから」の最高値と最低値（st）に関する場合の比較（上級 n=4）

場合	「だから」のピッチ変動（st）			
	最高値		最低値	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
【聞き手認識十分】の場合	14.69	3.21	10.50	1.05
【聞き手認識不十分】の場合	13.48	2.87	9.45	2.23
両場合の差	1.21		1.05	
2×2 の分散分析の主効果と交互作用	ピッチ	$F(1,3)=9.066$, $p=.057$		
	場合	$F(1,3)=1.129$, $p=.366$, *n.s.*		
	交互作用	$F(1,3)=0.231$, $p=.664$, *n.s.*		

表 42 に示したように、ピッチと場合との交互作用は、$F(1,3)=0.231$, $p=.664$, *n.s.* で存在していないと考えられる。また、下記の表 43 と表 44 の分析結果からわかるように、各場合の 1 拍目の最高値は共に 2 拍目の最低値より高いという有意傾向が得られたが、【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合の最低値に有意な差が得られなかった。言い換えれば、上級学習者は「だから」に共通の「高－低」パターンは学習しているが、最低ピッチによる【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合の区別は学習していない。つまり、上級学習者は中級学習者と同様に、聞き手の事態に対する認識が十分か否かを区別せずに、同じような「だから」のピッチ操作の仕方をしていることが明らかになった。

表 43　上級学習者が各場合に使用した「だから」のピッチ変動の比較

場合	(I)　ピッチ	(J)　ピッチ	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
【聞き手認識十分】	最高値	最低値	4.190	1.367	.055	-.162	8.542
【聞き手認識不十分】	最高値	最低値	4.022	1.382	.062	-.376	8.421

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

表 44　上級学習者が各場合に使用した「だから」の最高値と最低値の比較

ピッチ	(I)　場合	(J)　場合	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率 [a]	95% 平均差信頼区間 [a]	
						下限	上限
最高値	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	1.211	.931	.284	-1.752	4.173
最低値	【聞き手認識十分】	【聞き手認識不十分】	1.043	1.201	.449	-2.779	4.865

a. 多重比較の調整： Bonferroni。

6.5.3. 本節のまとめ

中級学習者と上級学習者が各場合に使用した日本語談話標識「だから」の持続時間長とピッチ変動の特徴を以下でまとめる。

中級学習者と上級学習者は 1 拍目「だ」を常に 2 拍目「か」よりも高いピッチで発音することは学習している。しかしながら、中級学習者と上級学習者は「だから」の各拍の持続時間長とピッチ変動を利用して日本語母語話者のように【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合を正しく区別することができない。すなわち、中級学習者と上級学習者にとって「だから」の韻律的操作によって使用場合を区別することは学習されていないといえよう。

6.6. 考察

本章は主に、中級・上級レベルの中国語母語学習者が日本語談話標識「でも」「だから」を使用する際の音声的実現について、日本語母語話者の使用状況と比較しつつ分析したものである。

音響分析の結果からわかるように、中級学習者と上級学習者は日本語母語話者のように日本語談話標識「でも」「だから」の持続時間長とピッチ変動によっ

て使用場合を区分することを学習していない。本論文が新たに提案した日本語談話標識「でも」「だから」の 2 つの談話機能は、第 3 章と第 4 章でも論じた通りに、発話者が使用した「でも」「だから」の持続時間長とピッチ変動といった韻律要素の調整に大きく関わっている。しかしながら、中級学習者と上級学習者は日本語母語話者のように使用場合の異なりを区別するために日本語談話標識「でも」「だから」の音声的実現を正しく調整することができない。したがって、中級学習者と上級学習者は日本語談話標識「でも」「だから」を用いて自分の意図した効果を得ることができないか、もしくは自分の意図に反した効果を得てしまうという可能性があると考えられる。

6.7. 本章のまとめ

本章では、まず、本章の分析資料、分類と音響分析の仕方を説明した。それから、中級・上級レベルの中国語母語学習者が使用した日本語談話標識「でも」「だから」の持続時間長とピッチ変動という音声的特徴を明らかにした。以下の表 45 は本章の考察結果のまとめである。

表 45　中級学習者と上級学習者の「でも」「だから」の音声的特徴

グループ	項目	でも	だから
中級学習者	持続時間長	場合の区別なし	場合の区別なし
	ピッチ操作	異なった区別の仕方 (最高ピッチによる)	場合の区別なし
上級学習者	持続時間長	場合の区別なし	場合の区別なし
	ピッチ操作	場合の区別なし	場合の区別なし

本章の調査結果を通して明らかになったのは、中級学習者と上級学習者が使用した日本語談話標識「でも」「だから」の音声的実現には、日本語母語話者のような使用傾向が見られなかったことである。日本語母語話者と異なった使い方がなされているため、日本語母語話者が学習者の発話意図を理解する際の妨げになる可能性があると考えられる。

第 7 章 結論

7.0. はじめに

本論文では、第 1 章「序論」と第 2 章「先行研究」で本論文の背景知識と問題意識を提示した。

本論を構成する第 3 章「日本語談話標識『でも』に関する考察」と第 4 章「日本語談話標識『だから』に関する考察」で、日本語母語話者が日本語談話標識「でも」「だから」を使用する際の韻律的特徴と談話機能を説明した。

第 5 章「中国語母語学習者の会話における『でも』『だから』の使用位置及び共起表現に関する考察」と第 6 章「中国語母語学習者の会話における『でも』『だから』の音声的実現に関する考察」で、中級・上級レベルの中国語母語学習者の日本語談話標識「でも」「だから」の使用位置、共起表現と音声的実現の使用実態を日本語母語話者の結果と比較しながら考察した。

この章では、本論文の主な研究結果をまとめてから、日本語教育への応用及び今後の課題を示す。

7.1. 主な研究結果

本論文全体は第 2 章で提示した諸先行研究の考察済み及び未考察の項目の一覧表にしたがって、諸先行研究の未考察の項目を考察したものであり、その結果は以下のようにまとめられる。

表 46　諸先行研究の考察済み及び未考察の項目の一覧（表 2 の再掲）

		談話標識の使用	音響パターン	本論文の取り扱い
母語話者	でも	✔	①	第 3 章
	だから	✔	②	第 4 章
学習者	でも	③	④	第 5・6 章
	だから	③	④	

①　［母語話者が「でも」を使用した際の音響パターン及び談話機能との対応］

日本語母語話者が使用した日本語談話標識「でも」の先行発話と後続発話の間に A と否 A の関係があるか否かに注目して音響分析を行い、以下のような結果が得られた。

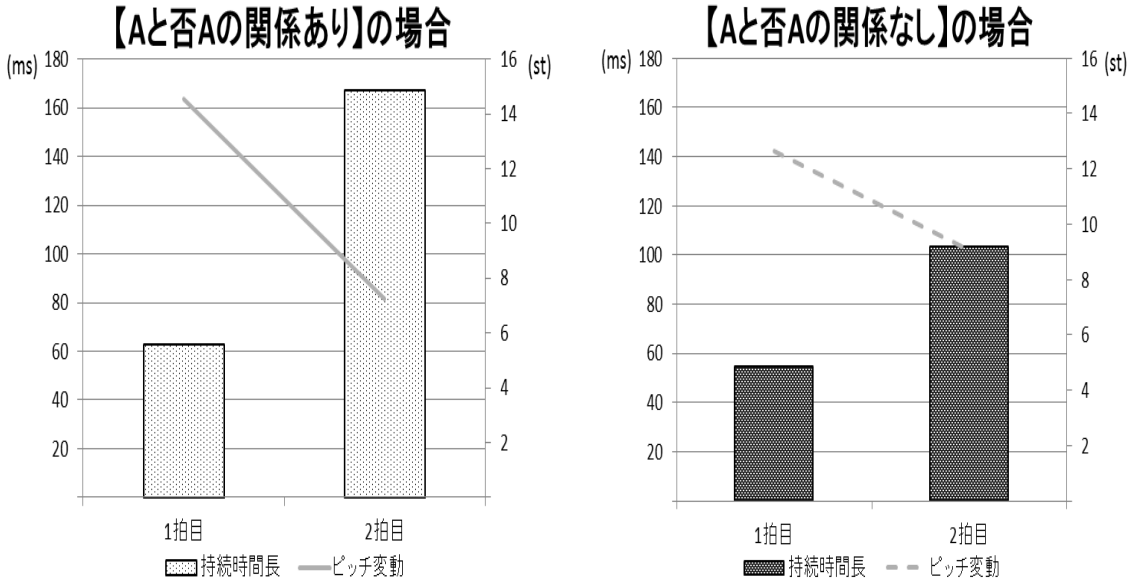

図 33　「でも」の場面別音声実現の比較

「でも」の持続時間長については、【A と否 A の関係あり】の場合に使用した「でも」は【A と否 A の関係なし】の場合より、全体の長さが 73 ms ほど長く、2 拍の中で特に 2 拍目が 64 ms も長かったことが観察された。

一方、「でも」のピッチ変動については、【A と否 A の関係あり】の場合に使用した「でも」の 2 拍目の最低値が【A と否 A の関係なし】の場合より 1.78 st 程度低くなり、「でも」のピッチ下降幅が 3.66 st も大きかったことが見られた。

こうした日本語談話標識「でも」の韻律的特徴を踏まえ、日本語母語話者が【A と否 A の関係あり】の場合と【A と否 A の関係なし】の場合に使用した日本語談話標識「でも」の談話機能を、対立予告と話題移行の 2 つの機能に帰納した。

②［母語話者が「だから」を使用した際の音響パターン及び談話機能との対応］

相互作用の観点から日本語談話標識「だから」の使用を【聞き手認識十分】の場合と【聞き手認識不十分】の場合に分け、それぞれの場合に用いた日本語談話標識「だから」の音声的実現を考察し、以下のような結果が得られた。

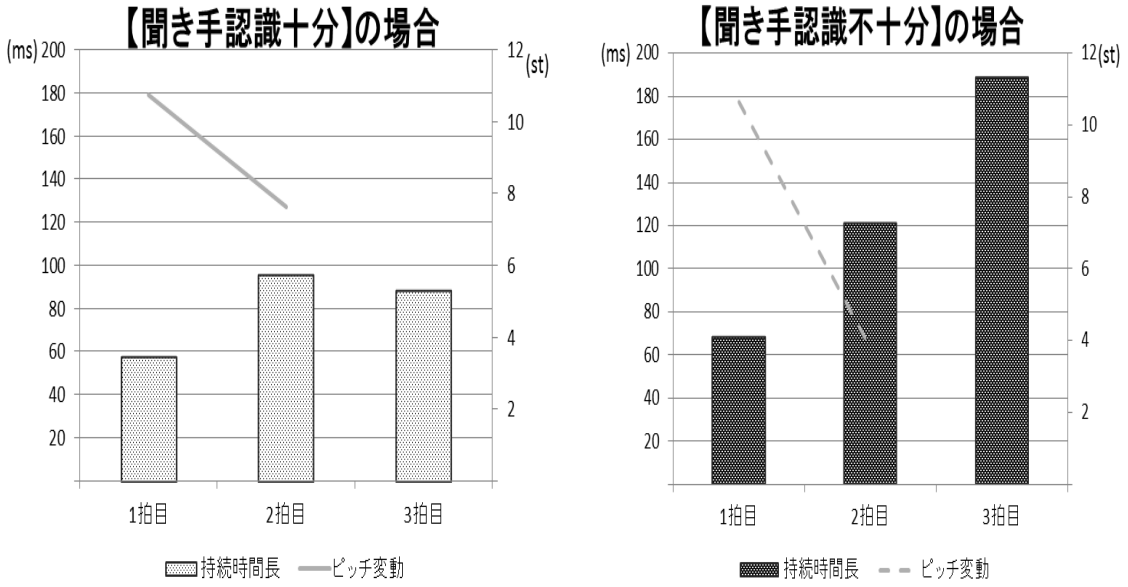

図 34　「だから」の場面別音声実現の比較

「だから」の持続時間長については、【聞き手認識不十分】の場合に使用した「だから」は【聞き手認識十分】の場合より、全体の長さが 134 ms ほど長く、3 拍の中で特に最終拍「ら」が 99 ms も長かったことが計測された。

一方、「だから」のピッチ変動については、【聞き手認識不十分】の場合に使用した「だから」の 2 拍目の最低値が【聞き手認識十分】の場合より 3.82 st 程度低く発音され、「だから」のピッチ下降幅が 3.74 st も大きかったことが観察された。

こうした日本語談話標識「だから」の韻律的特徴を根拠とし、日本語談話標識「だから」の談話機能を、結論提出と理解要請という 2 つの機能にまとめた。

③ ［中国語母語学習者の談話標識「でも」「だから」の使用位置と共起表現］

中級・上級レベルの中国語母語学習者が会話で使用する日本語談話標識「でも」「だから」の使用位置と共起表現を、日本語母語話者の場合と比較しながら

考察を行った。その結果は以下の通りである。

・中級・上級レベルの中国語母語学習者の日本語談話標識「でも」「だから」の使用割合は日本語母語話者の使用割合を遥かに超えている。

・日本語談話標識「でも」「だから」の使用位置については、中級・上級レベルの中国語母語学習者は日本語母語話者のように、発話中途部での使用が多く観察された。

・日本語談話標識「でも」「だから」の共起表現については、中級学習者は発話冒頭部で何も加えずに日本語談話標識「でも」「だから」を使用し、発話中途部で 1 つの文を完結してから日本語談話標識「でも」「だから」を使用する特徴がある。上級学習者は発話冒頭部で直接に日本語談話標識「でも」「だから」を用い、発話中途部で言いよどみながら日本語談話標識「でも」「だから」を使用する特徴が見られた。全体的には、中国語母語学習者の日本語能力が上達するにつれ、徐々に日本語母語話者に近づいていく傾向があった。

④ ［中国語母語学習者の談話標識「でも」「だから」の音声的実現］

中級・上級レベルの中国語母語学習者が会話で使用する日本語談話標識「でも」「だから」の音声的実現を、日本語母語話者の結果と比較しつつ考察した。その結果、以下の点が明らかになった。

・中級学習者と上級学習者は日本語の「でも」「だから」に共通の「高-低」パターンを学習している。

・全体的には、使用場合が異なるにも関わらず、中級学習者と上級学習者が「でも」と「だから」を使用する際の持続時間長とピッチ変動には相違が見られず、同じパターンで発音する傾向があった。すなわち、中級学習者と上

級学習者が使用した日本語談話標識「でも」「だから」の音声的実現には、日本語母語話者のように、「でも」「だから」の各拍の持続時間長とピッチ変動を用い、正しく場合を区別するという使用傾向が見られなかった。

7.2. 日本語会話教育への応用

音声による情報伝達過程の中で、聞き手は話し手から伝えられた言語情報とパラ言語情報によって話し手の意図・意識を解釈する。そのうちの 1 つに欠陥があれば、ディスコミュニケーションになる可能性が高いと考えられる。本論文の結果が示したように、中国語母語学習者が日本語談話標識「でも」「だから」を使用する際の言語形式と音声的実現は日本語母語話者と異なる部分が多い。したがって、日本語母語話者の相手に誤解をもたらし、ディスコミュニケーションになる可能性が少なくない。こうしたディスコミュニケーションを未然に防ぐために、学習者に以下のような指導が必要ではなかろうか。

まず、本論文の結果からわかるように、中国語母語学習者には日本語談話標識「でも」「だから」を頻繁に使用する傾向が見られた。齊藤（1993）によると、日本語学習者の発話が単文レベルの段階から一まとまりの段落を含む談話レベルの段階になるとき、その結束性を高める言語形式としては、「でも」「だから」などの接続語句の応用がまず起きるが、易しいレベルの接続詞のみで文を関連付けていくのは、かえって幼稚な感じを与える。また、日本語学習者がもつ接続詞のレパートリーの少なさもよく指摘されている（伊豆原・嶽，1992；杉田，1994；近藤，2004）。杉田（1994）が説明したように、相反事象の接続詞としては「しかし」や「だが」もあり得るが、日本語学習者が実際に用いたのは「でも」だけであった。そこで、接続助詞をうまく運用し、同じ形式を繰り返し使

用しないといった接続表現のバリエーションを増やすように指導する必要があると思われる。

次に、非母語話者を対象とした日本語教育において、発話の自然性に大きく関与する韻律の指導に対する重要性が認識されているが、教室活動に計画的に取り入れられている場合は少ない。アクセント言語の日本語の音声による感情表出には持続時間長とピッチ変動が大きく関わっていると考えられる。そこで、本論文の調査を通して明らかになったこと、つまり日本語母語話者が日本語談話標識「でも」「だから」を使用する際の音声の韻律によって発話の意図を区別することを予め学習者に教え、日本語母語話者と中国語母語学習者が様々な場面で使用した日本語談話標識「でも」「だから」の音声資料とピッチ曲線の視覚表示を提示する。このようにして中国語母語学習者と日本語母語話者にみられる特徴の差を明示化することができれば、中国語母語学習者がより自然で理解されやすい韻律を修得する手助けとなるであろう。またそれと同時に、日本語の韻律の高さと長さの適切な制御が重要であることに対する中国語母語学習者の意識と関心を高めることができると考えられる。

最後に、本論文の調査で明らかにした中国語母語学習者の使用上の問題点と習得の難しい項目を丹念に指導する。

従来の日本語教育では、他のコミュニケーション能力より、学習者の「文法能力」だけを重要視する傾向があった。しかし、人間が他者とやりとりする場合、重要になるのは、「何が」話されているかということだけではなく、「どのように」話されているかということも、否応なしにわれわれに影響する（ニック・キャンベル, 2001）。また、ネウストプニー（1995）の言う通り、「外国人話者」というラベルが貼られるのは、文法的な誤用のためだけではなく、むしろコミュニケーションの文法外の要素が重要な要因であり、日本語教育が、外国

人が日本人と同等の立場で普通の話し手としてコミュニケーションできるようになることを目指すものであるなら、文法外のコミュニケーション規則を重要な研究対象としなければならない。

文字表記上は同一の文であるが、音声の韻律の違いによって発話者の発話意図が全く異なる方向に捉えられるようになることがしばしば観察される。例えば、相づちの「そうですか」の末尾は上昇しない傾向が強いが、松崎（2001）によれば、話の途中で「あ、そうですか⤴」のように末尾を上昇して何度も言われたら、話し手は会話を続けるのが嫌になりかねない。土岐（1989）が次に指摘しているように、話し手の意図せぬものによる誤解こそ日本語教育が重視すべきものである。

> 聞き手に全く通じないのであれば、すぐに聞き返され、発話者にはくり返したり、他の表現に切り替えるなどして伝達作業を完遂させる機会も残されるが、(話者の意図しない意味や感情を伴って理解されてしまう誤解は)、一見伝達作業が完了したかのような形で終わってしまうため、後々問題が起きやすい。多少、余分な時間を費やしても修復の機会が与えられる場合はよいが、ひどい場合になると人間関係に軋轢が生じたり、発話者の能力や人格の評価にまで影を落としかねない。
>
> （土岐，1989：113）

本論文で明らかにしたことが、中国語母語学習者を対象とする日本語会話教育の改善に少しでも貢献できるならば幸いである。

7.3. 今後の課題

本論文では日本語談話標識「でも」「だから」の使用を包括的に捉えるために、日本語母語話者が発話する際の韻律的特徴、談話機能、使用位置と共起表現について考察した。また、中国語母語学習者の日本語談話標識「でも」「だから」の使用実態を示すために、日本語母語話者の結果と比較しつつ、中級・上級レベルの中国語母語学習者の使用位置、共起表現と音声的実現を分析した。今後この研究の発展の可能性としていろいろな方向性が考えられる。

・日本語母語話者と中国語母語学習者の標本数を増やし、本論文の分析結果が適用できるか否かを確かめる必要がある。

・本論文の音響分析の部分では主に声の持続時間長（長さ）とピッチ変動（高さ）を対象としたが、今回扱わなかった声の韻律を構成するインテンシティー（大きさ）のようなほかの要素を考慮する必要もあろう。

・調査対象者の発話当時の使用意識は学習者の特殊な使い方の重要な要因となっていると考えられるため、調査対象者の使用意識を探求するフォローアップ・インタビューを実施する必要がある。

・ 昇地ほか（2007）は、韻律的特徴の使い分けによって表された「ぞんざい」「苛立ち」「丁寧」など 12 種類の発話態度を、日本語母語話者と非日本語母語話者が正しく認識できるかを調べる知覚実験を行った。その結果、非母語話者には正しく認識されない発話態度があったものの、日本語母語話者に関しては 12 種類全ての発話態度は韻律的特徴のみを手掛かりに正しく認識されたことが示された。今後、本論文の音響分析の結果は日本語母語話者を対象とする聴取実験を行うことによって裏付けられると同時に、日本語学習者を対象とした知覚実験を行う必要があると考えられる。

・ 本論文は中国語母語学習者を分析対象としたが、今後は母語が中国語以外の

言語の学習者でも本論文と同じような結果が得られるか否かを検証していきたい。

・ 本論文では自然発話を分析資料として考察を行った。この結果の有効性は、録音室発話の利用や合成音声などを使った実験によって今後検証していきたい。

・本論文が分析資料として使用した学習者のコーパスは必ずしも満足のいくものではないため、今後は、筆者が長年コーパスの作成や使用に携わった経験を活かし、音声資料を蓄積し、より完全な学習者のコーパスの構築に取り組んでいきたい。

以上に挙げたものを今後の研究課題としたい。

引用文献

<和文>

伊豆原英子・嶽逸子（1992）「中・上級学習者の話し言葉（独話）の分析と考察--情報伝達を通して」『日本語教育』77,pp.103-115.

岩澤治美（1985）「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56,pp.39-50.

宇佐美まゆみ（2003）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese:BTSJ）」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』,平成 13-14 年度科学研究費補助金基盤研究 C（2）研究成果報告書,pp.4-21.

内田治（2006）『すぐわかる SPSS によるアンケートのコレスポンデンス分析』東京図書株式会社

岡本真一郎・多門靖容（1998）「談話におけるダカラの諸用法」『日本語教育』98,pp.49-60.

小田三千子（1993）「談話標識じゃ（では）と Well の機能を巡って」『東北学院大学論集』104,pp.17-24.

加藤英司（1984）「接続詞・接続助詞の使用頻度と日本語能力との関係」『日本語教育』53,pp.139-148.

加藤薫（1995）「“原因・理由”を受けない「だから」–「だから」の主体的側面の突出」『早稲田日本語研究』3,pp.14-31.

籠宮隆之（2004）「音声収録作業の概要」
http://www.kokken.go.jp/katsudo/seika/corpus/public/manuals/recording.pdf
（2009/05/10 閲覧）

川口容子（1991）「接続表現の機能に関する一考察－ディスコースマーカー「but」,

「でも」の標すものー」『日本女子大学紀要　文学部』41,pp.159-168.

川森雅仁・川端豪・島津明（1995）「談話標識語の音韻的研究」『電子情報通信学会技術研究報告』95-169,pp.53-60.

倉持益子・鈴木秀明（2007）「日本語学習者における接続詞の習得－留学生の接続詞使用状況」『神田外語大学紀要』19,pp.211-234.

グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』　くろしお出版

クワンチャイ・セークー（1999）「会話における接続詞の「でも」について」『東京外国語大学日本研究教育年報』3,pp.21-42.

小西いずみ（2003）「会話における「ダカラ」の機能拡張-文法機能と談話機能の接点」『社会言語科学』6-1,pp.61-73.

近藤邦子（2004）「香港の大学における日本語学習者によるストーリーテリングの接続表現の問題点」『早稲田大学日本語教育研究』5,pp.77-91.

齊藤真理子（1993）「The Oral Proficiency Interviewに表れた談話の分析–中級と上級の談話の型の違いについて–」『文化女子大学紀要　人文–社会科学研究』創刊号,pp.31-41.

昇地崇明・Ve´ronique Auberge´・Albert Rilliard（2007）「第3章 発話態度の文化的特性と「偽の友達」日仏語の対照研究を通して」定延利之・中川正之（編）『音声文法の対照（シリーズ言語対照〈外から見る日本語〉第1巻)』,pp. 55-78. くろしお出版

杉田くに子（1994）「日本語学習者による独話の研究」『日本語研修コース修了生追跡調査報告書』,pp.152-159.　名古屋大学留学生センター

椙本総子（1993）「会話構成単位と談話標識との関わり－「じゃ」を手がかりに」『日本語・日本文化研究』3,pp.105-120.

曺永湖（1996）「談話における「でも」の機能について」『文化』59-3.4,pp.217-230.

谷崎和代（1994）「談話標識についての一考察－「だから」を中心に」『大阪大学言語文化学』3,pp.79-93.

陳相州（2008）「日本語会話データに見られる対比談話標識間の使用実態」『言葉と文化』9,pp.237-252.

土岐哲（1989）「音声の指導」寺村秀夫（編）『講座日本語と日本語教育第 13 巻　日本語教育教授法（上）』,pp.111-138.　明治書院

新村知子（1996）「独話における接続詞・接続助詞表現の特徴－日本人大学生と外国人留学生の比較において－」『金沢学院大学文学部紀要』1,pp.56-63.

西野容子（1993）「会話分析について－ディスコースマーカーを中心として－」『日本語学』12-5,pp.89-96.

ニック・キャンベル（1997）「4.プラグマティック・イントネーション：韻律情報の機能的役割」音声文法研究会（編）『文法と音声Ⅰ』,pp. 55-74.　くろしお出版

――――――――（2001）「9.発話音声の特徴–音声文法からの観点–」音声文法研究会（編）『文法と音声Ⅲ』,pp. 161-182.　くろしお出版

ネウストプニー,J.V.（1995）『新しい日本語教育のために』　大修館書店

萩原孝恵（2007）「因果関係を表さない「だから」の存在」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』2,pp.1-13.

蓮沼昭子（1991）「対話における「だから」の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要』4,pp.137-152.

浜田麻里（1995）「サテ、デハ、シカシ、トコロデー転換の接続詞－」『日本語類義表現の文法　下』,pp.600-607.　くろしお出版

――――（1997）「話し言葉におけるダカラの分析試論」『大阪大学留学生セン

ター研究論集　多文化社会と留学生交流』創刊号,pp.103-111.

稗田三枝（2003）「会話の展開と談話標識－談話標識「でも」に焦点を当てて」『日本語・日本文化研究』13,pp.193-202.

日野資成（2003）「「しかし」と「でも」の談話分析」『福岡女学院大学紀要　人文学部編』13,pp.75-91.

広瀬浩三（2003）「関連性理論から見た談話標識」『島大言語文化』14,pp.21-41.

前川喜久雄・吉岡泰夫（1997）「発話の丁寧さに対する語彙的要因と韻律的要因の寄与」『国語学』190,pp.131-120.

前川喜久雄・北川智利（2002）「音声はパラ言語情報をいかに伝えるか」『認知科学』9-1,pp.46-66.

前川喜久雄他（2005）『日本語話し言葉コーパス』　国立国語研究所

松崎寛（2001）「日本語の音声教育」城生佰太郎（編）『日本語教育学シリーズ第 3 巻　コンピュータ音声学』,pp.207-258.　おうふう

メイナード・K・泉子（1993）『会話分析』　くろしお出版

――――――――――（2004）『談話言語学』　くろしお出版

――――――――――（2005）『談話表現ハンドブック：日本語教育の場合で使える』　くろしお出版

山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』　くろしお出版

林淑璋（1999a）「会話分析と談話標識－「で」「だから」を手がかりに」『言語情報科学研究』4,pp.335-358.

―――（1999b）「会話における「で（それで）」と「だから」の意味・機能－日本語教科書会話文の分析を通して－」『台湾日本語教育論文集』3,pp.183-200.

―――（2000）「語用論から見た談話標識「じゃ」－関連性と文脈理解－」東呉大学日本語文学系（編）『日本語教育国際シンポジウム論文集』,pp.225-244.

東呉大学日本語文学系

―――（2001）「台湾華語会話における転折連詞に関する一考察－「可是」と「但是」を手がかりに」『言語情報科学研究』6,pp.283-303.

―――（2002）「「情報構造」と「対話構造」における接続詞の機能－「（それ）で」・「だから」・「じゃ」－」東呉大学日本語文学系（編）『日本語教育国際シンポジウム論文集』,pp.297-316.　東呉大学日本語文学系

渡邊亜子（1996）『中・上級日本語学習者の談話展開』　くろしお出版

<英文>

Aijmer,K. & Simon-Vandenbergen,A.-M.（eds.）　（2006）　*Pragmatic markers in contrast*.　Tokyo:Elsevier.

Bakeman, R. & Gottman, J. M. （1986）　*Observing Interaction:an Introduction to Sequential Analysis*.　New York：Cambridge University Press.

Blakemore,D.（1987）　*Semantic constraints on relevance*.　Oxford:Blackwll.

――――――（1992）　*Understanding Utterances*.　Oxford:Blackwell.

Brown,P. & Levinson,S.C.（1987）　*Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge:University Press.

Campbell,N.（2000）Databases of emotional speech.　*Proceedings of the ISCA Workshop on Speech and Emotion: A Conceptual Framework for Research*, pp.34-38.

Downing,A.（2006）　The English Pragmatic Markers surely and its Functional Counterparts in Spanish.　In Aijmer,K. & Simon-Vandenbergen,A.-M. （eds.）*Pragmatic markers in contrast*, pp.39-58.　Tokyo:Elsevier.

Fraser,B.（1990）　An approach to discourse markers.　*Journal of Pragmatics* 14,

pp.383-395.

――――（1996） Pragmatic Markers. *Pragmatics* 6-1, pp.167-190.

――――（2006） On the Universality of Discourse Markers. In Aijmer,K. & Simon-Vandenbergen,A.-M.（eds.） *Pragmatic markers in contrast*, pp.73-92. Tokyo:Elsevier.

Fraser,B. & Malamud-Makowski,M.（1996） English and Spanish contrastive discourse markers. *Language Sciences* 18, pp.863-881.

Grice,P.（1989） *Studies in the way of words*. Cambridge, Mass.:Harvard University Press.（清塚邦彦訳 1998 『論理と会話』勁草書房）

Halliday,M.A.K. & Hasan,R.（1976） *Cohesion in English*. London:Longman.（安藤貞雄他訳 1997 『テクストはどのように構成されるか』ひつじ書房）

Johansson,S.（2006） How well can WELL be translated? On the English discourse particle WELL and its correspondences in Norwegian and German. In Aijmer,K. & Simon-Vandenbergen,A.-M.（eds.） *Pragmatic markers in contrast*, pp.115-137. Tokyo:Elsevier.

Leech,G.（1983） *Principles of pragmatics*. New York:Longman.

Maynard,S.K.（1989） Functions of the discourse marker Dakara in Japanese conversation. *Text:an interdisciplinary journal for the study of discourse* 9-4, pp.389-414.

――――――（1993） *Discourse Modality: Subjectivity, emotion and voice in the Japanese language*. Amsterdam:John Benjamins.

Mizutani,O. & Mizutani,N.（1981） *Nihongo Notes* 4. Tokyo:The Japan Times.

Östman,J.-O.（2006） Constructions in Cross-Language Research:Verbs as Pragmatic Particles in Solv. In Aijmer,K. & Simon-Vandenbergen,A.-M.（eds.） *Pragmatic*

markers in contrast, pp.237-257. Tokyo:Elsevier.

Rouchota,V.（1996） Discourse connectives: what do they link?. *UCL Working Papers in Linguistics* 8, pp.199-212.

Schiffrin,D.（1987） *Discourse Markers*. Cambridge:Cambridge University Press.

Schourup,L.（1999） Discourse markers. *Lingua* 107, pp.227-265.

Stenstrom,A.-B.（2006） The Spanish Discourse Markers o sea and pues and their English Correspondences. In Aijmer,K. & Simon-Vandenbergen,A.-M.（eds.） *Pragmatic markers in contrast*, pp.155-172. Tokyo:Elsevier.

van dijk,T.（1979） Pragmatic connectives. *Journal of Pragmatics* 3-5, pp.447-456.

付録資料ー宇佐美（2003）の文字化原則

発話内容の記述に関する記号

。	[全角] 1発話文の終わりにつける。
,,	発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。
、	① [全角]1発話文および1ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。 ② 発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
‘　’	① 複数読み方があるものを漢字で表す場合、最も一般的な読み方ではなく、特別な読み方で発せられたことを示すために、その読み方を平仮名で‘ ’に入れて示す。 ② 通常とは異なる発音がなされた場合など、音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、‘ ’の中に正式な表記をする。
『　』	視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるもの、例えば、本や映画の題名のような固有名詞や、発話者がその発話の中で漢字の読み方を説明したような部分等は、『 』でくくる。
"　"	発話中に、話者及び話者以外の者の発話・思考・判断・知覚などの内容が引用された場合、その部分を" "でくくる。
?	疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても、語尾を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末(発話文末)なら「?。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには、発話中に「?、」をつける。

??	確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。
[↑][→][↓]	イントネーションは、特記する必要のあるものを、上昇、平板、下降の略号として、 [↑][→][↓]を用いる。
/少し間/	話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。
/沈黙 秒数/	1秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。沈黙自体が何かの返答になっているような場合は1発話文として扱い1ライン取るが、基本的には、沈黙後に誰が発話したのかを同定できるように、沈黙を破る発話のラインの冒頭に記す。
= =	改行される発話と発話の間(ま)が、当該の会話の平均的な間(ま)の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。これは、2つの発話(文)について、改行していても音声的につながっていることを示すためである。その場合、最初のラインの発話の終わりに「=」をつけてから、句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。そして、続くラインの冒頭に「=」をつける。
…	文中、文末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。
< >{<}	同時発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< > の後に、{<}をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。
< >{>}	重ねた方の発話には、< >の後に、{>}をつける。
【【 】】	[全角]第1話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第2者の発話が始まり、結果的に第1話者の発話が終了した場合

は、「【【 】】」をつける。結果的に終了した第1話者の発話文の終わりには、句点「。」の前に 【【 をつけ、第2話者の発話文の冒頭には 】】 をつける。

[　　]　文脈的情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、音声上の特徴(アクセント、声の高さ、大小、速さ等)のうち、特記の必要があるものなどをそのラインの一番最後に記しておく。

(　　)　短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、( )にくくって入れる。

<　　>　笑いながら発話したものや笑い等は、<　>の中に、<笑いながら>、<2人で笑い>などのように説明を記す。笑い自体が何かの返答になっているような場合は1発話文となるが、基本的には、笑いを含む発話中か、その発話文の最後に記し、その後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。

(<　>)　相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(<笑い>)とする。

#　聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、#マークをつける。

「　　」　トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。